長崎県文化財調査報告書　第174集

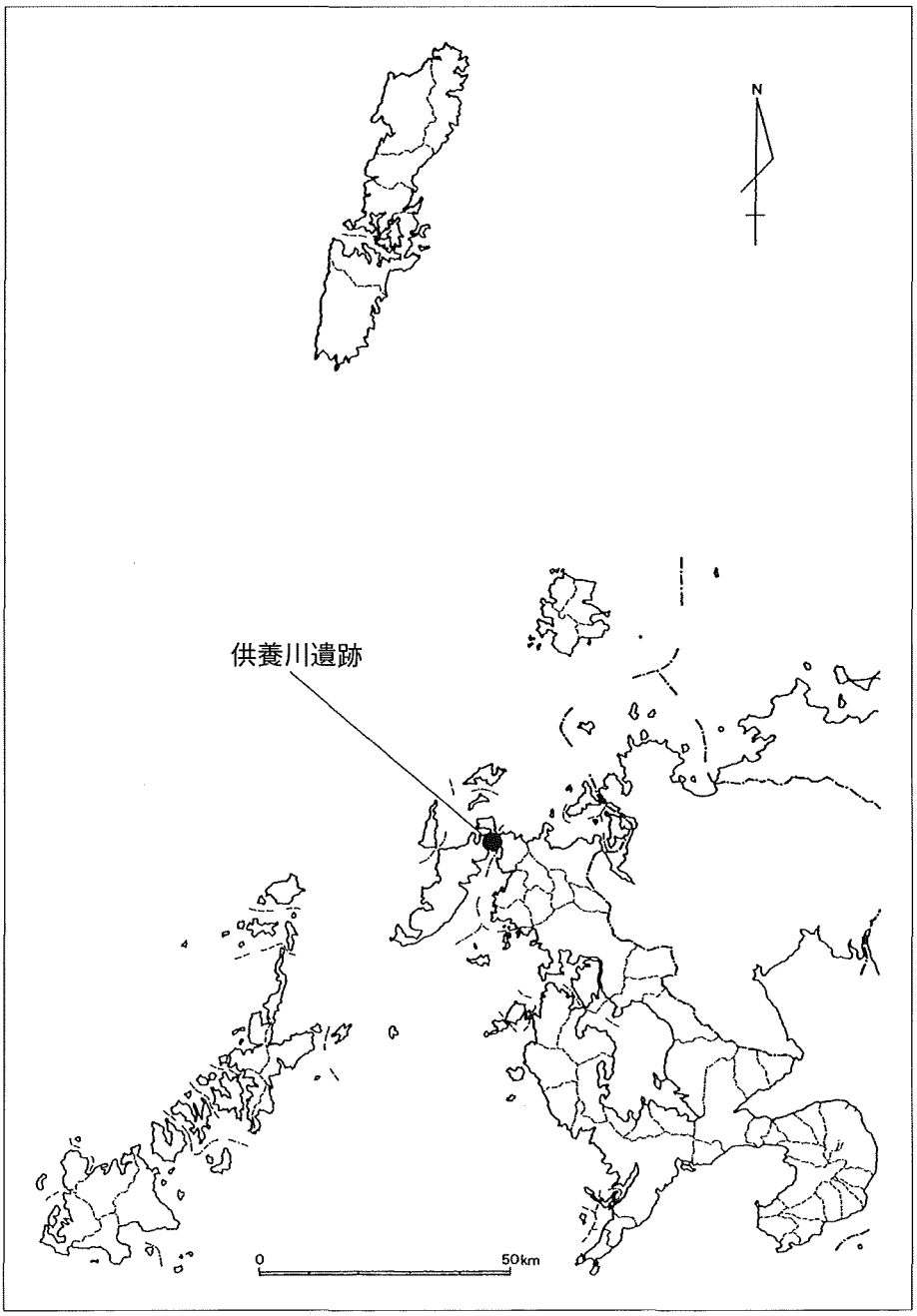
供養川遺跡

2003

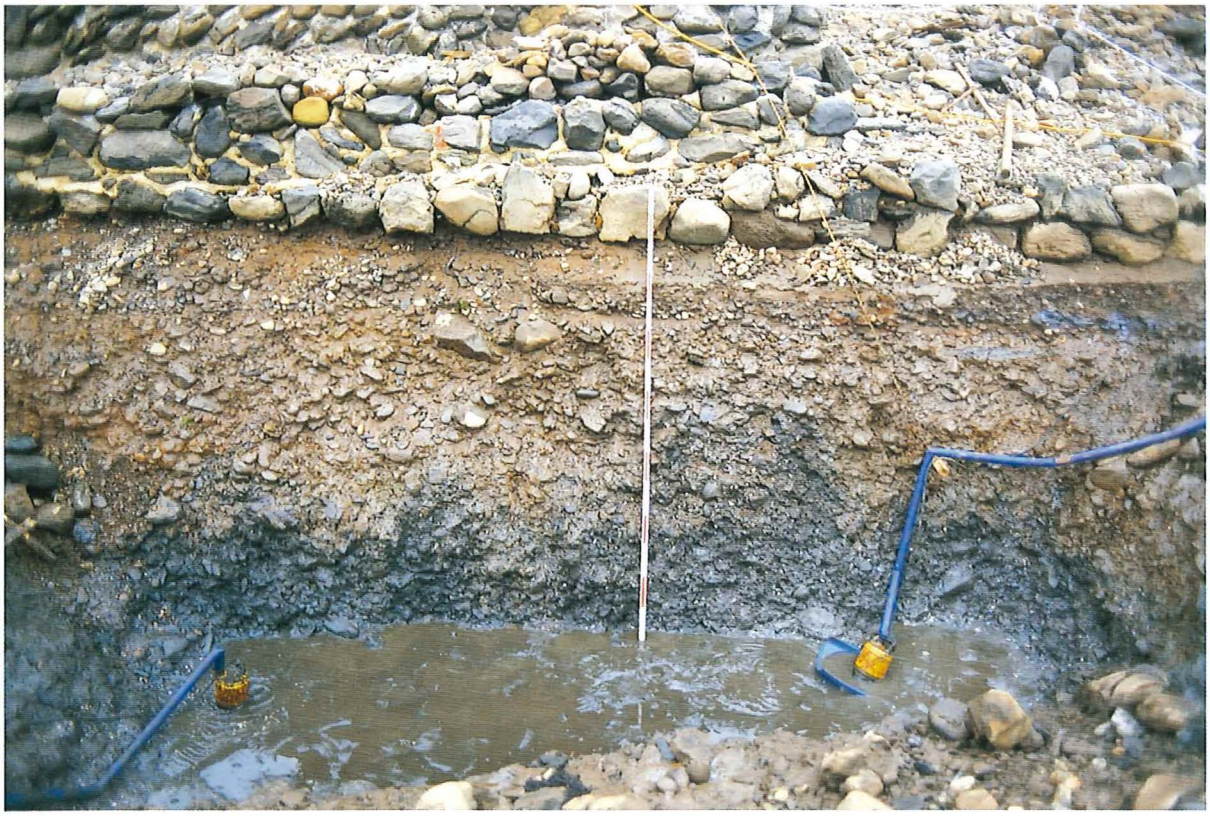
長崎県教育委員会

KU YOU GAWA

供養川遺跡



遺跡遠景（潮の流れを確認できる）



G・H1区北壁（満潮時は写真画面上端まで海に没する）

供養川遺跡出土の主な土器・石器

発刊にあたって

この報告書は，平戸港（小川地区）海岸保全工事に伴って実施した供養川遺跡の発掘調査報告書です。

長崎県では，満潮の時には海水におおわれてしまう縄文時代前期に属する遺跡が数多く知られていますが，この供養川遺跡もその中の一つです。

今回の発掘調査の結果，遺跡は平戸瀬戸に面し，その当時の生活状況がわかる縄文時代前期の土器や石器の包含層が存在したことが確認されました。とくに石器については、木の伐採や加工に使った磨製石斧や船の碇として利用したと考えられる大型の石の錘も出土しています。

平戸港は，古くは７世紀の古代から遣唐使船の寄港地として知られ，その後，中世には平戸和蘭商館が設置されて国際色豊かな港として栄えましたが，今回の調査の結果，縄文時代にも，この平戸瀬戸を利用して暮らしていたことがわかりました。

最後に，本書が県民の埋蔵文化財に対する理解と愛護に繋がり，学術文化の向上に広く活用されることを祈念するとともに，発掘調査の実施にあたりましてご協力をいただきました地元関係者ならびに教育委員会の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成１５年３月３１日

長崎県教育委員会教育長

木村　道夫

例　言

1．本書は平戸市大久保町供養川に所在する，供養川遺跡の調査報告書である。

2．調査は田平土木事務所を事業主体とし，長崎県教育庁学芸文化課が委託を受け，範囲確認調査を平成13年６月４日から平成13年６月８日までと，同年６月20日から６月22日まで，本調査を平成14年６月３日から平成14年８月20日まで実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

範囲確認調査　長崎県教育庁学芸文化課
　　主任文化財保護主事　村川　逸朗
　　文化財保護主事（現県立小浜高校教諭）　山口　浩司
本調査担当　長崎県教育庁学芸文化課
　　主任文化財保護主事　村川　逸朗
　　文化財保護主事　本田　秀樹
　　文化財調査員　井立　尚
　　同上　樋口　健太郎
　　佐世保教育事務所
　　文化財保護主事　寺田　正剛

4．本書は，各章ごとに分担執筆し，土器を井立，石器を村川が執筆した。

5．遺物の実測は，土器の実測・拓本を井立。石器を荒木美保子，中村弘子が担当し，トレースについては土器を佐藤いづみが行い，石器は渡辺洋子の協力を得て村川が行った。

6．本書における図面・写真・遺物については，長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室に保管している。

7．範囲確認調査時の石垣については，奈良県立橿原考古学研究所研究員北垣聡一郎氏に所属時期の比定をお願いした。また，独立行政法人文化財研究所，奈良文化財研究所主任研究員松井章氏には調査の現地指導と自然遺物（獣骨）の鑑定をお願いした。

8．長崎県立美術博物館館長下川達彌氏には石器実測指導等を御協力いただいた。

9．自然化学分析は（株）古環境研究所に依頼した。

10．姫神社遺跡採集の土器・石器（石斧）については，姫神社宮司森川氏のご厚意により社務所所蔵の資料紹介をさせていただいた。

11．現場での土層写真・調査写真は，調査担当者が撮影し，遺物写真については石器・巻頭カラーを村川，土器を井立が撮影した。

12．自然遺物（貝類）の同定及び石器計測表の作成を樋口が行った。

13．本書の編集は村川・井立による。

本 文 目 次

頁

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境 …… 1（井立）

第２節　歴史的環境

１．平戸島における主な縄文時代の遺跡 …… 1（〃）

２．供養川遺跡と同時代の周辺遺跡 …… 2（〃）

第３節　姫神社遺跡採集の土器・石器（石斧等） …… 3（井立・村川）

第Ⅱ章　範囲確認調査

第１節　調査の経緯と調査 …… 10（村川）

第２節　層位 …… 12（〃）

第３節　遺構 …… 12（〃）

第４節　出土遺物 …… 12（〃）

第５節　まとめ …… 13（〃）

第Ⅲ章　本調査

第１節　調査の経緯と調査 …… 14（〃）

第２節　層位 …… 14（〃）

第３節　遺構 …… 18（〃）

第４節　小結 …… 18（〃）

第５節　出土遺物

１．土器 …… 19（井立）

２．石器 …… 39（村川）

３．貝輪・垂飾品等 …… 46（〃）

第Ⅳ章　総括

第１節　第Ⅲ群土器（西唐津式土器）について …… 56（井立）

第２節　供養川遺跡石器群等について …… 58（村川）

附　編　自然化学分析

１．はじめに …… 76

２．試　　料 …… 76

３．方　　法 …… 76

４．結　　果 …… 76

５．花粉分析から推定される植生と環境 …… 77

挿　図　目　次

頁

第１図　北松地区における主な曽畑式土器出土遺跡 …… 3
第２図　姫神社遺跡採集の土器（Ｓ＝1／3） …… 4
第３図　姫神社遺跡採集の石器（1） …… 5
第４図　姫神社遺跡採集の石器（2） …… 6
第５図　姫神社遺跡採集の石器（3） …… 7
第６図　姫神社遺跡採集の石器（4） …… 8
第７図　供養川遺跡・つぐめのはな遺跡位置図（1／50,000） …… 10
第８図　試掘坑配置図 …… 11
第９図　平戸商館図モンタヌス「オランダ遣日使節録」（1699）のさし絵 …… 11
第10図　範囲確認調査土層図 …… 12
第11図　時期不明石垣及びＴＰ７土層図 …… 13
第12図　調査区配置図及び周辺地形図 …… 15
第13図　土層図 …… 16
第14図　Ｊ・Ｋ－１区で検出した石垣遺構 …… 17
第15図　Ｈ～Ｊ－１区で検出した石垣遺構及び側溝 …… 17
第16図　Ｇ・Ｈ－１区土層柱状図 …… 19
第17図　出土土器（1）（1／3） …… 20
第18図　出土土器（2）（1／3） …… 22
第19図　出土土器（3）（1／3） …… 24
第20図　出土土器（4）（1／3） …… 26
第21図　出土土器（5）（1／3） …… 27
第22図　出土土器（6）（1／3） …… 28
第23図　出土土器（7）（1／3） …… 29
第24図　出土石器（1）（2／3） …… 33
第25図　出土石器（2）（2／3） …… 34
第26図　出土石器（3）（2／3） …… 35
第27図　出土石器（4）（2／3） …… 36
第28図　出土石器（5）（2／3） …… 37
第29図　出土石器（6）（2／3） …… 38
第30図　出土石器（7）（2／3） …… 39
第31図　出土石器（8）（2／3） …… 40
第32図　出土石器（9）（2／3） …… 41
第33図　出土石器（10）（2／3） …… 42
第34図　出土石器（11）（1／2） …… 43

第35図　出土石器（12）（1／2）…… 44
第36図　出土石器（13）（1／2）…… 45
第37図　出土石器（14）（1／2）…… 46
第38図　出土石器（15）（1／2）…… 47
第39図　出土石器（16）（1／4）…… 48
第40図　出土石器（17）（1／4）…… 49
第41図　出土石器（18）（1／4）…… 50
第42図　出土石器（19）（1／4）…… 51
第43図　出土石器（20）（1／4）…… 52
第44図　出土貝輪・垂飾品（2／3）…… 52
第45図　つぐめのはな遺跡出土石器一覧 …… 61
第46図　供養川遺跡出土石器一覧 …… 63

表　目　次

第１表　姫神社遺跡採集土器観察表 …… 9
第２表　姫神社遺跡採集石器計測表 …… 9
第３表　土器観察表（1）…… 30
第４表　土器観察表（2）…… 31
第５表　土器観察表（3）…… 32
第６表　石器計測表（1）…… 53
第７表　石器計測表（2）…… 54
第８表　Ｇ・Ｈ－１・２区　貝類分類表 …… 55

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景と試掘・本調査状況
図版２　土層及び遺構・遺物検出状況
図版３　出土土器（1）
図版４　出土土器（2）
図版５　出土土器（3）
図版６　出土土器（4）
図版７　出土石器（1）
図版８　出土石器（2）
図版９　出土石器（3）
図版10　出土自然遺物・貝輪・鯨骨製アワビオコシ

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

１．平戸島の地形

平戸島は北東から南西に約40㎞の長軸を持つ島で，九州本島とは幅約500ｍ，水深約45ｍの平戸瀬戸により隔てられる。平戸瀬戸は潮流が速いことで知られているが，他の海峡と同様に海底は，深くえぐられた溝状の地形である。供養川遺跡が所在する平戸島東側（九州本島側）の海岸線は比較的単調であるが，東シナ海に面した西側の海岸線は複雑に入り組む。島の東北から南西方向には２列の火山性山地が存在し，その間には神曽利川・安満川・木ヶ津川・中津良川などが流れ，平戸島西側の北端には直径約４㎞の円形の山麓を持つ安満岳がそびえる。

２．遺跡の立地

供養川遺跡は平戸市大久保町供養川に所在し，長崎県遺跡地図の51-39に登録されている遺跡である。遺跡の対岸には平戸城が位置し，遺跡よりやや南には和蘭商館跡が位置している。また，遺跡後方には松浦氏の菩提寺である雄香寺が所在する。

３．遺跡周辺の地質

供養川遺跡が位置する大久保地区を含む平戸島東北部の海岸地帯には平戸層が分布している。平戸層の岩質は砂岩・泥岩の互層であり，これに凝灰岩を伴うものである。供養川遺跡に堆積する砂は先に述べた平戸層内の砂岩が供給源であると考えられる。供養川遺跡より南に下った川内地区に所在する千里ヶ浜遺跡の砂も平土層内の砂岩により堆積したものであるが，千里ヶ浜遺跡はその名が示すように砂浜であるのに対し，供養川遺跡は礫浜（砂利浜）である。礫浜は，平戸島においては主に前津吉～船越間の南海岸に集中して存在している。礫の種類は，海食により露出した，平戸島南部一帯の地層を占める安山岩である。前津吉の南河原海岸の礫浜をつくる安山岩の中には多量の瑪瑙が含まれていることはよく知られている。一方，供養側遺跡が位置する平戸島東北部の地層は，佐世保市・松浦市・北松浦郡一帯に分布する北松玄武岩であるため，供養側遺跡の礫浜の礫は付近の海食崖に露出する玄武岩を主体としている。

第２節　歴史的環境

１．平戸島における主な縄文時代の遺跡

平戸地方の縄文時代の遺跡は，早期のものとして，石鏃が100点余り出土した金柑茶屋第２遺跡があげられる。出土した石鏃の８割以上が鍬形鏃であり，若干の三角鏃・尖頭状石器が加わる。このような傾向は大分県早水台遺跡などにも認められ，早期を特徴づけるものである。前期の遺跡についてはこれまで大規模な調査が行われらず，平戸島における当時の様相は不明であったが，2002年に千里ヶ浜遺跡の調査が行われた（福田2002）。千里ヶ浜遺跡の調査の成果は次節において若干ながら同時期にあたる県北地域の海岸遺跡とともに詳述することする。中期以降遺跡としては，平戸島内で初めて船元式土器などの中期の土器が確認された，神の池遺跡などが著名である。後・晩期の遺跡としては宝亀遺跡があげられる。鈴桶型石核・剥片鏃の失敗品・彫器・石刃などが出土している。

2．供養川遺跡と同時期の周辺遺跡

供養川遺跡は前年度に調査を行った千里ヶ浜遺跡と並んで平戸を代表する縄文時代前期の海岸遺跡である。立地としては，千里ヶ浜遺跡が遠浅の砂浜に立地しているのに対し，供養川遺跡は平戸瀬戸の急潮域にあり，砂泥質の礫浜に立地している。ここでは北松地区に範囲を拡げ，供養川遺跡と同じ縄文時代前期の海岸遺跡として，千里ヶ浜遺跡・姫神社遺跡・つぐめのはな遺跡の３遺跡をを紹介していきたい。

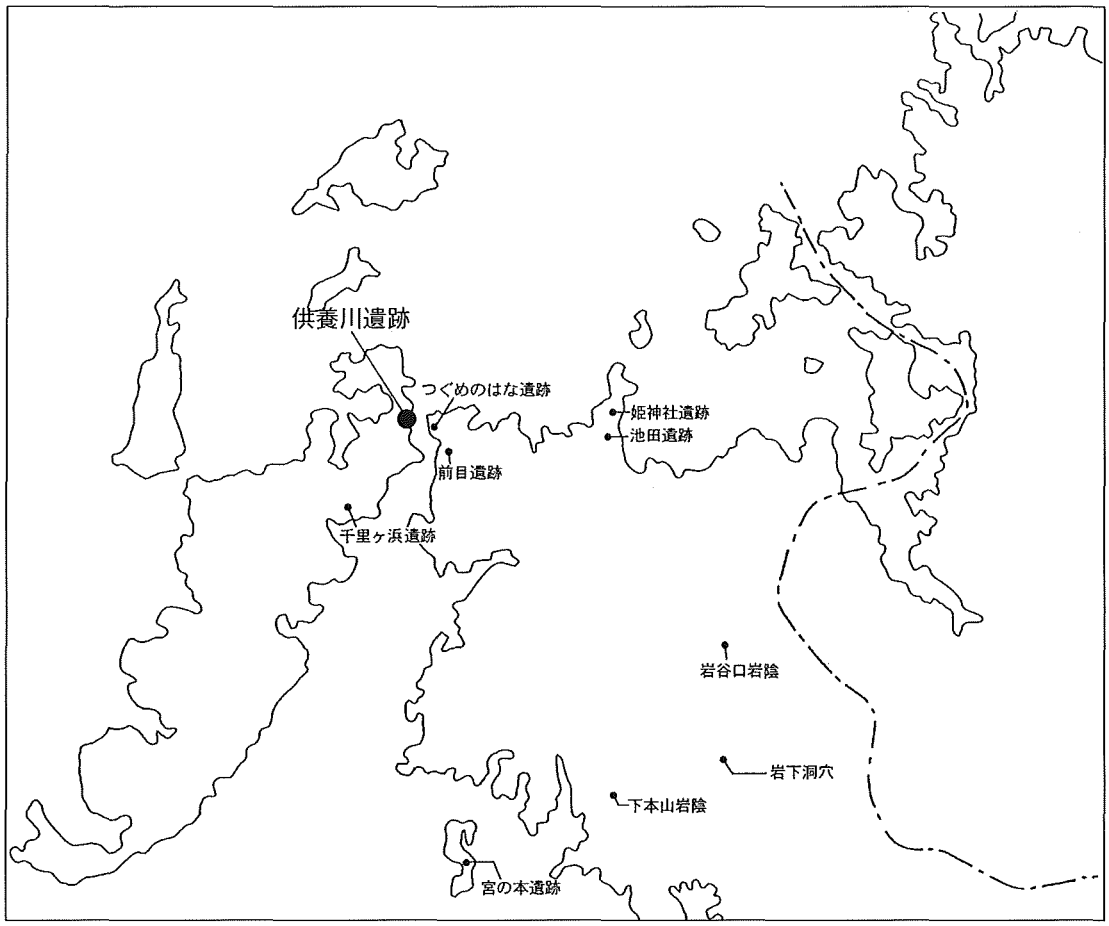
千里ヶ浜遺跡（平戸市）は平戸市字川内千里ヶ浜に位置する。古くから曽畑式土器を中心とする縄文前期の包蔵地として認知され，平成４年には中村和正氏によって表採資料の紹介も行われた（中村1992）。先述したように，千里ヶ浜遺跡は縄文時代の遺跡として知られながらも，発掘調査が行われる機会はなかったのだが，平成13年度に湾岸環境整備事業に伴う形で調査（福田2001）が実施され，前期の曽畑式土器を主体に前期前葉の轟式土器，中期の船元式土器・春日式土器・並木式土器，中～後期前葉の阿高系（阿高式・坂の下式）土器，ごく少量ではあるが後期の中津式土器・西平式土器，また韓国の櫛目文土器に類似する土器（擬櫛目文土器）等が出土している。なお，中津式土器は有喜貝塚に次いで県内２例目であると同時に，県内最西端からの出土である。石器は，掻器（石匙を含む）の出土が圧倒的に多く，その他に石鏃・石斧・大型礫石錘・楔形石器などが出土している。報告者である福田一志は石器組成の中で縦型のみで占められた石匙に着目し，「縦型の石匙だけで構成される本遺跡は，解体作業の中でも工程的にいずれかの作業が卓越していたことではないだろうか」との見解を示すとともに，捕獲具といえる資料が皆無な点から，遺跡の性格については「主に解体作業を主体とした場であったことを示唆しておきたい」とし，解体の前提となる捕獲行為については，「石製の漁労具が出土していない本遺跡での捕獲は，突き漁というよりも網漁やその他の捕獲技術で海棲動物を捕獲したのと考えるべきであろう」との見解を示している。

姫神社遺跡（松浦市）は星鹿半島の南側海岸部，標高２ｍの地点に位置する。昭和41年に行われた日米合同調査において多量の遺物が出土した（More・吉崎・内藤1966）。代表的な遺物は主としては，縄文前期の轟式土器・曽畑式土器が挙げられる。姫神社遺跡は県北の開地遺跡としては珍しく複数の文化層を有していたため，縄文前期の轟式土器から曽畑式土器への型式変化が層位的にたどることができ，これによって轟式土器と曽畑式土器の先後関係が明らかとなった（More・吉崎1973）（水ノ江1990）。今回，姫神社社務所の方が表採された資料を紹介する機会を得たため，次項にて資料紹介を行った。

つぐめのはな遺跡（田平町）は平戸瀬戸の海岸部，標高７ｍの地点に位置する。昭和46年に調査が行われ多くの遺物が出土した（正林・馬場1971）。出土遺物は縄文早期後半の塞ノ神式土器から轟Ｂ式土器・プロト曽畑・阿高系土器などの土器とともに，石鏃・石鋸・石匙・掻器などである。また，石製の漁撈具の出土が見られなかった千里ヶ浜遺跡と異なり，つぐめのはな遺跡特有の有茎石銛が81点出土している。この石銛は鎌崎型スクレーパーとセット関係をなし，報告者である正林護は，松浦地方および壱岐・対馬地方事例から，「寄せ鯨」を対象とした使用の可能性を示唆している。

（井立　尚）

【参考文献】



第１図　北松地区における主な曽畑式土器出土遺跡

正林護・村川逸朗編　1986「つぐめのはな遺跡」『長崎県文化財集報Ⅸ』　長崎県教育委員会

正林護 1997「つぐめのはな遺跡」『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ　長崎県教育委員会

長崎県教育委員会編　1995『長崎県遺跡地図－佐世保市・平戸市・松浦氏・北松浦郡・東彼杵郡地区』

萩原博文・松下孝幸　1995『平戸市史』自然・考古編

福田一志編　2002『千里ヶ浜遺跡』長崎県教育委員会

第３節　姫神社遺跡採集の土器・石器（石斧等）第２～６図

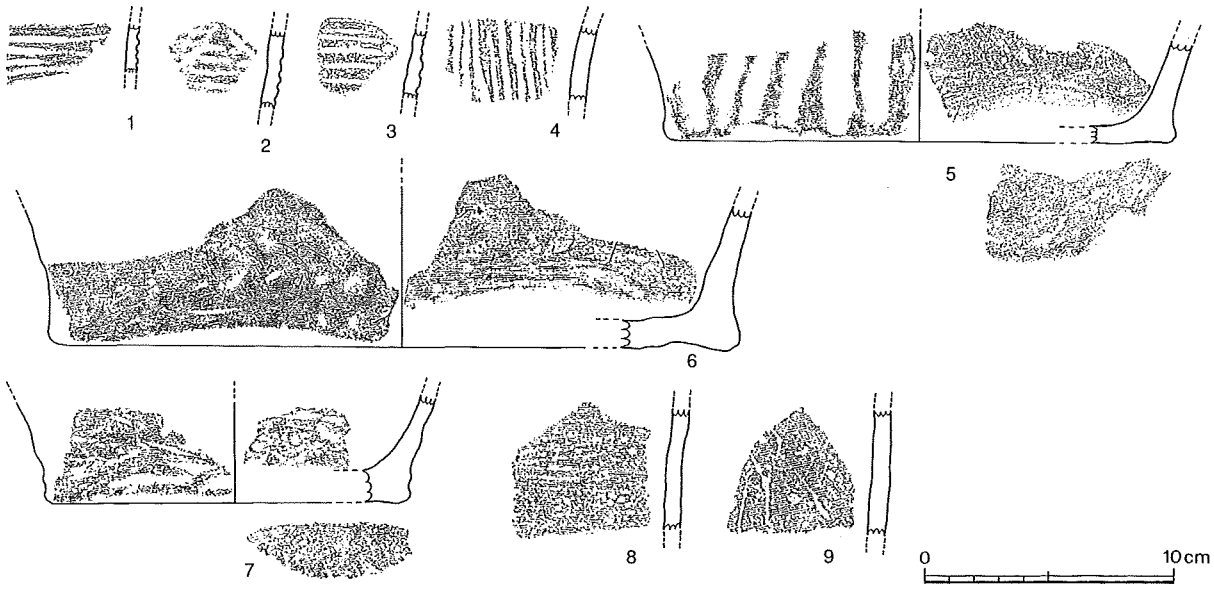
今回，姫神社社務所に保管されていた社務所北側の水田で採集された縄文土器と磨製石斧等の紹介を行いたい。

縄文土器（第２図）

姫神社遺跡の土器についてはAlbert Mohe・吉崎昌一が1966年に調査を行い層位に基づく轟式土器から曽畑式土器への型式変化を認定する成果を上げた。その成果は1973年発表された（Mohe・吉崎1973）が，全文英文であり，しかも入手困難な文献であったため，水ノ江和同が翻訳を発表（水ノ江1990）するまでほとんど周知されなかった。

今回紹介する土器は姫神社社務所蔵の表採資料である。

１～４は曽畑式土器である。いずれも胴部の小片である。１・３は胎土に滑石を含み，内外面ともに暗茶褐色を呈し，外面に横走する沈線が施される。２は胎土に滑石を含み，内外面ともに暗茶褐色



第２図　姫神社遺跡採集の土器（1/3）

を呈す。外面は横走沈線上に重ねて山形文が施されている。１～３は，小片のため，文様全体は明らかではないものの，滑石が混入されていることから，水ノ江編年（水ノ江1990）における曽畑Ⅱ式に相当すると思われる。４は外面は暗茶褐色，内面は暗灰褐色を呈す。外面に縦走する沈線は施されている。胎土に滑石を含まないことから水ノ江編年のおける曽畑Ⅲ式であると考えられる。５～７は坂の下式土器で，いずれも底部片である。５は胎土に滑石を多量に含む。外面に凹線文，内面はナデを施す。６は滑石を多量に含み，内外面ともにナデ調整がなされる。外面の最下部には指頭圧痕が確認される。７は滑石を多量に含み内外面ともに，条痕が確認される。なお，５～７いずれも鯨底の痕跡は認められなかった。８・９は後期の粗製土器である。いずれも条痕を施した後に丁寧なナデ調整が行われている。

（井立　尚）

参考文献

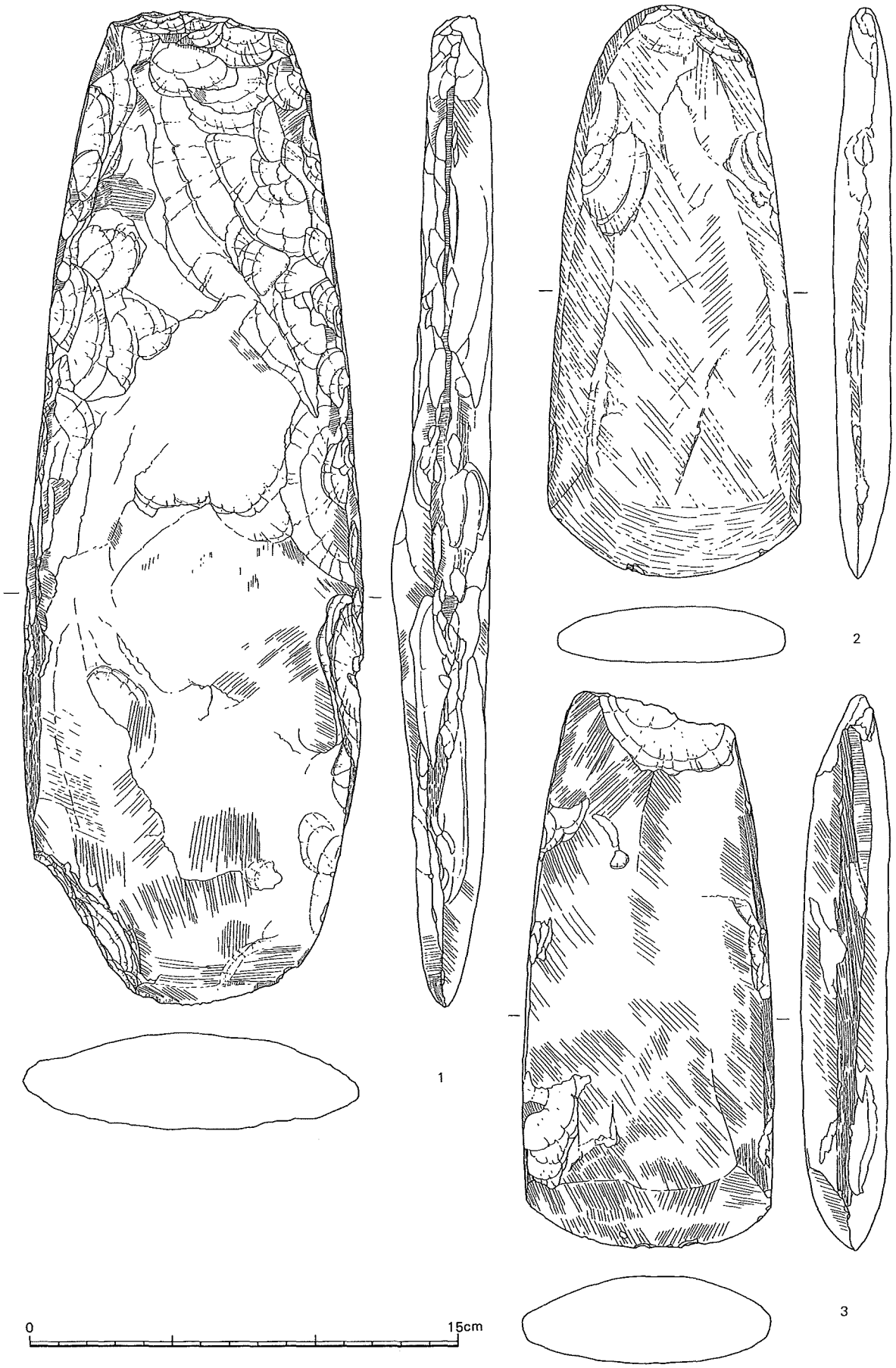
水ノ江和同訳　1990　Albert Mohe・吉崎昌一「西九州における文化の変遷」『古文化談叢』第22集　九州古文化研究会

水ノ江和同　　1990　「６　西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡　長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』多良見町教育委員会　同志社大学考古学研究室

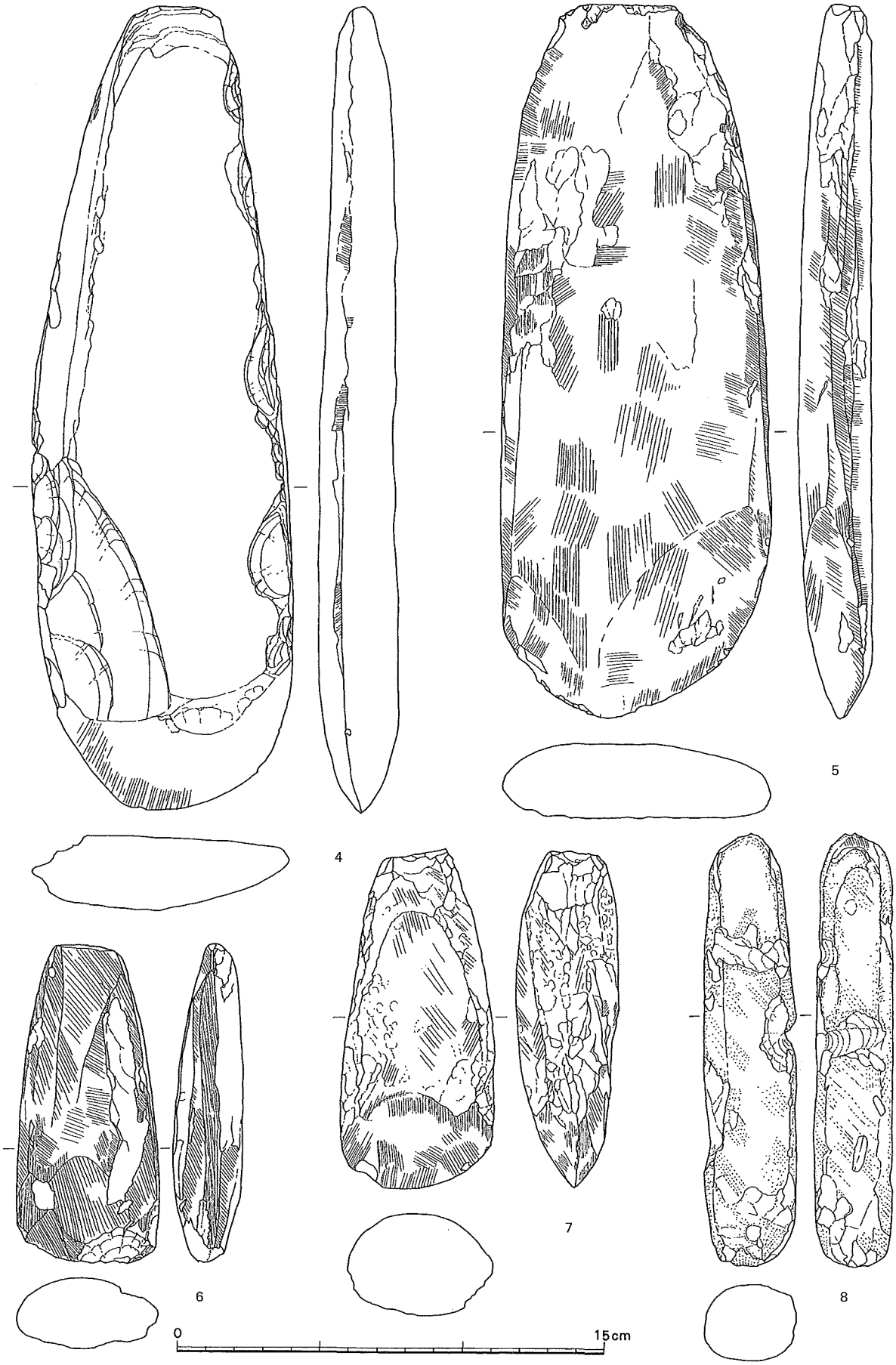
田中良之　　1996　「坂の下土器」『日本土器辞典』　雄山閣

石器

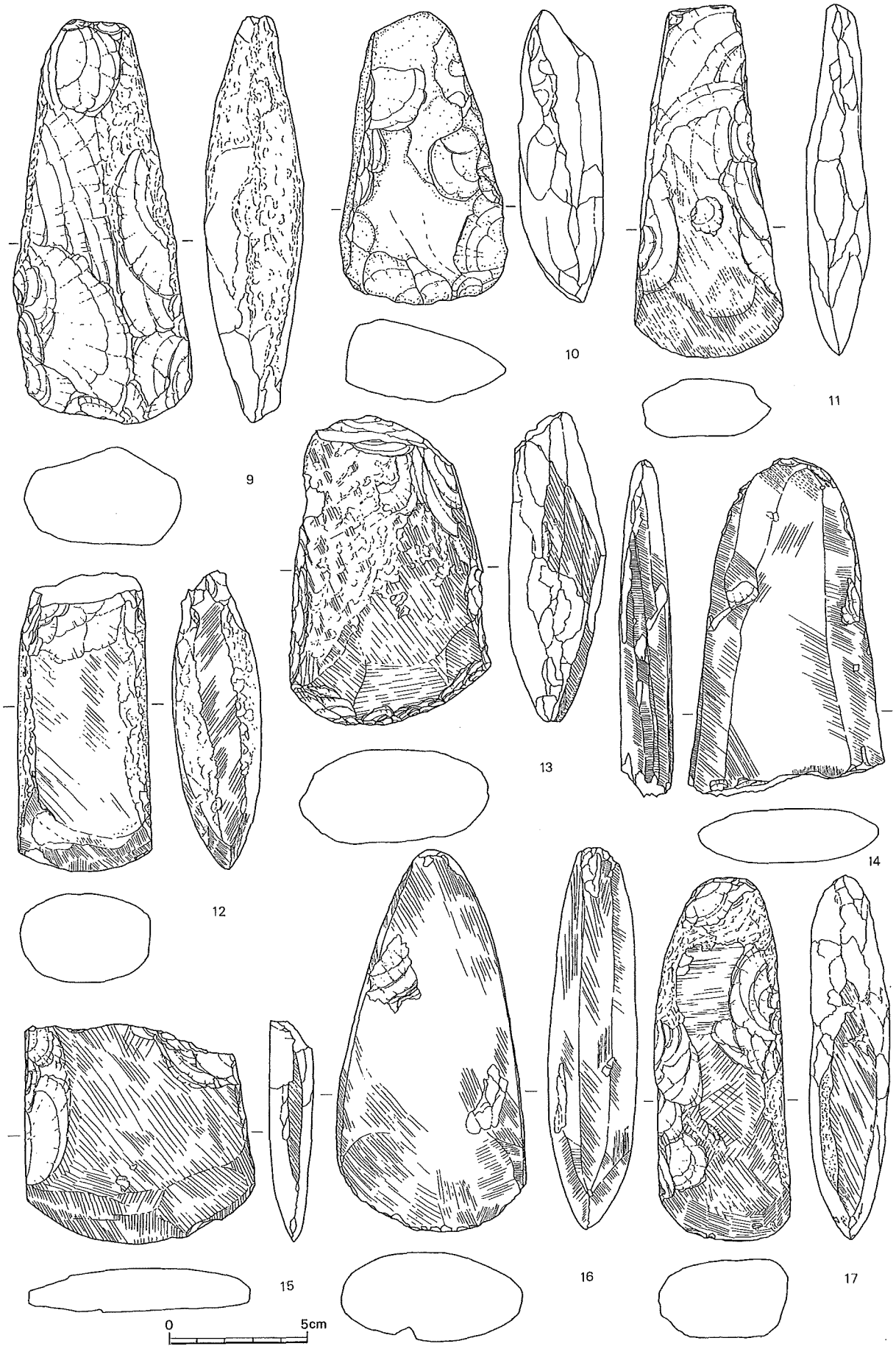
磨製石斧22点と砥石１点である。石斧については，形態・大きさ等バラエテーに富んでおり，採集された土器の各該期等に所属するものと考えられるが特定はできない。曽畑式土器に伴う磨製石斧の特徴である薄手で蛇紋岩製ものとしては２，３，５，15等があり，後・晩期の打製石斧と思われる22等がある。１と４は対馬産の頁岩を利用した石斧であるが，１は長さ34.6cmと大きく，４も28.2cmと大きい。今回の資料紹介は，韓半島に於て，当該紹介資料１～５等と似た大きい石斧が集積されて検出されており，彼我の資料の関連をみる為行ったものである。　（村川）



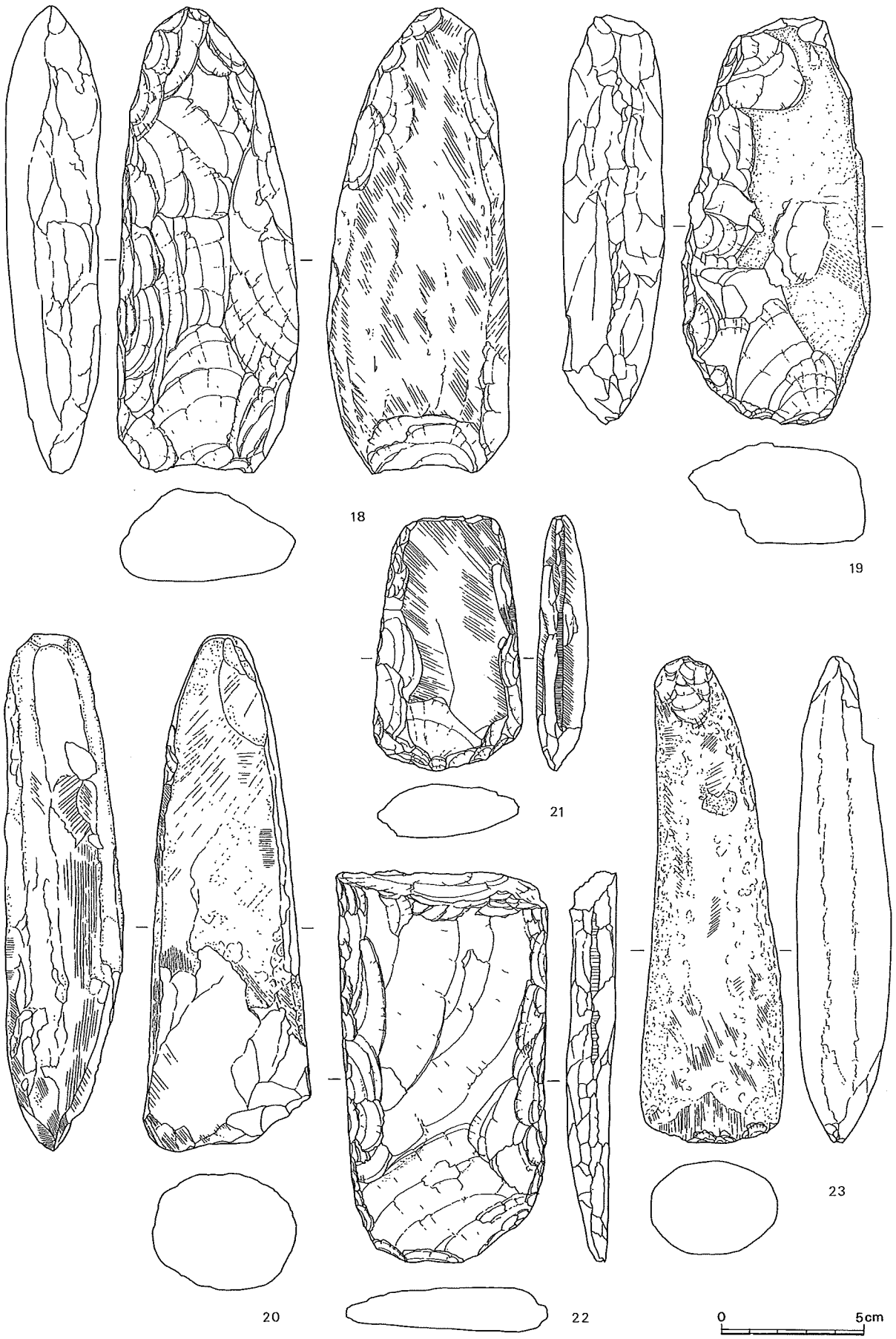
第３図　姫神社遺跡採集の石器（1）



第４図　姫神社遺跡採集の石器（2）



第５図　姫神社遺跡採集の石器（3）



第６図　姫神社遺跡採集の石器（4）

第１表　姫神社遺跡土器観察表

図版番号	遺物番号	色調 外面	色調 内面	焼成	部位	胎土	施文・処理 外面	施文・処理 内面	施文・処理 底面	炭化物 外面	炭化物 内面	備考
第2図	1	明茶褐色	明茶褐色	良	胴部	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走）	ナデ				
	2	明茶褐色	明茶褐色	良	胴部	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走・山形）	ナデ				
	3	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	胴部	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走）	ナデ				
	4	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	胴部	滑石・石英・小礫	沈線（縦走）	ナデ				
	5	明茶褐色	淡茶褐色	堅緻	底部	滑石・石英・長石・小礫	凹線（縦走）	ナデ	指頭押圧			
	6	明茶褐色	淡茶褐色	堅緻	底部	滑石・石英・長石・小礫	指頭押圧・ナデ	条痕・ナデ	指頭押圧			
	7	暗茶褐色	淡茶褐色	堅緻	底部	石英・長石・小礫	条痕・ナデ	条痕・ナデ				
	8	灰茶褐色	灰白色	良	胴部	石英・長石・小礫	条痕・ナデ	条痕・ナデ				
	9	暗灰茶褐色	灰茶褐色	良	胴部	石英・長石・小礫	条痕・ナデ	条痕・ナデ				

第２表　姫神社遺跡石器計測表

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	石斧	頁岩	34.6	11.9	3.4	1780	刃部一部欠
2	石斧	砂岩	20.0	8.9	2.0	530	完形
3	石斧	蛇紋岩	19.4	8.8	3.0	770	基部欠
4	石斧	頁岩	28.2	9.2	2.6	1010	完形
5	石斧	蛇紋岩	25.0	9.5	2.6	900	完形
6	石斧	蛇紋岩	11.1	5.0	2.5	180	刃部一部欠
7	石斧	砂岩	11.9	5.4	3.6	320	完形
8	砥石	砂岩	15.1	3.3	2.7	180	完形
9	石斧	安山岩	14.6	6.4	3.6	380	刃部一部欠
10	石斧	安山岩	10.5	6.0	3.0	230	完形
11	石斧	安山岩	12.6	5.4	2.1	180	完形
12	石斧	砂岩	10.8	4.8	3.2	250	基部欠
13	石斧	硬質砂岩	11.1	7.3	3.5	370	基部欠
14	石斧	安山岩	12.1	7.1	1.9	230	刃部欠
15	石斧	安山岩	7.9	8.3	1.5	160	基部欠
16	石斧	蛇紋岩	13.7	6.8	3.2	430	完形
17	石斧	安山岩	13.1	4.9	2.8	270	完形
18	石斧	安山岩	16.6	6.5	3.3	490	刃部一部欠
19	石斧	砂岩	14.6	6.8	3.6	510	未製品？
20	石斧	安山岩	18.4	5.9	4.1	610	刃部一部欠
21	石斧	安山岩	9.1	5.3	1.9	120	刃部一部欠
22	石斧	安山岩	14.0	7.5	1.5	280	基部欠
23	石斧	安山岩	17.4	5.2	3.4	400	完形

姫神社遺跡の報告について

姫神社遺跡の報告については，前述した吉崎昌一・Albert Mohe（吉崎·Mohe1973）の報告以外に，1951年の『平戸学術調査報告』に掲載された曽畑式土器・阿高系土器・弥生土器などの報告，また，松浦高等学校郷土社会部によって行われた石鋸・石鏃の紹介および，石鏃の型式分類（松浦高等学校郷土社会部1966）や，萩原博文・久原巻二による石鋸・サイドブレイドについての論文（萩原·久原1975）があげられる。

（井立　尚）

【参考文献】

中田敦之1997「姫神社遺跡」『原始·古代の長崎県　資料編Ⅱ』長崎県教育委員会

長崎県立松浦高等学校郷土社会部1966『松浦考古』３号長崎県立松浦高等学校

萩原博文・久原巻二「九州西北部の石鋸，サイド·ブレイドについて」『古代文化』第27巻４号

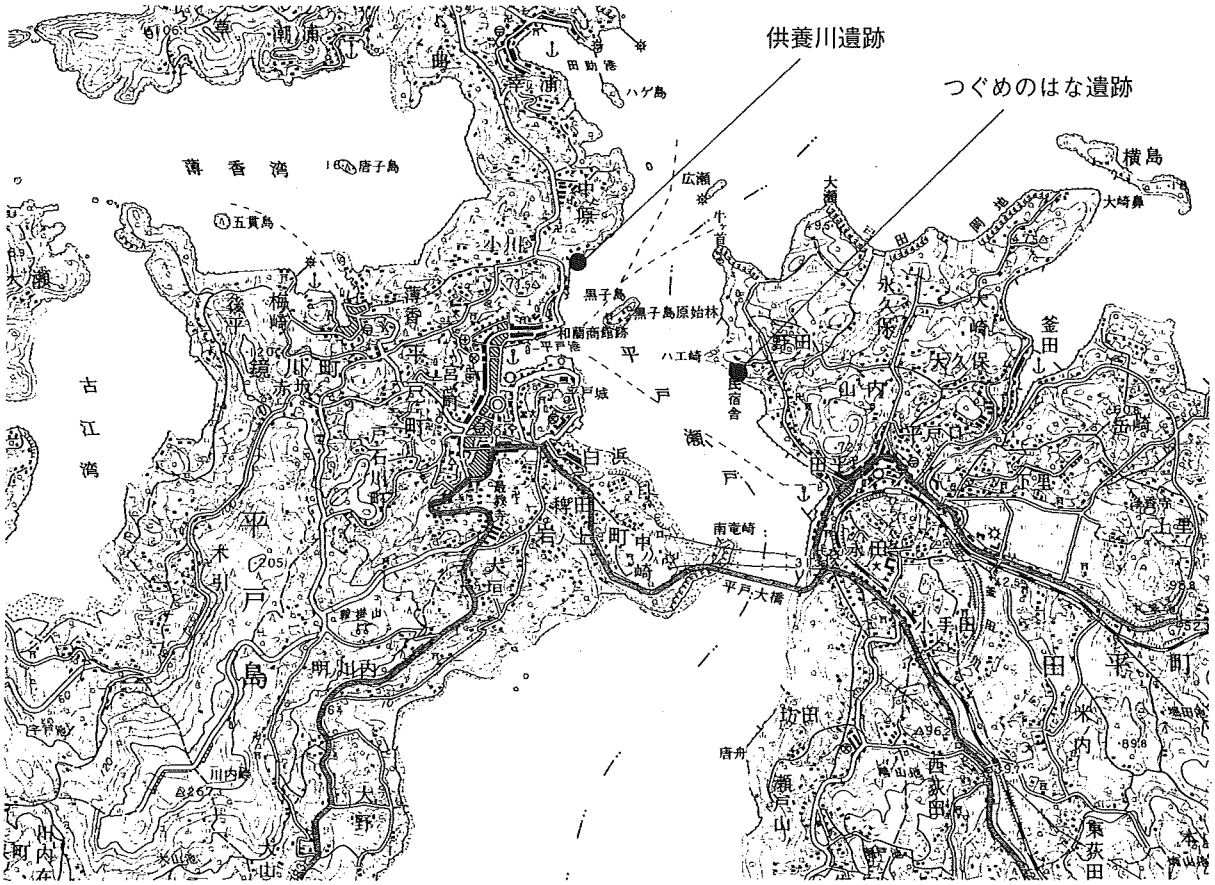
第Ⅱ章　範囲確認調査

第１節　調査の経緯と調査

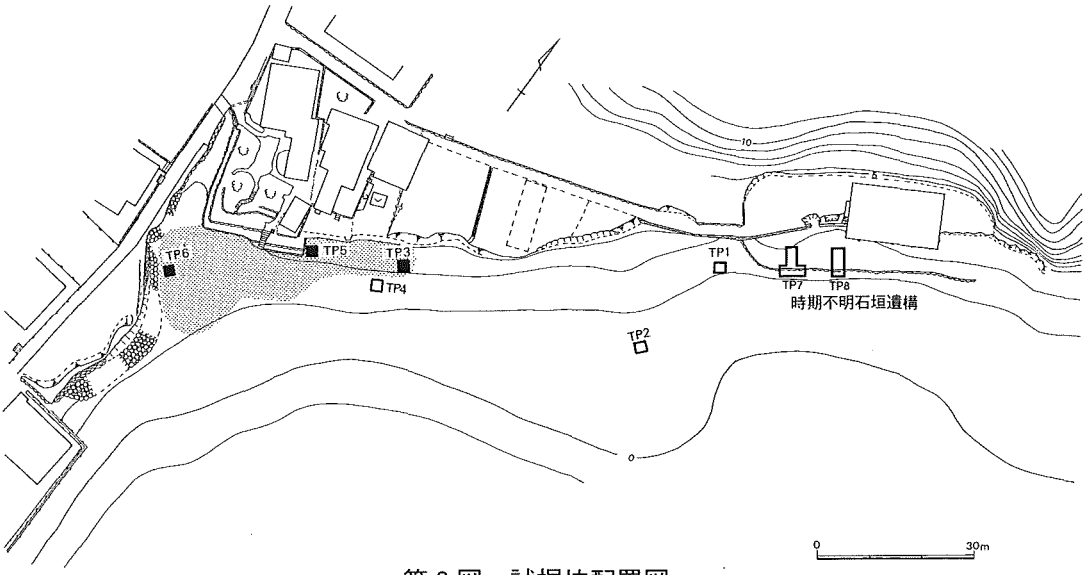
田平土木事務所は，平戸市大久保町小川地区の平戸港（小川地区）保全工事に伴って，県学芸文化課に遺跡の照会と協議を依頼した。当該保全工事地域は，長崎県遺跡地図に縄文時代・弥生時代の遺物包含地として登録されている供養川遺跡が含まれており，県学芸文化課では，その範囲の特定を急ぐ必要があるとして，範囲確認調査を実施することとし，その結果によって再度協議をおこなうこととした。

範囲確認調査は，１次調査として平成13年６月４日～６月８日と同年６月20日～６月22日に実施した。調査にあたっては，満潮の時には海水に覆われてしまう潮間帯の遺跡の常として，干潮時のみの調査となった。２×２ｍのグリッドを基本とし，遺跡の包蔵状態と範囲確認を目的としたが，この供養川遺跡の北側は，１７世紀初頭の平戸オランダ商館時代には古館（ふるたち）と呼ばれ，文献等によればオランダ船の修理のための製材所の設置や改築等の記述もある（註１）。モンタヌス『オランダ遣日使節録』(1699）の商館図には，オランダ船後方のこの調査対象地付近に小さく描かれた陸に横付けされた二艘の船と人物が小さく描かれており，何らかの接岸遺構等の有無の確認が必要であることも念頭にあった。

調査は，潮位表を参考にして実施した。工事計画区域内に２ｍ×２ｍの試掘坑を計６箇所設定して行い，東側からＴＰ.１～６とした。調査地の北側は岩盤が露出しており，ＴＰ.１，２は比較的浅い



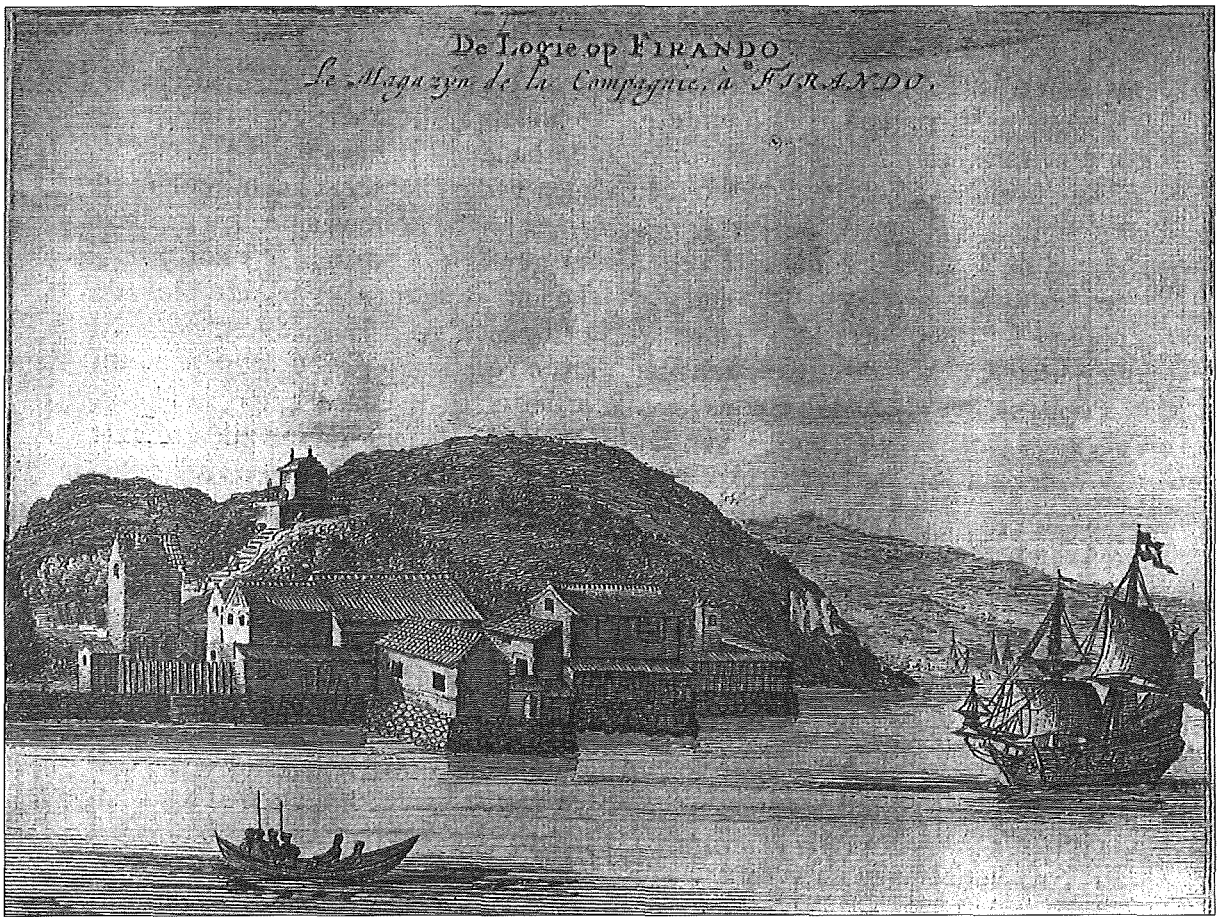
第７図　供養川遺跡・つぐめのはな遺跡位置図　　(1/50,000)



第８図　試掘坑配置図

段階で岩盤を確認し，遺構・遺物等は検出されなかった。ＴＰ４も遺構・遺物の確認はできなかった。ＴＰ３は大きな石が３個程確認され集石ないし石垣の壊れたものの可能性を考慮し要調査範囲に含めた。

なお，調査地のＴＰ.１北側に時期不明の石垣があり，石垣に接してＴＰ.１を設定したが，時期の判別までは至らなかったため，平成13年10月29日～同年11月16日の日程で２次調査を実施し，この場所が１７世紀前半のオランダ商館時代には古館（ふるたち）と呼ばれ，文献等によればオランダ船の修理のための



第９図　平戸商館図　モンタヌス「オランダ遣日使節録」（1669）のさし絵
photo3 Drawing of Dutch Factory in Hirado, from Montanus 1669

製材所や管理人小屋があったとの記述があるため，この時期不明石垣との関係を探るため再度確認調査を実施したものである。調査は２ｍ× ５ｍの試掘坑を２箇所設定し，石垣の裏込石と石垣の外側及び基盤の状況をみるための発掘を行った。

第２節　層　位

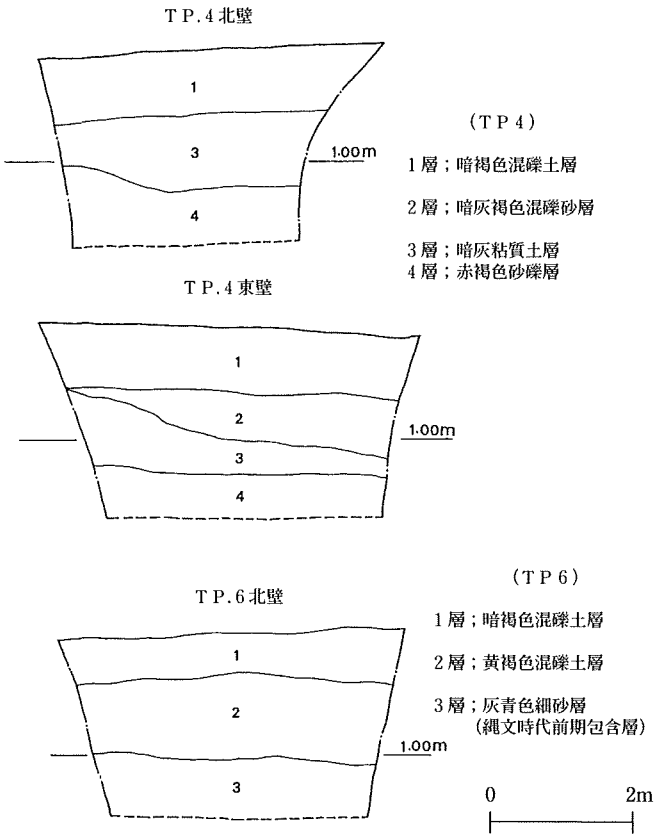
調査地は礫浜で，礫と砂とが混じった層である。遺構・遺物ともに確認されなかったＴＰ４と縄文時代前期曽畑式土器式土器の包含層が確認されたＴＰ６の土層図は以下のようになる。

（ＴＰ４）
１層：暗褐色混礫土層
２層：暗灰褐色混礫砂層
３層：暗灰粘質土層
４層：赤褐色砂礫層

（ＴＰ.６）
１層：暗褐色混礫土層
２層：黄褐色混礫土層
３層：灰青色細砂層
（縄文時代前期包含層）

（ＴＰ７）
１層；表土層（礫層）
２層；茶褐色弱粘質土層
３層；礫層
４層；茶褐色弱粘質土層
５層；礫層
６層；小礫混じり茶褐色土層

ＴＰ６は，３層の縄文時代前期包含層が確認された段階で掘り下げを止めているのでその下層は判らない。ＴＰ７の状況は，表面に露出していた１層の礫層と，その下の茶褐色弱粘質土層を剥いでいくと，裏込石は特に限定された範囲に施されるのではなく，ほぼ全面に人頭大等の石を敷き詰め，その下には茶褐色弱粘質土の層があり，人頭大の石の礫層と茶褐色弱粘質土の層が互層をなしている状況が認められた。基盤は明赤褐色のやや軟質の岩盤層であった。ＴＰ７の土層については海水の浸透を防ぐため人為的に短期間に堆積を行ったものであろう。



第10図　範囲確認調査土層図

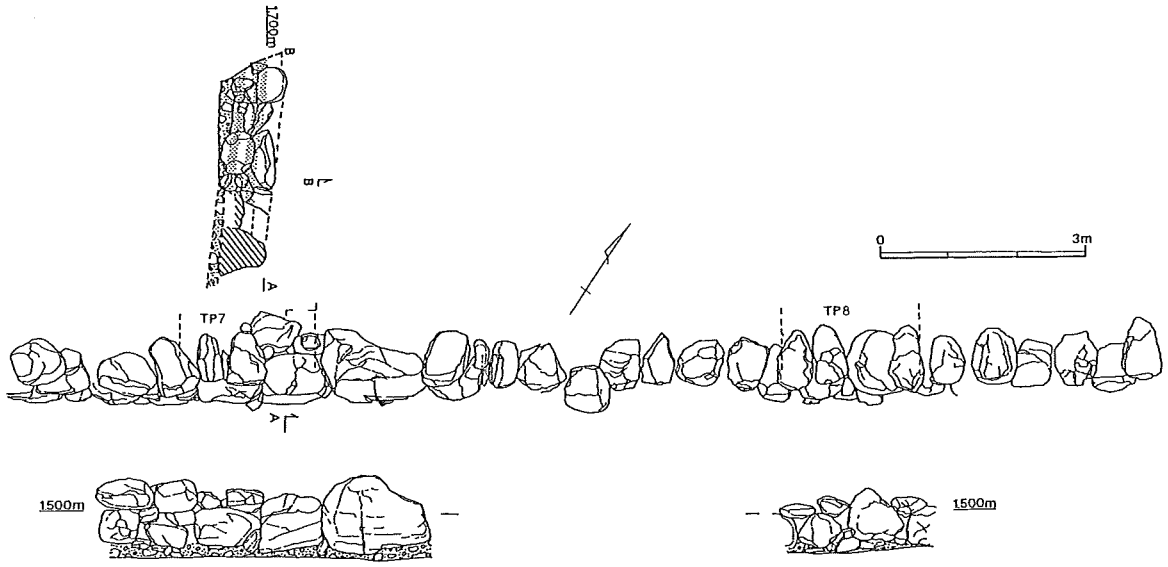
第３節　遺　構

２次調査を実施した時期不明の石垣と，ＴＰ.５では，表土から６０～７０cm掘り下げて石列を確認した。この石列は，面が内側を向いており排水路だと考えられる。この石列の南側（海側）には護岸のための石垣が存在することが予察された。

第４節　出土遺物

ＴＰ.６の第３層である灰青色砂層から，縄文時代前期の曽畑式の土器が出土した。共伴して安山岩（サヌカイト）製の尖頭状石器，蛇文岩製の磨製石斧，礫器等が出土した。

表面採集では，縄文時代後期～晩期の



第11図　時期不明石垣及びTP７土層図

ものと推定される打製石斧，礫器石鏃等があり，他に石錘等もある。１，２層の混礫土層からは，１６世紀後半の明代染付があり，近世以降の陶磁器等が出土した。

第５節　まとめ

調査の結果，ＴＰ.６第３層の灰青色砂層から縄文時代前期の曽畑式土器が出土し，尖頭状石器，蛇紋岩製磨製石斧，礫器等も供伴する事から，良好な包含層が残存していることが判明した。ＴＰ.１北側の石垣とＴＰ.５の石列は，その所属時期等がはっきりしない。この場所は平戸オランダ商館時代の製材所，管理人小屋があった場所であり，古舘があった時代に所属する可能性があり，調査を実施したが，ＴＰ１北側の２次調査を実施した時期不明石垣については，奈良県立橿原考古学研究所研究員北垣聰一郎氏に，平成13年11月14,15日の両日に，現地指導していただいた結果，近世期の近代に近い時期の石垣であることが判明した。構造的にも平戸和蘭商館跡の石垣とは異なっているとのことで，関連はなさそうである。

ＴＰ５の石列は要調査範囲に含め，750㎡で本調査を実施することとなった。

註１　行武和博「平戸オランダ商館の対日貿易と商館建造物」(『平戸市史研究』創刊号)

第Ⅲ章　本調査

第１節　調査の経緯と調査

範囲確認調査では，450㎡の調査が必要との結果であったが，現地での実際の工事該当箇所の吟味の結果最終的には410㎡を調査した。

遺跡は平戸島の東北部に位置し，平戸瀬戸を挟み，対岸には田平町の平戸口があり，つぐめのはな遺跡も所在する。調査場所は，海岸の潮間帯に位置し潮が引いた時だけ調査可能である。通常の陸地の調査に比べて半日ほどしか調査が出来ず，また，潮の干満の差が小さい時も調査が不可能になるのは確認調査と同様である。

調査区は，A～Lまで鍵型に設定し，それに直交し０，１，２と記号を配した。工事内容別に分けると，海岸保全工事部分Ａ～Ｌ－１，２区と，供養川河口のカルバート埋設部分Ｃ・Ｄ－０区に分かれる。

調査の結果，平戸和蘭商館跡関連のものは確認できなかったが，縄文時代前期の曽畑式土器とそれに伴う大型石錘，石鏃，黒曜石製石核，磨製石斧，有孔砥石等の石器を出土した。Ｆ，Ｇ，Ｈ－１，２区を中心として包含層が認められるが，Ⅳｂ・Ⅳｂ'・Ⅳｃ層の包含層の中でもⅣｂ層の出土遺物は摩滅したものもみられる。Ⅳｂ'層まで下がると摩滅は少ない。Ⅳｂ'層・Ⅳｃ層からは，１点のみであるが早期にあたると思われる土器片や轟Ｂ式土器，また，いわゆるプロト曽畑が出土した。他にこのⅣｂ'・Ⅳｃの双方からシカ・イノシシ・アシカ等の獣骨やサザエ，アワビ，オオコシダカガンガラ等の貝類も出土した。貝類には岩礁性と砂泥性の貝がある。

その出土状況は，整層状態を示しており，土質は双方ともに貝殻を含む黒褐色土層ではあるが，Ⅳｂ層とⅣｂ'層の堺には無遺物層を挟み，それぞれ文化層として分離できる良好な状態を示していた。特にG·H－1·2区は，上下両文化層の堆積状況が分離できるという良好な状況を示していた。

Ｅ・Ｆ－１・2区もⅣｂ・Ⅳｂ'・Ⅳｃ層が残存しているが，Ⅳｃ層の堆積が薄い。

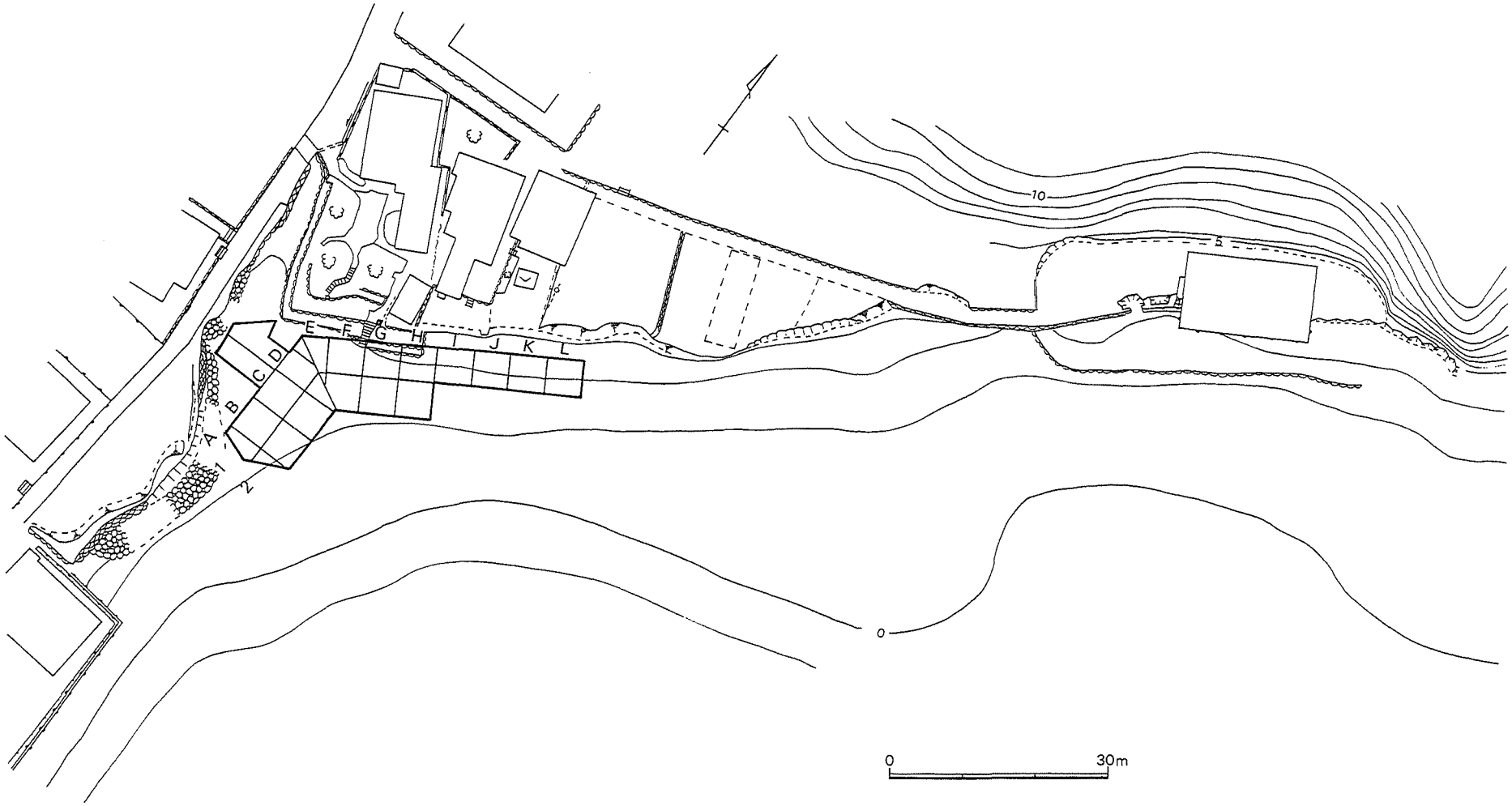
Ｂ・Ｃ－１・２区でも，Ⅳａ層から曽畑式土器，大型石錘，黒曜石製剥片，海獣骨，アワビ・サザエ等の遺物の出土があった。４ｂ層から人骨（頭蓋骨片）も出土しているので，縄文時代前期の人骨と考えられる。

Ⅳｂ'層（西唐津式土器文化層）は，G·H－1·2区の東西10m×南北１ｍ（１，２区の境を中心として）の10㎡に集中し，上層のⅣｂ層（曽畑式土器文化層）は，G·H－1·2区の10m×10mの範囲，約100㎡の範囲である。

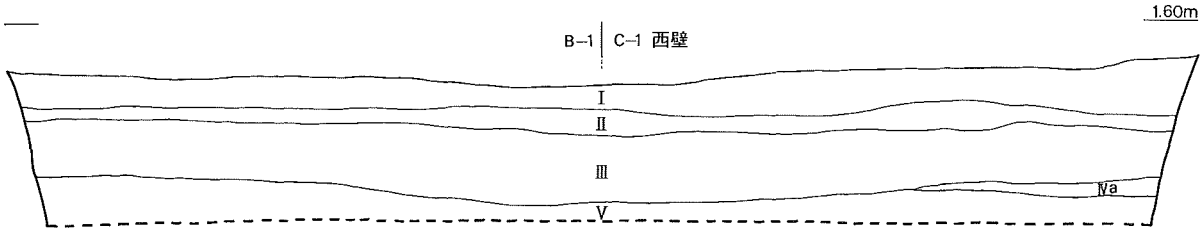
第２節　層　位

【基本土層】

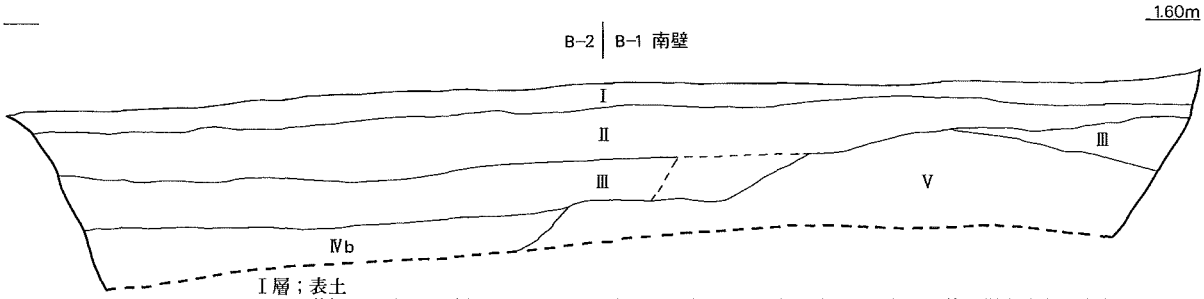
Ⅰ　：表土層
Ⅱ　：赤褐色粘質土層
Ⅲ　：灰青色砂礫層
Ⅳａ：黒褐色砂礫層　（曽畑式土器文化期包含層）
Ⅳｂ：黒褐色混貝砂礫層（曽畑式土器文化期包含層）
Ⅳｂ'：黒褐色混貝砂礫層（西唐津式土器文化期包含層）
Ⅳｃ：黒褐色砂層
Ⅴ　：礫層



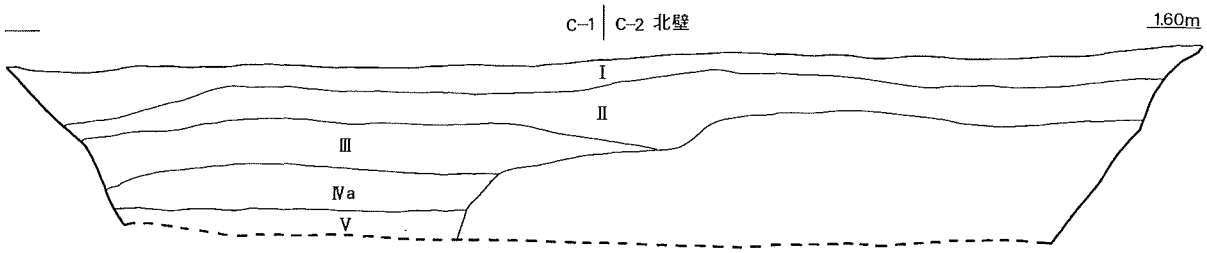
第12図　調査区配置及び周辺地形図　1/750



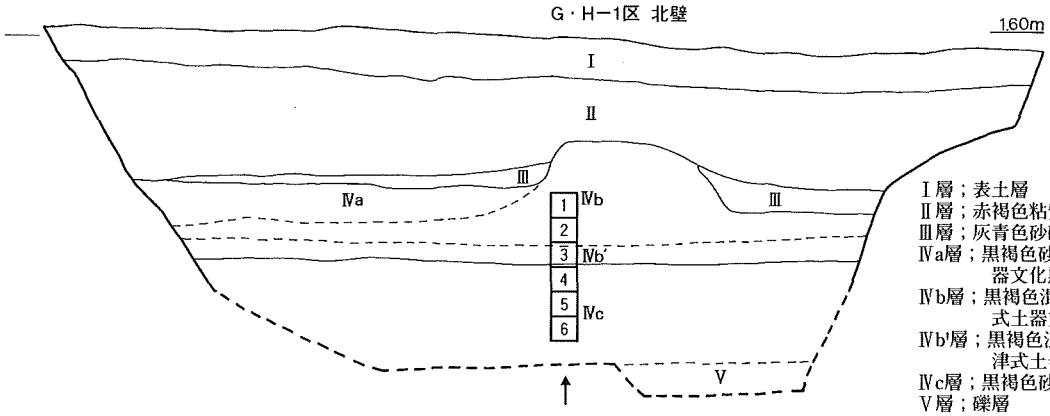
Ⅰ層；表土
Ⅱ層；黄褐色混礫土層
Ⅲ層；灰青色砂礫層（Ⅲ層はブロック状で確認された。）



Ⅰ層；表土
Ⅱ層；黄褐色混礫土層（上位に近現代の陶磁器のみ出土し，下位で陶磁器＋曽畑式等の縄文時代の遺物に分けられるが，明確な差は確認できなかった。）
Ⅲ層；灰青色砂礫層（陶磁器にまじり曽畑式土器が出る。）
Ⅳb層；黒褐色混貝砂礫層（Ⅳa層とほぼ同一の性質だが，Ⅳa層に比し色が濃く貝殻を多く含む。）
Ⅴ層；礫層（20～30cm×20～50cm程の大きな礫による層である。この層がⅢ・Ⅳ層の推積を妨げたようで，すき間に所々にⅣ層がみえる。）



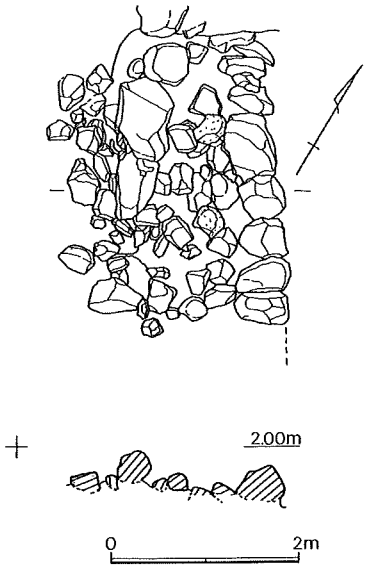
Ⅲ層；灰青色砂礫層＜近現代と縄文前期（曽畑期）の遺物が混在している。なおC－1区より中期（船元）が1点出土している。遺跡西方丘陵地からの流れ込みか。＞
Ⅳa層：黒褐色砂礫層（若干，こぶし大の礫がまじる。）
Ⅴ層；砂礫（大きな礫により構成される。）



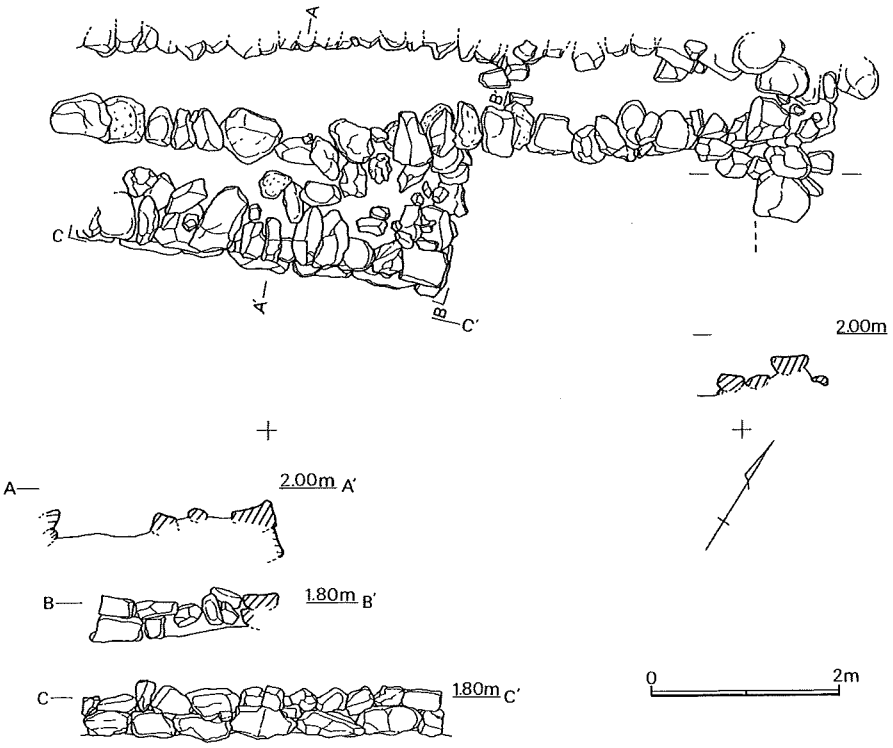
Ⅰ層；表土層
Ⅱ層；赤褐色粘質土層
Ⅲ層；灰青色砂礫層
Ⅳa層；黒褐色砂礫層（曽畑式土器文化期包含層）
Ⅳb層；黒褐色混貝砂礫層（曽畑式土器文化期包含層）
Ⅳb'層；黒褐色混貝砂礫層（西唐津式土器文化期包含層）
Ⅳc層；黒褐色砂礫
Ⅴ層；礫層

0　2m

第13図　土層図



第14図　J・K－１区で検出した石垣遺構



第15図　H～J－1区で検出した石垣遺構及び側溝

第３節　遺　構

Ｊ・Ｋ－１区で石垣遺構と，Ｈ～Ｊ－１区で石垣遺構と側溝を検出した。

Ｊ・Ｋ－１区で検出した石垣遺構は，測辺部に比較的大きな円礫をならべ面をそろえている。西側測辺部はＪ－１区に達すると思われる。石垣の内部には径30㎝前後の円礫や角礫を無作為に入れている。石垣の礫を除去すると下は２層の砂礫層があらわれ近現代の陶磁器が含まれる。海側の先端部は確認できず。昭和期まであった造船所の跡地と考えられた。

Ｈ～Ｊ－１区で石垣遺構と側溝は，全体的に極めて粗い石垣の積み方で，コーナー部には長方形の砂岩を配し直角部を作り上げている。内側には幅60㎝程の側溝がある。石垣最下層から近現代の陶磁器が出土することから江戸時代以降に構築されたものと思われる。

第４節　小　結

調査の結果，縄文時代前期の保存状態の良い遺跡であることが判明した。その当時の生活の状態がわかる残りの良い文化層が残存していた。４ｂ層，４ｃ層合わせた包含層の厚さは約１ｍ程あり，１日で約20㎝程堀下がる。Ⅳｂ'層の上部で獣骨が目についたり，下部で大型石錘が多かったりということもあり，季節性ないしは時期的な変移も考えられるがそこまでの考察も行えなかった。

石器で目に付くのが大型石錘で，総数は100点程あるが，重さが15kgを越すようなものも見受けられ，今後この石器が，果たして丸木船の碇石なのか，網漁の重りなのか検討の必要があろう。この供養川遺跡の前面に広がる平戸瀬戸は潮の流れが速く果たして網漁が可能なのか検討が必要であろう。ただ，遺跡出土の貝類に岩礁性と砂泥性の貝がみられるので縄文時代前期の状況は，現在の状況とは異なることも考えられ即断は避けなければならない。現在は，この遺跡前面の海域はサザエ・アワビ・ウニ等の良好な漁場であり地元漁協の管理下にあるが素潜りで漁を行っており網漁は全く行われていない。

縄文時代前期の人骨も確認され，住居跡も近くにあると考えられるが，調査地北側の宅地等がその候補地として考えられる。

また，海底下の遺跡として，縄文時代前期の海水面が現在より低かったとする所謂“ハイドロアイソスタシイ”理論の検討が可能な遺跡としてもその対象となりうるものと考えられる。

第５節　出土遺物

１．土器

本遺跡からは縄文土器が多量に出土している。出土した縄文土器は以下の通り分類し説明を加えた。個々の詳細については観察表を参照していただきたい。

第Ⅰ群　早期の土器

第Ⅱ群　轟Ｂ式土器

第Ⅲ群　西唐津式土器（いわゆるプロト曽畑）
- **ａ類　轟Ｂ式土器の影響を残す一群**
- **ｂ類　野口・阿多タイプ**

第Ⅳ群　曽畑式土器
- **ａ類　曽畑Ⅰ式土器**
- **ｂ類　曽畑Ⅱ式土器**
- **ｃ類　曽畑Ⅲ式土器・轟Ｄ式土器**

第Ⅴ群　船元式土器・春日式土器

第Ⅵ群　晩期の土器

第Ⅶ群　その他の土器
- **ａ類　深堀遺跡Ⅸ群４類土器**
- **ｂ類　型式不明土器**

Ⅰ … 表土	拳・人頭大の礫および砂により構成される。
Ⅱ … 暗赤褐色土層	縄文・近世・現代の遺物が混在して出土
Ⅲ … 灰青色砂礫層	縄文（第Ⅳ群c類・第Ⅴ群）近世の遺物が出土
Ⅳa … 黒褐色砂礫層	砂礫層。第Ⅳ群土器が出土
Ⅳb … 黒褐色混貝礫層	混貝礫層（5900±60y.B.P）＊補正値 第Ⅳ群土器が出土。
黒褐色混貝礫層	混貝礫層。無遺物（厚さ約10cm）
Ⅳb' … 黒褐色混貝礫層	混貝礫層。第Ⅰ群・Ⅱ群・Ⅲ群土器が出土。
Ⅳc … 黒褐色砂層	砂層。
Ⅴ … 礫層	30cm～１m50cm前後の礫で構成される。

第16図　Ｇ・Ｈ－１区土層柱状図

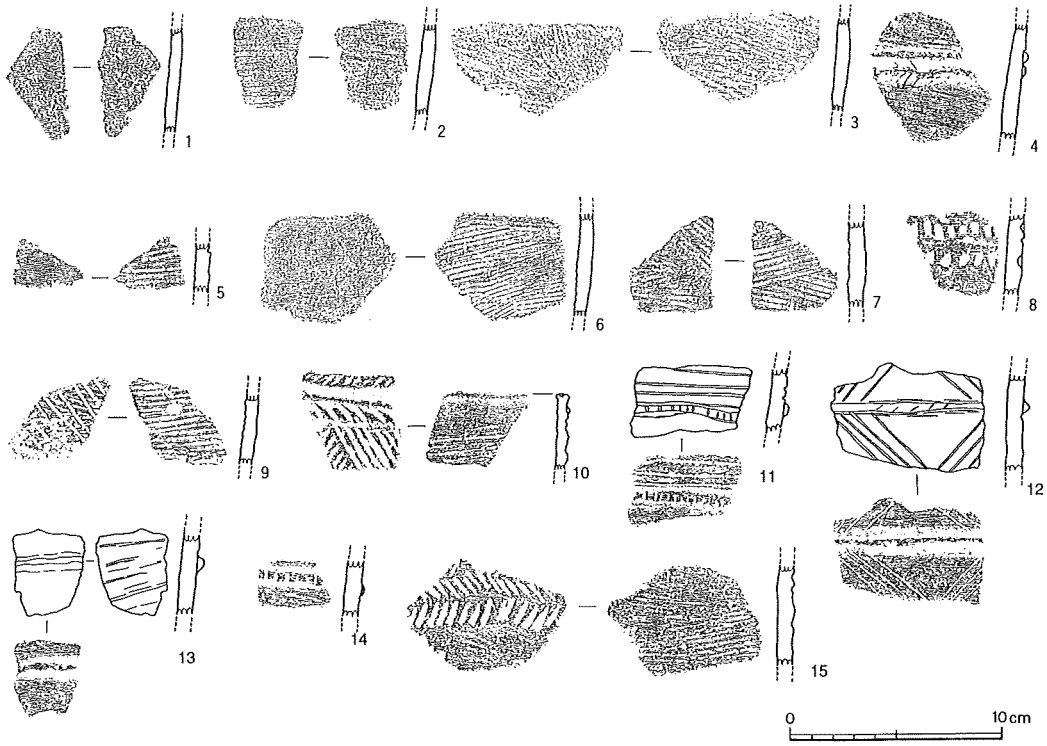
（１）第Ⅰ群　早期の土器（第17図１）

縄文時代早期に属すると考えられる土器である。本遺跡の最下層であるⅣb'層の下部から出土している。１点のみであるが遺跡周辺における人類活動の上限を示す資料と言える。

１は黄褐色を呈し，胎土はやや脆く，石英および長石を多量に含む。器壁は６㎜と薄い。器面調整は内外面共にナデのみで，工具が使用された痕跡は認められない。これらの特徴は，伊木力遺跡Ⅰ群１類土器（水ノ江1990）に類似するものであり，最下層であるⅣb'層下部からの出土である点と併せて，１を早期に位置づけた根拠となっている。

（２）第Ⅱ群　轟Ｂ式土器（第17図２～４）

２・３は内外面に貝殻条痕がなされるが隆帯は認められない。いずれも轟Ｂ式土器の胴部屈曲型と思われる。４は条痕地に断面が蒲鉾形の隆帯が貼付けられ，さらに隆帯の側面に刻みが施されている。貼付隆帯の断面が三角形ではなく蒲鉾形であることから，轟Ｂ式のなかでは比較的新しい段階に位置するものである。なお，器形は深鉢と思われる。



第17図　出土土器（1）（1/3）

（3）第Ⅲ群　西唐津式土器（第17図5～15・第18図16～54）

縄文時代前期に属し，轟B式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群を取り上げた。なお，第Ⅲ群土器の名称については「西唐津式」・「プロト曽畑」・「中間土器群」等の名称が提唱されているが未だ一定していない。本報告では，「轟B式と曽畑式の中間に位置する土器群」の初出が西唐津海底遺跡であるため，学史的観点から「西唐津式土器」とした(註1)。また，第Ⅲ群土器のなかで，轟B式の影響が残されている一群をa類(註2)，横走沈線による区画の内部を弧線（連弧文・重弧文・弧線文等）で充填した，いわゆる「野口・阿多タイプ」と呼ばれる一群をb類に細分した。

a類　轟B式土器の影響を残す一群（第17図5～15）

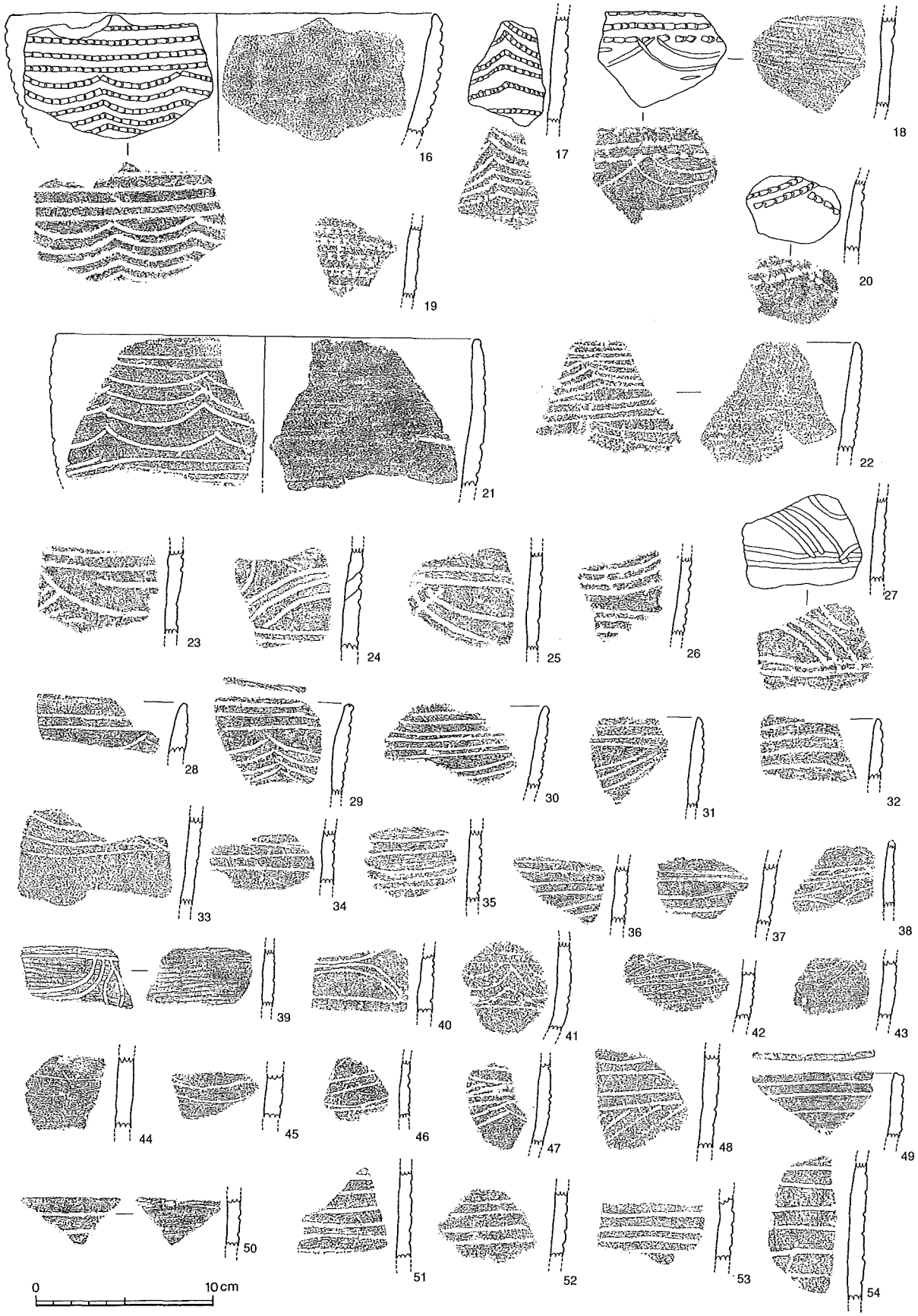
轟B式土器の文様構成を保ちながら施文技法に変化が現れているものである。

5～7は条痕を施したものである。5は内面に強い条痕を残す。外面に横走沈線が確認されるが小片であるため，全体の施文は不明である。6は内面に条痕がなされ，外面は丁寧にナデ調整が施されている。7は内外面ともに条痕がなされている。施文原体はいずれも二枚貝腹縁によるものである。8はヘラ状工具による短沈線状の刺突文がなされている。刺突文は「上→下」方向へ施文され，ナデ調整されているが下部にややふくらみが残る。深堀遺跡第Ⅲ群第1類土器（渡邊1984）に相当すると思われる。9・10は内面に貝殻条痕を施し，外面に斜走沈線が施されたもので，9は横走沈線の上から斜走沈線を施文している。内面の条痕が強い。10は断面蒲鉾形の貼付隆帯をなした上で，斜走沈線を施している。11～14は横位に隆帯が貼付けられた一群である。11・14は断面蒲鉾形の隆帯上に刻みがなされ，11は隆帯上部に横走沈線が施される。12は断面三角形の隆帯が貼付けられ，隆帯上下に斜走沈線が施文される。隆帯頂部はナデが施されている。胎土に滑石を多量に含み，焼成は非常に堅緻である。15は短沈線による綾杉文を描出する。短沈線は「上→下」方向へ施文され，8と同様下部にややふくらみが残る。

b類　野口・阿多タイプ（第18図16～54）

野口遺跡第Ⅳ群土器（富永1981）および阿多貝塚第Ⅳ群B類・C類土器（戸崎・青崎1978）に相当する土器群である。

16～20は施文技法として，押引きあるいは沈線を用いて施文した一群である。16・17は横走する沈線文および弧線文が結節沈線により描出されている。16は出土当初，外面に文様が識別できぬ程多量の炭化物が付着していた。外面は整然とした結節沈線により施文されている。内面は丁寧なナデ調整が施され，指頭押圧が認められる。器種は浅鉢である。17は16に比べ，押引きの間隔が一定しておらず粗雑である。18は押引きと沈線の組み合わせによる施文である。まず，押引きによる横走沈線がなされ，下部に沈線による弧線文がなされている。施文方向は「左→右」である。19は外面は淡茶褐色を呈す。外面に横走する結節沈線が浅く施されている。内面はナデが施される。20は外面に斜走する結節沈線が施されている。19・20はいずれも小片であるため，全体の施文は不明である。なお，16～20は押引きの原体に明確な差異が認められるため，詳述したい。17・18は16に比べ，押引き痕の両端が丸味を帯びているため，原体は丸棒状であると思われる。19は押引きが浅く，幅も他と比べて2㎜程広いことから，原体はヘラ状であろう。20は押引き痕を観察すると，片側の両端が尖り，中央がくぼんでいる。この痕跡を残す原体としては，竹のように中身が空洞な原体を片側より斜めに切断し，さらに逆側から斜めに切断した状態の原体が考えられる(註3)。現在のところ，文様と施文原体の相関関係は明らかにされていないが，様々な施文原体が存在することは興味深い。21～54は区画帯・弧線文，ともに沈線により施文された一群である。21は口縁でやや内湾気味に立ち上る。深鉢と思われる。下部の横走沈線の始点と終点が一致せず，一本分のズレが生じている。内外面に炭化物の付着が著しい。22は文様全体が若干傾斜している。滑石の混入は少量である。23～27は胴部片である。23は21同様，横走沈線の始点と終点が一致せず，一本分のズレが生じている。26は内面に大量の炭化物が確認された。27は横走沈線→弧線文という施文順序が明確に見て取れる。28～32は口縁部である。28は口縁が若干外反する。2条の横走沈線による区画帯の下部に弧線文がなされている。29は口唇部に浅い刻みがなされている。「野口・阿多タイプ」において口唇部に刻みを施したものはさほど多くなく，本遺跡においても29・49の2点のみである。30は口縁に6条の横走沈線を施している。口縁部のみの残存であるが，浅鉢と思われる。31は口縁が若干内湾する。弧線文の傾斜が緩い。32は数条の横走沈線がなされているが，30のようには整然とはしておらず，大雑把である。33は胎土に砂粒を含みやや脆い。下部に文様がないことから胴部中央付近であろう。34は外面の沈線にズレが生じている。35･36は弧線文の傾斜が浅く，36は胎土に多量の角閃石を含んでいる。39・40は重弧文の描写が非常によく似ているが，胎土・施文・調整等が若干相違している。39は器壁が約5㎜と薄く，滑石はごく微量である。条痕地に横走沈線による区画を行い，内部に重弧文および縦位に螺旋状の沈線をなす。なお，弧線文が縦位の区画帯であるか否かは小片であり不明である。40の器壁は約9㎜と厚く，滑石を多量に含む。施文は39とほぼ同一であるが，縦位の「8の字」状の沈線は確認されない。38・41～46は細沈線により施文された一群である。38は口縁部である。口縁が若干外反するようである。横走沈線の4本目にズレが生じており，粗雑な施文である。41は下部の傾斜が強い。浅鉢であろうか。滑石を含んでいるが，焼成が不良であり，胎土も脆弱である。42は滑石を多量に含み非常に堅緻である。横走沈線が数多く施文されており，確認できるだけでも6本を数える。沈線は鋭



第18図　出土土器（2）（1/3）

い。43・44は極めて微細な沈線が浅く，比較的広い間隔で施文されている。脆弱な工具によるものと思われる。45は内面に条痕が残る。施文が雑である。46は横走沈線の下部に２本単位の弧線文が施される。器壁が約４㎜と薄い。47は横走沈線の一部が斜行化している。48は横走沈線の下部に斜走沈線を施している。小片であるため，施文全体は定かではないが，野口遺跡出土の資料から推測すると，斜走沈線は山形文をなすと思われる。49～53は平行する横走沈線を有する一群であり，野口遺跡第Ⅳ群ｃ類土器，阿多貝塚第Ⅳ群Ｂ類土器と同系統のものと思われる。49は口縁がやや内湾する。口縁直下より横走沈線がなされている。内面は丁寧にナデられ，指頭押圧の痕跡が残る。口唇部の一部には刺突がなされる。50は内面に条痕が残る。やや胎土が脆い。49・50は共に鋭利な工具により鋭く施文されている。51は内外面に多量の炭化物が付着している。沈線は浅くやや雑な印象を受ける。53は丸棒状の原体により力強く施文されている。滑石を多く含み堅緻である。54は49～53と比べ，横走沈線の間隔が広く，間隔の開いた沈線間には施文の充填等は行われていない。下本山岩陰（麻生1972）から出土している野口・阿多タイプの胴部下部に相当するものであろうか。

（４）第Ⅳ群　曽畑式土器・轟Ｄ式土器（第19図55～79・第20図80～110）

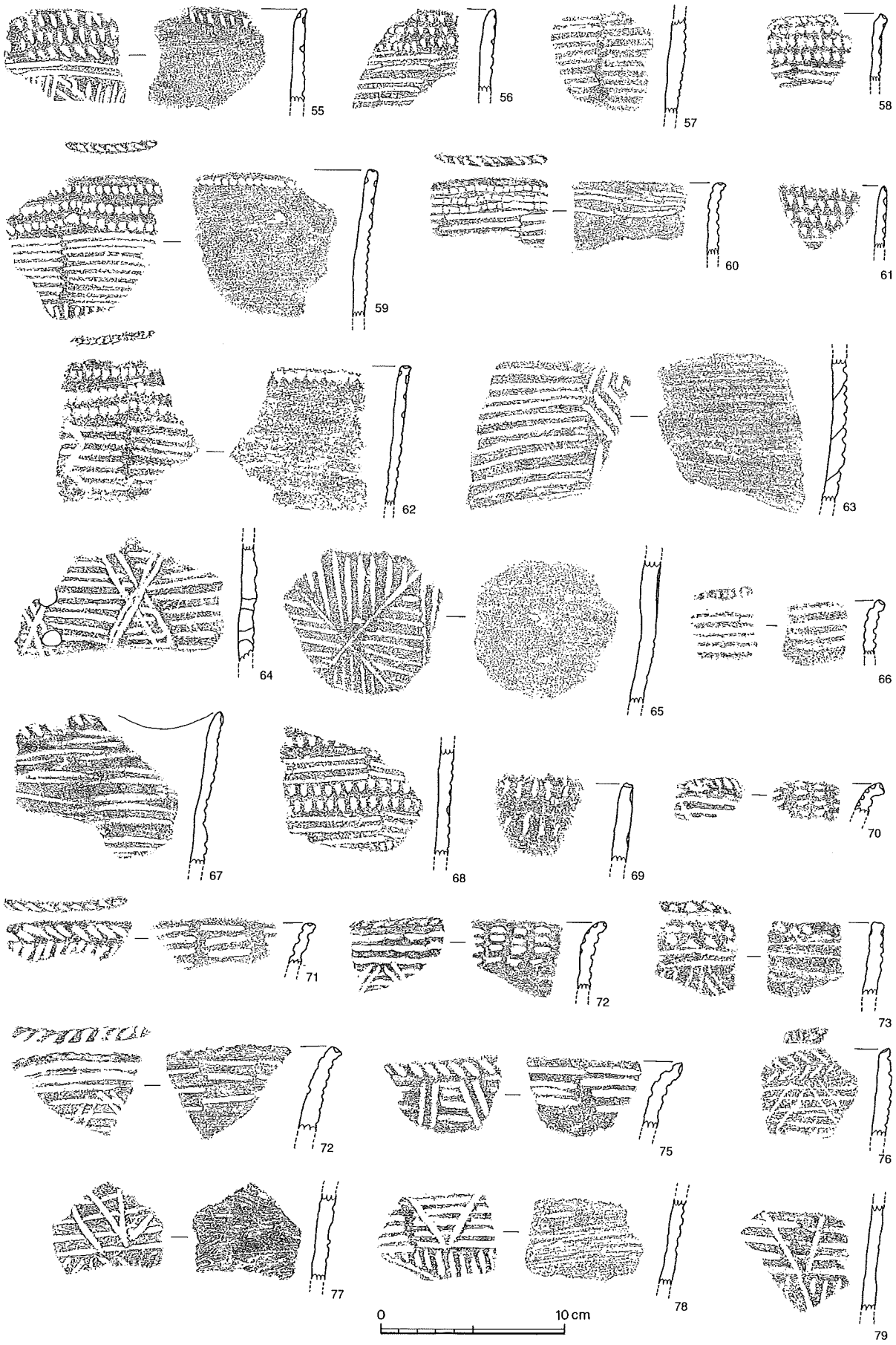
曽畑式土器および轟Ｄ式土器を第Ⅳ群として取り上げた。本群は水ノ江編年（水ノ江1990）を基本として，曽畑Ⅰ式土器をａ類，曽畑Ⅱ式土器をｂ類，曽畑Ⅲ式土器・轟Ｄ式土器をｃ類と分類している。第Ⅳ群中ではｂ類の出土が最も多く，ａ類およびｃ類の数は少ない。

ａ類　曽畑Ⅰ式（第19図55～57）

55は，外面が黒褐色・内面が暗茶褐色を呈し，口縁がわずかに外反する。外面に２条の横走沈線による区画がなされ，上部に３列の「上→下」方向の短沈線化した刺突列点文，下部に沈線文が充填される。小片のため文様は定かではないが，山形文を描くと思われる。内面には１列の刺突文が施されている。内外面共に，刺突をなした際の膨らみが完全に消えるまで丁寧にナデられた非常に堅緻な作りである。深堀遺跡第Ⅳ群第４類土器（渡邊1984）に相当すると思われる。56は55と同様に口縁がわずかに外反する。外面に３列の刺突列点文がなされ下部に横走沈線が連続して施文されている。内面は無文である。刺突列点文と横走沈線のみで構成される深堀遺跡第Ⅳ群第２類に相当するものであろう。57は滑石を多量に含み焼成も良好である。胴部資料であり，口縁部は定かではないが深堀遺跡第Ⅳ群第２類土器（渡邊1984）の胴部にあたると考え、ａ類に含めた。

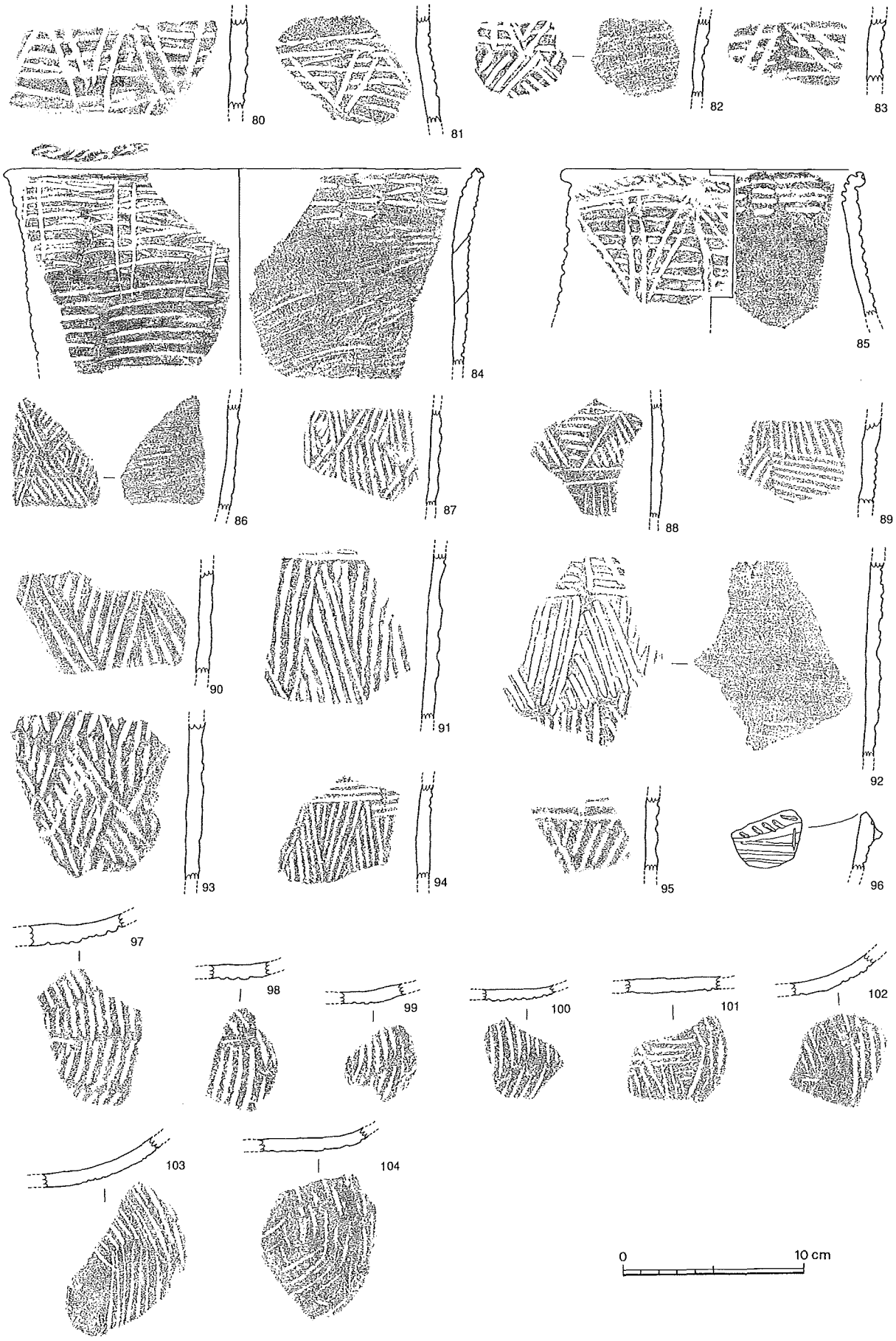
ｂ類　曽畑Ⅱ式（第19図58～79・第20図80～104）

58は口縁部が外反する。胎土に肉眼で確認できる程に多量の滑石が含まれている。３列の刺突列点文が配され，横走沈線が施文される。口唇部に刻みがなされ，内面には指頭圧痕が明瞭に観察できる。59は外面に横走する沈線を区画帯とし，上部に３列の刺突列点文を配している。区画帯の下には刺突がなされている。内面は条痕を残し，１列の刺突がなされる。水ノ江編年におけるＡ類古段階にあたるものであろう。60は短沈線により区画がなされているものの，刺突文が間延びし，押引き化している。内面には短沈線，口唇部には刻みが施される。61は３列の刺突文と区画帯の沈線が確認される。器壁は約４㎜と薄い。62は刺突列点文の下部に連続する横走沈線をなし，沈線文上に短沈線による山形文を縦位に施している。この縦位の山形文は横走沈線に重ねて施文されていることから，区画帯ではないと考えられる。下本山岩陰より出土したＣ類古段階の資料に類似することから同系統のものであると考えられる。63は62と同系統のものである。器壁は約９㎜と厚く，内面に強い条痕がなされ



第19図　出土土器（3）（1/3）

ている。64は横走沈線上に2本単位の沈線を「×」字状に連続して配している。胎土に滑石を多量に含み，焼成も良好である。補修孔が2ヶ所に確認される。65は縦位の区画をさらに「×」字状に分割し，その区画を沈線で充填している。内面に若干ながら条痕が残る。滑石は少量で焼成も甘い。64・65共に「×」字状の施文は「＼」→「／」の順になされている。66は口縁が外反し，内外面共に横走沈線が施されている。第一文様帯の刺突列点文が口唇部のみに残存し，区画帯が迫り上がったものでる。67は緩やかな波状口縁をなし，66と同様，刺突列点文が口唇部のみに残存し，横走沈線が粗雑に描かれる。滑石を少量含み，焼成は悪い。68は刺突文と横走短沈線を交互に配している。59と同系統か。69は短沈線化した刺突が縦位に施され，口唇部に強い刻みがなされている。刺突の間隔がやや広い。滑石を多く含む。70・72・74・76～83は数条の横走沈線上に，数条の山形文を施す一群である。70は口縁が強く外反し，口唇部に刻みがなされ，内面は数列の刺突文が連続して施される。71は外面に刺突による綾杉文，内面に横走沈線，口唇部に刻みが施される。口縁部のみの残存であるため，下部の文様は不明である。72は口縁部に3条の結節沈線を施し，下部の横走沈線上に2本単位の山形文をなす。73は滑石を多量に含む。内外面暗茶褐色を呈し口縁が若干内湾する。口縁部に2列の刺突文をなし，横走沈線の下部に山形文が描かれる。内面は1列の刺突文の下に数条の雑な細沈線が施されている。内外面ともに刺突の痕跡が20と類似するため，同様の原体を用いたと思われる。74は明茶褐色を呈し，口縁が強く外反する。外面の横走沈線上に2本単位の山形文をなす。内面は横走短沈線が不規則に配され，口唇部に刻みが施される。どの施文も力強い。75は口縁部が強く外反し，刻みが施される。外面は2本単位の緩やかな斜走沈線が施され，空間に横走沈線が充填される。施文の先後関係が70・72・74・76～83と異なる。76は短沈線化した刺突による綾杉文が施され，下部の横走沈線上に2本単位の山形文を描く。内面には貝殻条痕がなされ口唇部にごく浅い刻みが施される。77は横走沈線上に2本単位の山形文が施され，下部に斜走沈線が施される。78・79・82は横走沈線上に2本単位の山形文が施され，下部には折帯文が施されている。81・83は横走沈線上に2本単位の山形文が施される。下部の施文は不明である。81は壺形であると思われる。84は口縁が緩やかに外反し，口唇部には刻みが施されている。外面は，雑に間延びした横走沈線上に2条の斜行沈線を施した後，間隔をとりながら2本単位の縦走沈線が重ねて施文される。その下部には上部同様，間延びした沈線が横走する。内面は2枚貝腹縁による条痕がなされ口縁に短沈線が施される。施文方向は内外面共に「上→下」・「左→右」である。内外面に多量の炭化物が確認された。85は口縁部が極めて強く外反し，口唇部に刻みがなされる。外面は横走沈線の上に2本単位の斜走沈線および縦走沈線が施されており，切り合い関係から「＼→／→｜」の順に施文されたことが分かる。斜走沈線により山形文を描いた後に縦走沈線を施したようである。内面は4列の短沈線文が施される。内外面共にナデ調整がなされているものの，文様周辺部の乱れが顕著である点から，胎土が軟弱な段階で施文されたことが窺える。器種は81同様壺形であり，深堀遺跡出土の資料に類似している。壺形は曽畑式土器全体の中でもごく稀な器形である（中村1982）。86は区画帯が省略された折帯文が描かれている。内面は条痕がなされる。87は斜走沈線により菱形が描かれる。内面は条痕調整がなされており，炭化物の付着が著しい。88は横位の区画内部を斜走沈線でさらに区画し，沈線により充填したのもである。下部は縦走沈線が施されている。89は横走・縦走・斜走の沈線により施文される。施文順序は「―→｜→／」である。90～92・94・95は折帯文をなす胴部資料である。90は外面に多量の炭化物が付着す

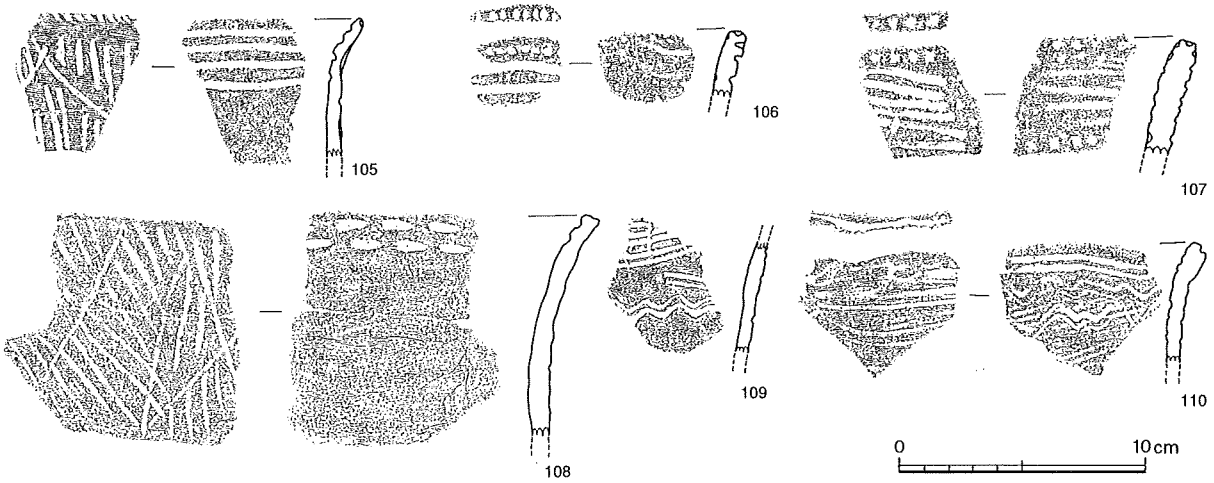


第20図　出土土器（4）（1/3）

る。内面に指頭圧痕が明瞭に残る。91は胎土に滑石をほとんど含んでいない。文様周辺部に乱れや潰れが確認される。85同様，胎土が軟弱な段階で施文・調整が行われたと考えられる。92は滑石を多量に含み，焼成も良好である。折帯文が斜めに傾いている点，また、施文時に生じた胎土の盛り上がりが残る点など，全体的に粗雑な施文・調整である。93は86と同様に，折帯文の区画が省略されている。出土当初、外面に黄土色の砂粒が大量に付着していた。94は折帯文右側にはみ出した２条の横走沈線が確認される。小片であり，全体の施文は不明である。95は折帯文の間隔がやや広い。96は滑石を多量に含み，焼成も良好である。口縁部に隆帯を貼付けた後，刻みをなし，隆帯下部に横走沈線を施している。同じ隆帯が施された曽畑式土器が千里ヶ浜遺跡（福田2002）からも数点出土している(註4)。97～104は底部資料である。曽畑式に特有な「蜘蛛の巣」状に施文された資料は確認されず，全て沈線を同心円状に配したものである。97～100は短沈線が比較的整然と施文されている。98・99は一部に縦位の沈線が確認される。101は中心部に沈線による施文がなされる。102は中心部になるにつれ施文が乱れている。103は中心部が無文のまま残されている。104は中央部まで沈線が同心円状に粗雑に描かれる。なお，底部資料は全て滑石を含むものの整然とした施文がなされたものが少ないため，曽畑Ⅱ式土器と判断しｂ類に含めた。

ｃ類　曽畑Ⅲ式（第21図105～108）・轟Ｄ式土器（第21図109・110）

基本的に滑石を含まず，施文も曽畑式から逸脱するものの，曽畑式の系譜上にあたると考えられる一群である。轟Ｄ式土器も本類に含めている。



第21図　出土土器（5）（1/3）

105～108は曽畑Ⅲ式土器である。105は口縁が外反し，口唇部に刻みがなされる。外面は斜走沈線により分割された区画を縦走短沈線により充填する。内面は４条の横走沈線が施される。わずかながら滑石を含む。106は先端が「∠」を逆さした形状の原体により横走沈線がなされ，口縁部に丸棒状の原体による刺突が施されている。口唇部には刻みがなされる。内面には刺突による施文が行われる。107はヘラ状の原体により，内外面共に刺突・横走沈線，口唇部には刻みが施される。なお，106・107は口縁部が，実際は強く外反するものである。108は口縁部から胴部にかけてかなり乱れた組帯文が描かれる。胎土に若干の滑石を含む。109・110は轟Ｄ式土器である。横走する条痕を地文として，２本～数本単位の横位・斜位・曲線の沈線が施されている。109は内面が無文である。110は口唇部に沈線が施されている。

（5）第Ⅴ群　船元式・春日式土器（第22図111～113）

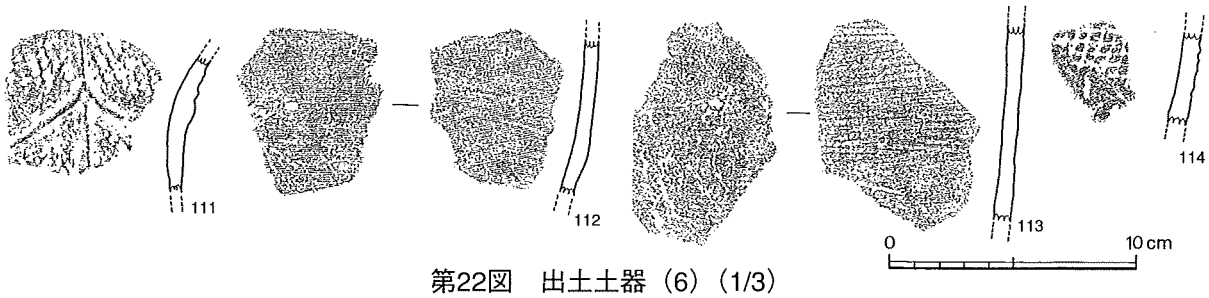
中期に属する船元式土器・春日式土器を取り上げた。第Ⅴ群土器は出土数が3点と少ない。加えて，縄文～近世までの遺物を含むⅢ層からの出土であることから，遺跡後方の微高地より河川を媒介して流入してきた可能性が高い。

111は船元式土器である。縄文地に隆帯を垂下させる。内面は条痕がなされる。キャリパー形の屈曲部と思われる。焼成が悪い。112・113は春日式土器の胴部資料である。胎土に滑石を含み，内外面条痕が施される。

（6）第Ⅵ群　晩期の土器（第22図114）

晩期に属する土器を取り上げた。1点のみである。表採資料であり，摩滅が著しいことから第Ⅴ群土器を同様，遺跡後方の微高地から河川を媒介して流入してきた可能性が高い。

114は外面淡茶褐色，内面黒褐色を呈す。外面に組織痕が確認される。全体的に摩滅が著しい。



第22図　出土土器（6）（1/3）

（7）第Ⅶ群　その他の土器（第23図115～118）

a類　深堀第Ⅸ群4類土器（第23図115）

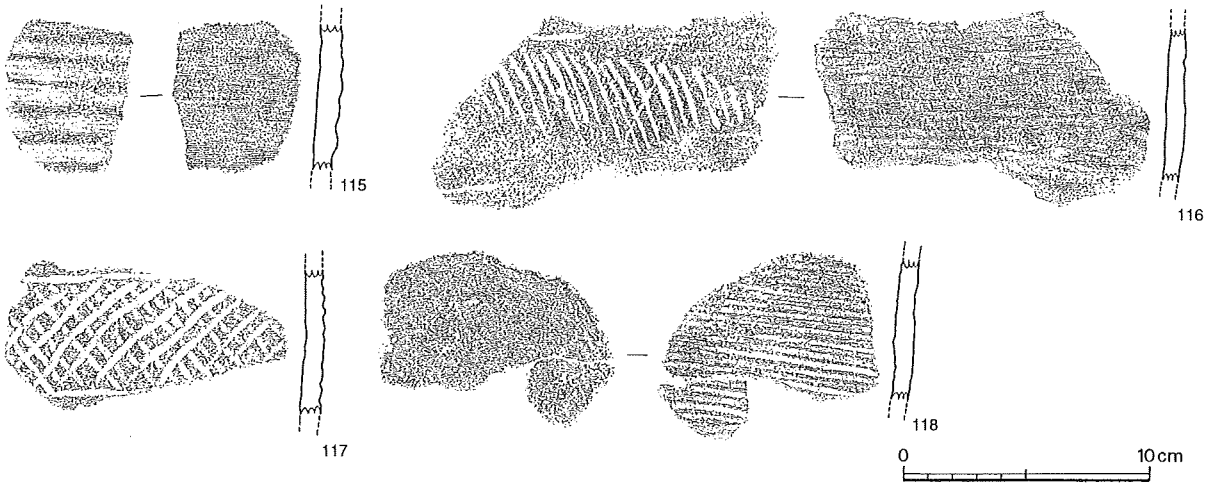
深堀遺跡より出土し，第Ⅸ群4類（加納1984）に分類された土器に類似するものである。

115は内面に貝殻条痕が施され，外面にはナゾリによる凹線が施されている。115は胴部片であるが，深堀遺跡出土の資料から推測すると，口縁部は強く外反すると考えられる。また，深堀遺跡出土の資料には波状口縁の個体もみられる。報告者は深堀遺跡第Ⅸ群4類土器を前期末～中期に比定している。県内では浜田遺跡（横山1981）(註5)からも類似の資料が確認されてる。現在のところ出土例は少数であるが，一つの型式をなす土器群と考えられるため，今後の資料増加を期待したい。

b類　型式不明土器（第23図116～118）

116・117は滑石を含み，曽畑式土器同様，「区画内部を充填」という施文を行うが，曽畑式とはいささか趣を異にするものである。116は僅かであるが，胎土に滑石を含む。焼成は不良。外面は横走沈線による区画内部が「＼」の斜走沈線で充填され，内面には条痕が施されている。117は胎土の滑石を含む。外面は横位の区画帯がなされ，空間に「＼→／」の順に施文された格子目文が充填される。格子目文は韓国の櫛目文土器に一般的な文様であり，櫛目文土器との関連性を感じさせるが，櫛目文土器は区画帯を持たない。区画帯は曽畑式土器の特徴であることから両者の折衷土器である可能性も考えられる。116も「横位の区画内部を斜走沈線で充填」という共通点から同様の可能性が考えられる。118は内外面共に灰茶褐色を呈す。外面は無文であり，内面に貝殻条痕が施されている。春日式並行期の所産と思われる。

（井立　尚）



第23図　出土土器（7）（1/3）

追記：供養川遺跡出土土器の報告にあたって古門雅高氏・渡辺康行氏・東 貴之氏より多大な御教授，御助力をいただいた。この場を借りて，心よりお礼申し上げます。

【註】

（註１）轟式Ｂ土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群の初出が西唐津海底遺跡（江坂1967）（松岡・森1981）であるためである。

（註２）第Ⅲ群土器とした土器群から「野口・阿多タイプ」を差し引いた、轟式土器の影響を残す土器群をａ類と分類している。

（註３）原体の先端が「∧」となるように切断したもの。

（註４）４点確認されているが、紙面の都合により掲載することが叶わなかった。

（註５）報告書181頁「Fig. 5　浜田遺跡出土土器①」の14の土器である。

【参考文献】

麻生優編　1972　『下本山岩陰』佐世保市教育委員会

富永直樹編　1981　「野口遺跡」『久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告』久留米文化財調査報告書第28集 久留米市教育委員会

戸崎勝洋・青崎和憲　1978　『阿多貝塚』金峰町教育委員会

水ノ江和同　1990　「西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡　－長崎県大村湾沿岸における縄文時代底湿地遺跡の調査－』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室

水ノ江和同訳：Albert Mohe・吉崎昌一　1990　「西九州における文化の変遷」『古文化談叢』NO.22　九州古文化研究会

中村 愿　1982　「曽畑式土器」『縄文土器の研究３』 雄山閣

松岡史・森 醇一朗　1981　「佐賀県西唐津海底出土の縄文土器　曽畑式土器を中心として」『考古学ジャーナル』188ニューサイエンス社

東 貴之　2002　「縄文土器」『玖島城跡』 長崎県文化財調査報告書167集　長崎県教育委員会

福田一志編　2002　『千里ヶ浜遺跡』 長崎県文化財調査報告書168集　長崎県教育委員会

古門雅高編　1996　『頭ヶ浜白浜遺跡』有川町文化財調査報告書　第１集　有川町教育委員会

横山巳貴子　1981　「浜田遺跡」『九州横断道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』 長崎県文化財調査報告書第54集 長崎県教育委員会

渡邊康行　1984　「第Ⅲ群土器について」『長崎市深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎市教育委員会

第3表　土器観察表（1）

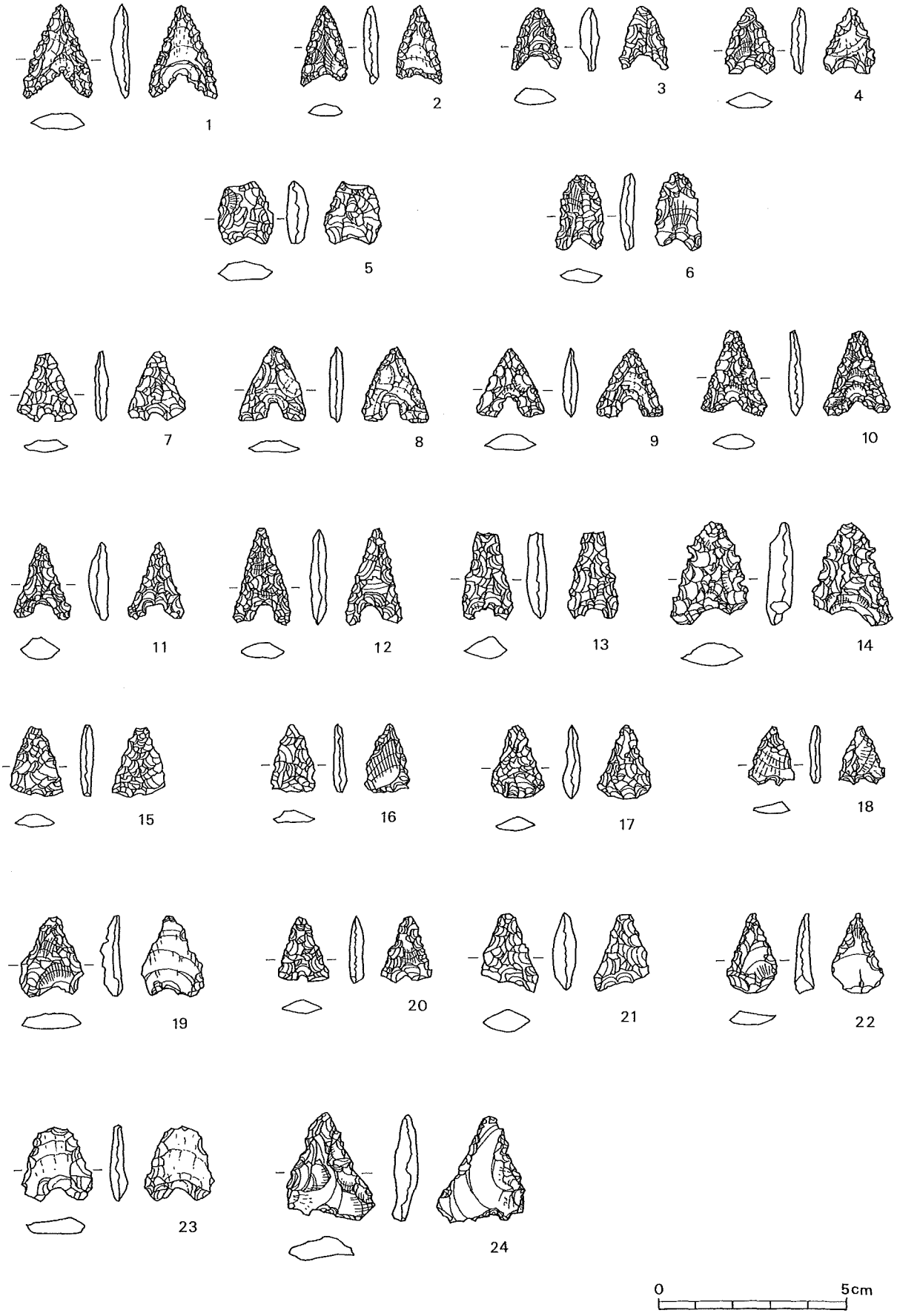
図版番号	遺物番号	出土地区	層位	分類	色調 外面	色調 内面	焼成	部位	胎土	施文・処理 外面	施文・処理 内面	施文・処理 口唇部	炭化物 外面	炭化物 内面	備考
第17図	1	G−1	Ⅳb'	Ⅰ	黄褐色	淡黒褐色	不良	胴部	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ			○	
	2	G−2	Ⅳb'	Ⅱ	淡黒褐色	淡黒褐色	不良	胴部	石英・長石・角閃石	条痕→ナデ消し	条痕→ナデ消し				
	3	H−1	Ⅳb'	Ⅱ	黒褐色	濃灰褐色	不良	胴部	石英・長石・角閃石	条痕→ナデ消し	条痕→ナデ消し		○		
	4	H−1	Ⅳb'	Ⅱ	黒褐色	黒褐色	堅緻	胴部	石英・長石	条痕・貼付隆帯	条痕		○		
	5	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英	ナデ・沈線（横走）	条痕・ナデ			○	条痕が強い
	6	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	淡茶褐色	淡茶褐色	不良	胴部	滑石・長石・石英	条痕・ナデ	条痕				
	7	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	淡茶褐色	淡茶褐色	不良	胴部	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	条痕	条痕				
	8	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	明茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・長石・小礫	押引刺突・ナデ	条痕→ナデ消し				
	9	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・石英・長石・雲母・小礫	沈線（斜走・横走）	条痕				条痕が強い
	10	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	茶褐色	茶褐色	良	口縁	滑石・長石・石英	貼付隆帯・沈線（斜走）	条痕→ナデ消し	刻み			
	11	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	明茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	細沈線（横走）・貼付け隆帯（隆帯上に刻み）	ナデ				
	12	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	細沈線（斜走）・貼付け隆帯	条痕→ナデ消し		○	○	
	13	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−a	暗茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英	貼付け隆帯・条痕・ナデ	条痕→ナデ消し		○		
	14	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−a	暗茶褐色	茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	貼付け隆帯（隆帯上に刻み）条痕・ナデ	条痕→ナデ消し				
	15	EF−1・2	Ⅳb'	Ⅲ−a	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英	短沈線による綾杉文 条痕・ナデ	条痕				
第18図	16	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	黒褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・雲母・小礫	結節沈線（横走・弧文）・ナデ	ナデ・指頭押圧		○		外面に大量の炭化物
	17	G−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫・微砂粒	結節沈線（横走・弧文）・ナデ	ナデ		○	○	
	18	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	結節沈線（横走）沈線（弧文）・ナデ	条痕→ナデ消し				
	19	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	結節沈線（横走）	ナデ				
	20	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	灰褐色	良	胴部	滑石・石英・小礫	結節沈線（斜走）	ナデ				滑石微量
	21	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	口縁	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走・弧線文）	条痕		○	○	
	22	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・小礫	沈線（横走・弧線文）	条痕→ナデ消し				
	23	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	24	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	条痕				
	25	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・小礫・黒雲母	沈線（横走・弧線文）	条痕→ナデ消し				
	26	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ			○	
	27	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	条痕→ナデ消し				
	28	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	条痕→ナデ消し		○		
	29	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	茶褐色	茶褐色	良	口縁	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ	刻み			
	30	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	濃茶褐色	濃灰褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	31	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	32	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	口縁	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走）	条痕→ナデ消し				
	33	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗黄褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・黒雲母・微砂粒	沈線（弧線文）	ナデ		○		
	34	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走）	ナデ				
	35	G−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	条痕→ナデ消し				
	36	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・黒雲母・角閃石・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	37	GH−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	38	不明	不明	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	39	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	条痕・沈線（横走・弧線文）	条痕・ナデ				滑石ごく微量
	40	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・小礫	沈線（弧線文）	ナデ				
	41	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	不良	胴部	滑石・石英・小礫	細沈線（横走・弧線文）	ナデ				滑石少量
	42	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	細沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	43	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	細沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	44	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・石英・小礫	細沈線（弧線文）	条痕→ナデ消し				滑石少量
	45	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・石英・長石・小礫	沈線（弧線文）	条痕→ナデ消し				
	46	G−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・小礫	沈線（横走・弧線文）	ナデ				
	47	GH−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・黒雲母・角閃石	沈線（横走・弧線文）	ナデ				

第４表　土器観察表（２）

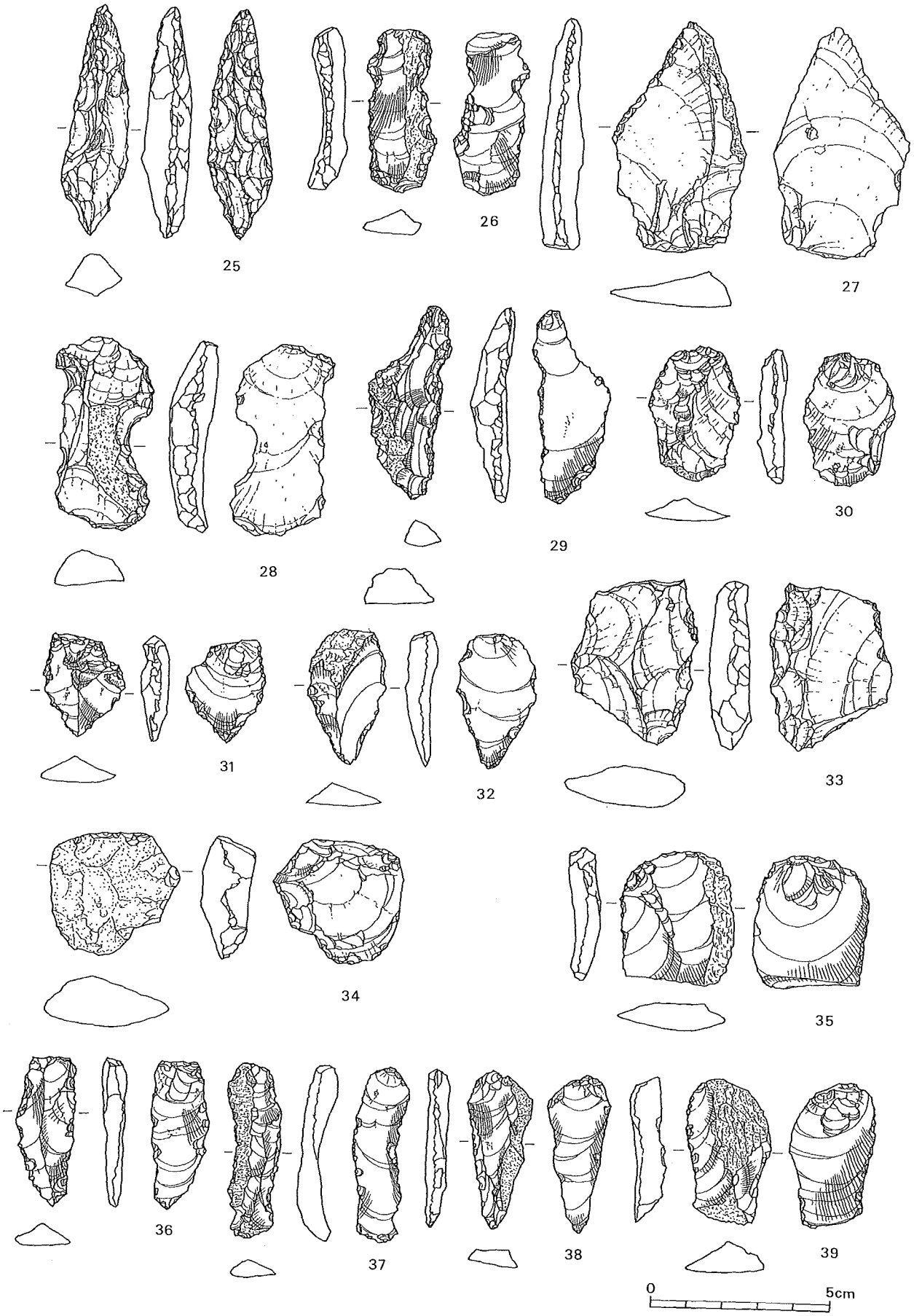
図版番号	遺物番号	出土地区	層位	分類	色調 外面	色調 内面	焼成	部位	胎土	施文・処理 外面	施文・処理 内面	施文・処理 口唇部	炭化物 外面	炭化物 内面	備考
第18図	48	EF−1・2	Ⅳb'	Ⅲ−b	黄茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・斜走）	条痕→ナデ消し			○	
	49	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走）	ナデ・指頭押圧	刺突			
	50	H−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英	沈線（横走）	貝殻条痕		○		
	51	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	暗茶褐色	黒褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・小礫	沈線（横走）	ナデ		○	○	内面に大量の炭化物
	52	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走）	ナデ				
	53	G−1	Ⅳb'	Ⅲ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・黒雲母・長石・小礫	沈線（横走）	ナデ				
	54	H−2	Ⅳb'	Ⅲ−b	黄茶褐色	黄茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・金雲母・小礫	沈線（横走）	ナデ				
第19図	55	GH−2	Ⅳb'	Ⅳ−a	黒褐色	暗茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	３条の刺突 沈線（横走・斜走）	刺突 条痕→ナデ消し		○	○	外面非常に丁寧なナデ
	56	F−2	Ⅳb	Ⅳ−a	暗茶褐色	暗茶褐色	良	口縁	滑石・石英・小礫	沈線（横走）	ナデ・指頭押圧				外面非常に丁寧なナデ
	57	EF−2	Ⅳb	Ⅳ−a	暗茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走）	ナデ		○		
	58	H−2	Ⅳb	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	口縁	滑石・石英・小礫	３条の刺突連点文 沈線（横走）	ナデ・指頭押圧	刺突			
	59	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	口縁	滑石・石英・角閃石・小礫	３条の刺突連点文 沈線（横走）・刺突？	刺突・条痕 →ナデ消し	刻み			
	60	G−1	Ⅳa	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	口縁	滑石・石英・石英・黒雲母・小礫	押引沈線（横走） 沈線（横走）	横走沈線・ナデ	刻み			
	61	GH−2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・小礫	刺突・沈線（横走）	ナデ	刻み			
	62	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・小礫	３条の刺突 沈線（横走・鋸歯文）	刺突・条痕→ナデ・指頭押圧	刻み			
	63	G−2	Ⅳb	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走・鋸歯文）	貝殻条痕・ナデ				
	64	G−2	Ⅳb	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走・×字）	ナデ				補修孔
	65	G−2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	沈線（横走・縦走・×字）	貝殻条痕・ナデ				滑石少量
	66	G−1	Ⅳa	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	口縁	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走）	沈線（横走）	刻み			
	67	B−1	Ⅲ	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	口縁	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	刻み・沈線（横走）	ナデ				波状口縁 滑石少量
	68	H−2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	良	胴部	滑石・石英・長石・金雲母・小礫	沈線（横走）・刺突連点文	ナデ				
	69	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	短沈線（縦走）	ナデ	刻み			
	70	GH−2	Ⅳb	Ⅳ−b	茶褐色	茶褐色	堅緻	口縁	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走・斜走）	刺突連点文	刻み			
	71	EF−2	Ⅳb	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	口縁	滑石・石英・長石・小礫	刺突綾杉文	沈線（横走）	刻み	○		
	72	EF−2	Ⅱ	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	押引沈線（横走） 沈線（横走・斜走）	刺突連点文	刻み			
	73	GH−2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	２条の刺突 沈線（横走・斜走）	刺突・細沈線（横走）・ナデ	刻み			
	74	G−1	Ⅳa	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	沈線（横走・山形）	沈線（横走）	刻み			
	75	GH−2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	淡茶褐色	良	口縁	滑石・石英・長石・小礫	沈線（横走・斜走）	沈線（横走）	刻み			
	76	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	良	口縁	滑石・石英・長石・小礫	刺突綾杉文 沈線（横走・斜走）	条痕→ナデ消し				
	77	EF−2	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	明茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・山形）	条痕→ナデ消し		○		
	78	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・山形・縦走）	条痕→ナデ消し		○		
	79	EF−2	Ⅱ	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・斜走・縦走）	条痕→ナデ消し		○	○	
第20図	80	GH−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	灰茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・微砂粒・小礫	沈線（横走・山形）	条痕→ナデ 指頭押圧		○		
	81	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・山形）	条痕→ナデ消し				
	82	H−1	Ⅳb	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・斜走）	条痕→ナデ消し				
	83	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	胴部	滑石・石英・小礫	沈線（横走・山形）	条痕→ナデ消し				
	84	GH−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	茶褐色	堅緻	口縁〜胴部	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	沈線（横走・縦走）	短沈線（横走） 条痕	刻み	○	○	
	85	G−1	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	口縁〜胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・縦走・斜走）	短沈線（横走）	刻み			

第５表　土器観察表（３）

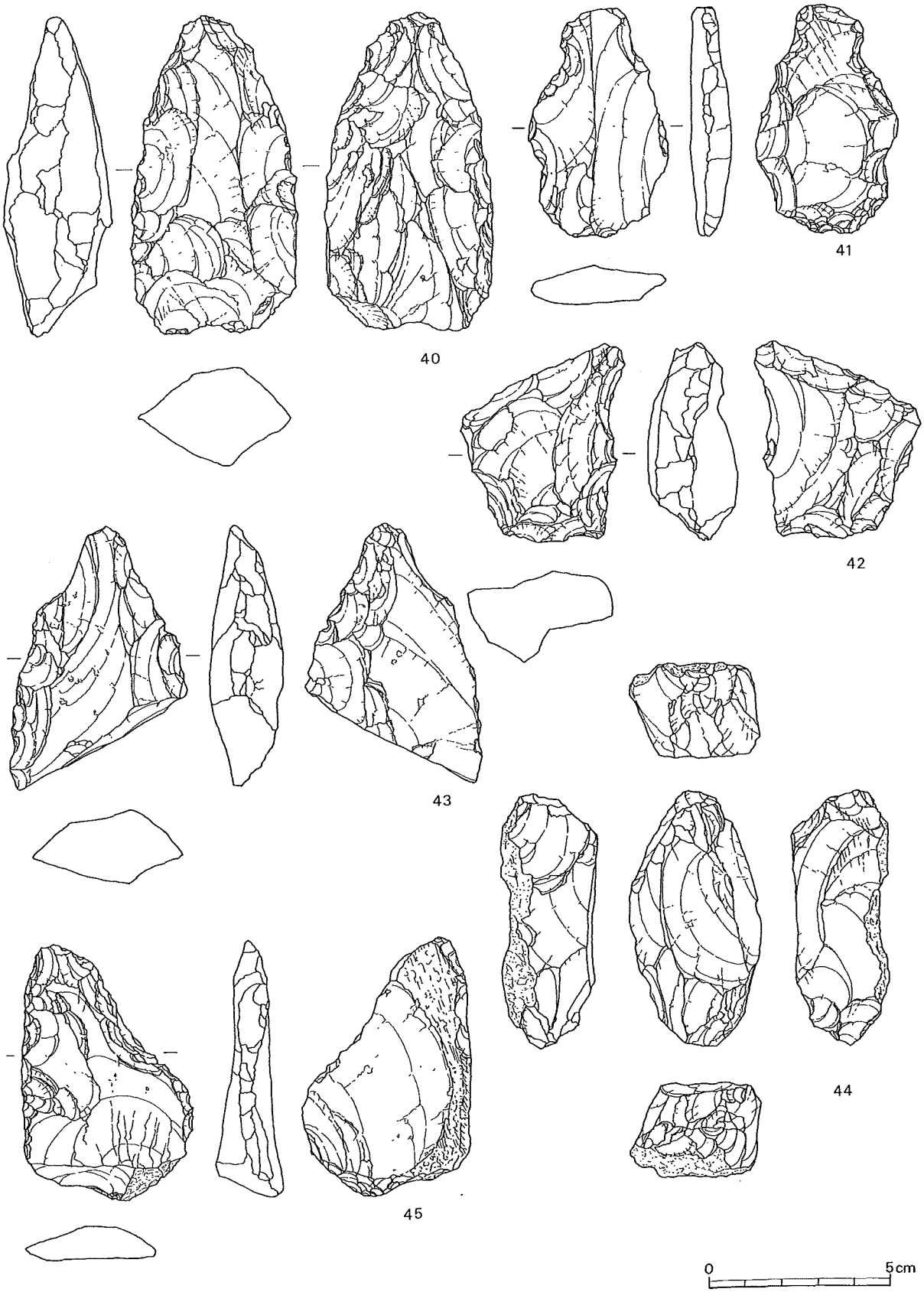
図版番号	遺物番号	出土地区	層位	分類	色調 外面	色調 内面	焼成	部位	胎土	施文・処理 外面	施文・処理 内面	施文・処理 口唇部	炭化物 外面	炭化物 内面	備考
第20図	86	EF−2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（斜走）	条痕→ナデ消し			○	
	87	H−1	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（斜走）	条痕→ナデ消し		○	○	
	88	C−1	Ⅳa	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・斜走・縦走）	ナデ		○		
	89	H−1	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・斜走・縦走）	ナデ			○	
	90	H−2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	淡茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	沈線（山形沈線）	条痕→ナデ消し 指頭押圧		○		
	91	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	黒褐色	灰褐色	不良	胴部	滑石・石英・長石・角閃石	沈線（山形沈線）	ナデ		○		滑石微量
	92	H−2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	淡茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（山形沈線）	条痕→ナデ消し		○	○	
	93	GH−2	Ⅳb	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・金雲母・小礫	沈線（斜走）	条痕→ナデ消し		○	○	
	94	GH−1	Ⅳb	Ⅳ−b	淡茶褐色	灰茶褐色	不良	胴部	滑石・長石・石英・黒雲母・小礫	沈線（横走・斜走）	条痕→ナデ消し				滑石少量
	95	G−1	Ⅳa	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・山形沈線）	ナデ				
	96	G−1	Ⅳa	Ⅳ−b	明茶褐色	明茶褐色	堅緻	口縁	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走）・貼付け隆帯 （隆帯上に刻み）	ナデ				
	97	H−2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	底部	滑石・長石・石英・小礫	短沈線	条痕→ナデ消し				
	98	D−1・2	Ⅲ	Ⅳ−b	茶褐色	茶褐色	堅緻	底部	滑石・長石・石英・小礫	短沈線	ナデ				
	99	EF−2	Ⅲ	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	底部	滑石・長石・石英・小礫	短沈線	ナデ				
	100	EF−2	Ⅱ	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	底部	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	短沈線	ナデ				
	101	EF−1・2	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	良	底部	滑石・長石・石英・小礫	沈線・短沈線	ナデ				
	102	D−1・2	Ⅲ	Ⅳ−b	暗茶褐色	淡茶褐色	良	底部	滑石・長石・石英・小礫	短沈線	ナデ				
	103	H−1	Ⅳb	Ⅳ−b	暗茶褐色	淡茶褐色	堅緻	底部	滑石・長石・石英・小礫	沈線	ナデ				
	104	G−1	Ⅳa	Ⅳ−b	暗茶褐色	暗茶褐色	堅緻	底部	滑石・長石・石英・小礫	短沈線	ナデ				
第21図	105	B−1	Ⅲ	Ⅳ−c	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	口縁	滑石・長石・石英・小礫	沈線（斜走・縦走）	沈線（横走）	刻み			滑石微量
	106	G−2	Ⅳb	Ⅳ−c	暗茶褐色	暗茶褐色	不良	口縁	滑石・石英・小礫	刺突・沈線（横走）	刺突	刻み			滑石ごく微量
	107	B−1	Ⅲ	Ⅳ−c	灰褐色	灰白色	不良	口縁	石英・長石・角閃石・小礫	刺突・沈線（横走）	刺突 沈線（横走）	刻み			
	108	H−2	Ⅲ	Ⅳ−c	黄茶褐色	黄茶褐色	不良	口縁	滑石・長石・石英・小礫	沈線（斜走）	短沈線（横走）				滑石少量
	109	表採	表採	Ⅳ−c	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	石英・長石・角閃石・黒雲母・小礫	沈線（横走・２条単位の波状）	ナデ				
	110	D−1・2	Ⅲ	Ⅳ−c	暗灰茶褐色	暗灰茶褐色	良	口縁	石英・長石・角閃石・黒雲母・小礫	沈線（波状）	沈線（２本単位の波状）	沈線			
第22図	111	G−1	Ⅲ	Ⅴ	暗灰茶褐色	灰褐色	不良	胴部	石英・長石・角閃石・小礫	縄文・隆線	ナデ				
	112	GH−2	Ⅲ	Ⅴ	明茶褐色	明茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	条痕→ナデ消し	条痕→ナデ消し				
	113	B−2	Ⅲ	Ⅴ	明茶褐色	淡黒褐色	不良	胴部	滑石・長石・石英・角閃石・小礫	条痕→ナデ消し	条痕→ナデ消し				滑石ごく微量
	114	J−1	表採	Ⅵ	淡茶褐色	黒褐色	良	胴部	石英・長石・小礫	組織痕	ナデ				
第23図	115	G−1	Ⅳb'	Ⅶ	暗茶褐色	黄茶褐色	不良	胴部	石英・長石・角閃石・微砂粒	凹線（横走）	条痕・ナデ		○		
	116	GH−2	Ⅳb	Ⅶ	灰茶褐色	暗灰茶褐色	不良	胴部	滑石・石英・長石・角閃石・微砂粒・金雲母	沈線（横走・斜走）	条痕・ナデ			○	滑石ごく微量
	117	H−2	Ⅳb	Ⅶ	暗茶褐色	暗茶褐色	良	胴部	滑石・長石・石英・小礫	沈線（横走・格子目文）	条痕→ナデ消し				
	118	H−2	Ⅳb	Ⅶ	灰茶褐色	灰茶褐色	不良	胴部	石英・長石・角閃石・微砂粒	条痕→ナデ消し	条痕				



第24図　出土石器（1）（2/3）

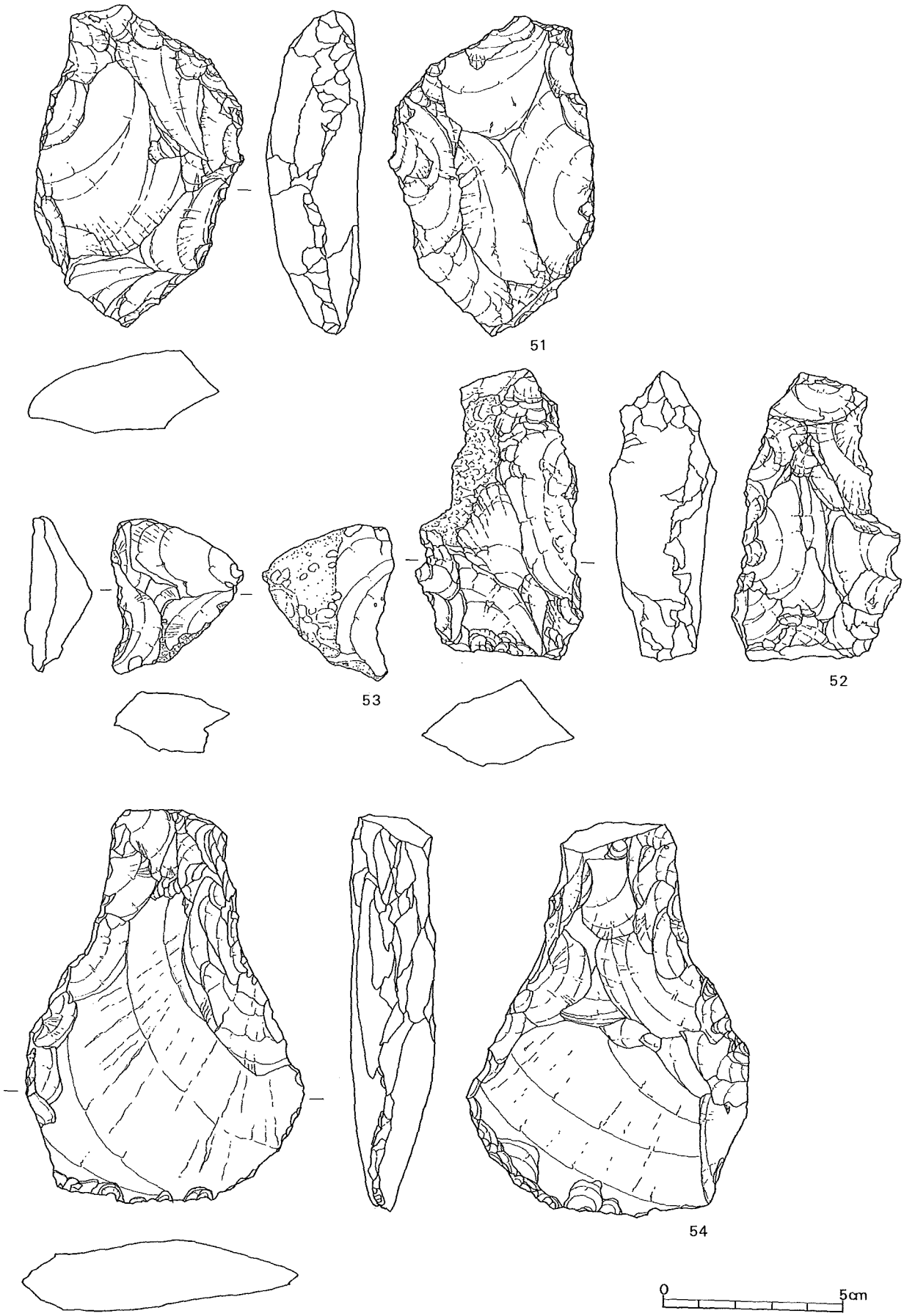


第25図　出土石器（2）（2/3）

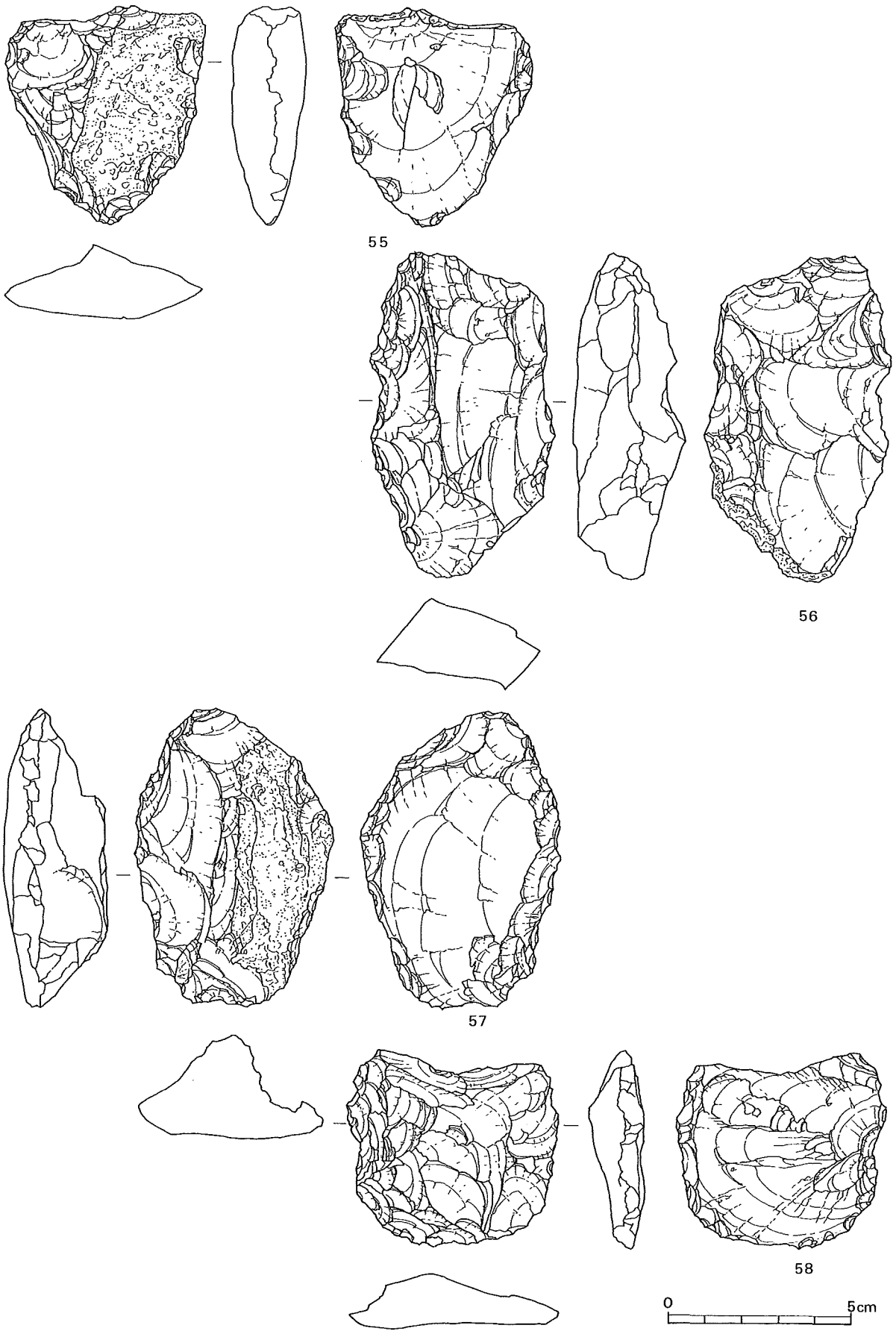


第26図　出土石器（3）（2/3）

第27図　出土石器（4）（2/3）



第28図　出土石器（5）（2/3）



第29図　出土石器（6）（2/3）

2．石器

出土している土器は，縄文時代前期後半の曽畑式土器を主体とし，その下層から主に西唐津式土器が出土している。中期初頭の船元式・春日式土器と晩期の組織痕土器が若干認められるものの，これらの土器は摩滅が著しいことから，遺跡後方の微高地より河川を介して流入したものと考えられる。したがって，本遺跡は西唐津式土器・曽畑式土器の時期を主体とする遺跡と捉えて差し障りないと思われる。石器の所属時期もこれらの範疇に属しているものかと考えられる。器種としては石鏃，石銛，コンケイブスクレイパー，スクレーパー，ピエス・エスキーユ，石斧，石核，ハンマーストーン，有溝砥石，台石，凹石，敲石，石錘，中型及び大型の石錘等が出土している。

石鏃

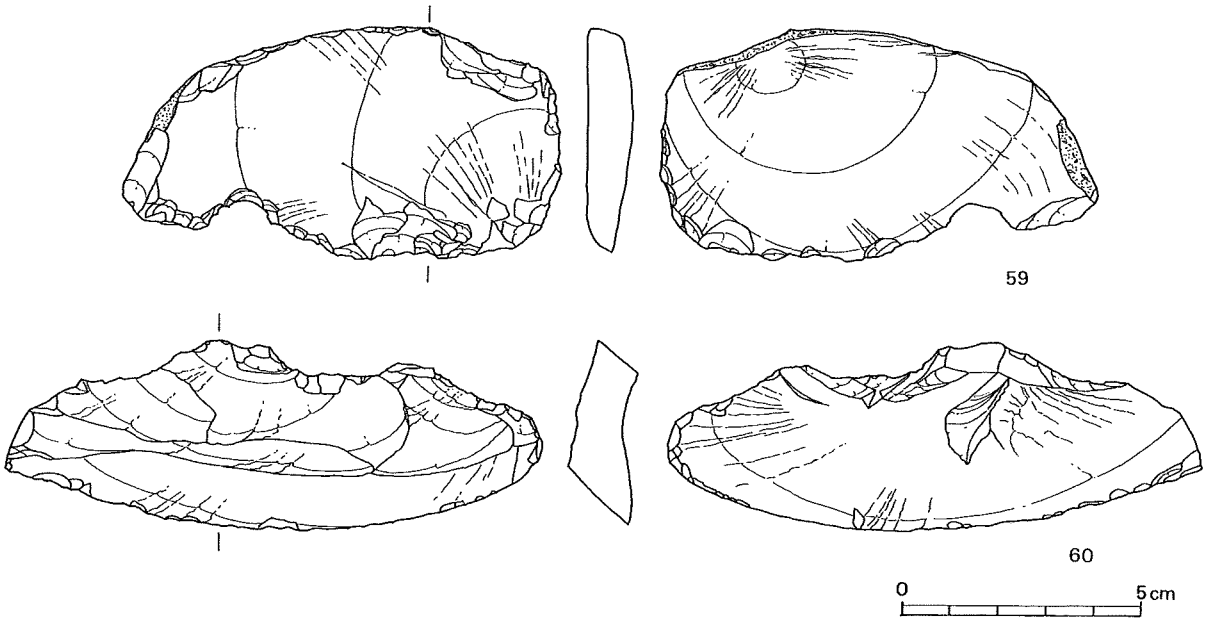
１～２１，２３は石鏃である。１～３は脚部が尖るもの，４～６は脚部の張り出しが弱いものである。７～９は脚部端が直線的なもの，10～12は脚部端が丸味を帯びるものである。14は側縁部に鋸歯加工を施すもので，やや大振りで厚みもある。中期初頭の船元式，春日式に伴うものか。16，17は脚部がない平基式のものである。22，24は未製品か。

石銛

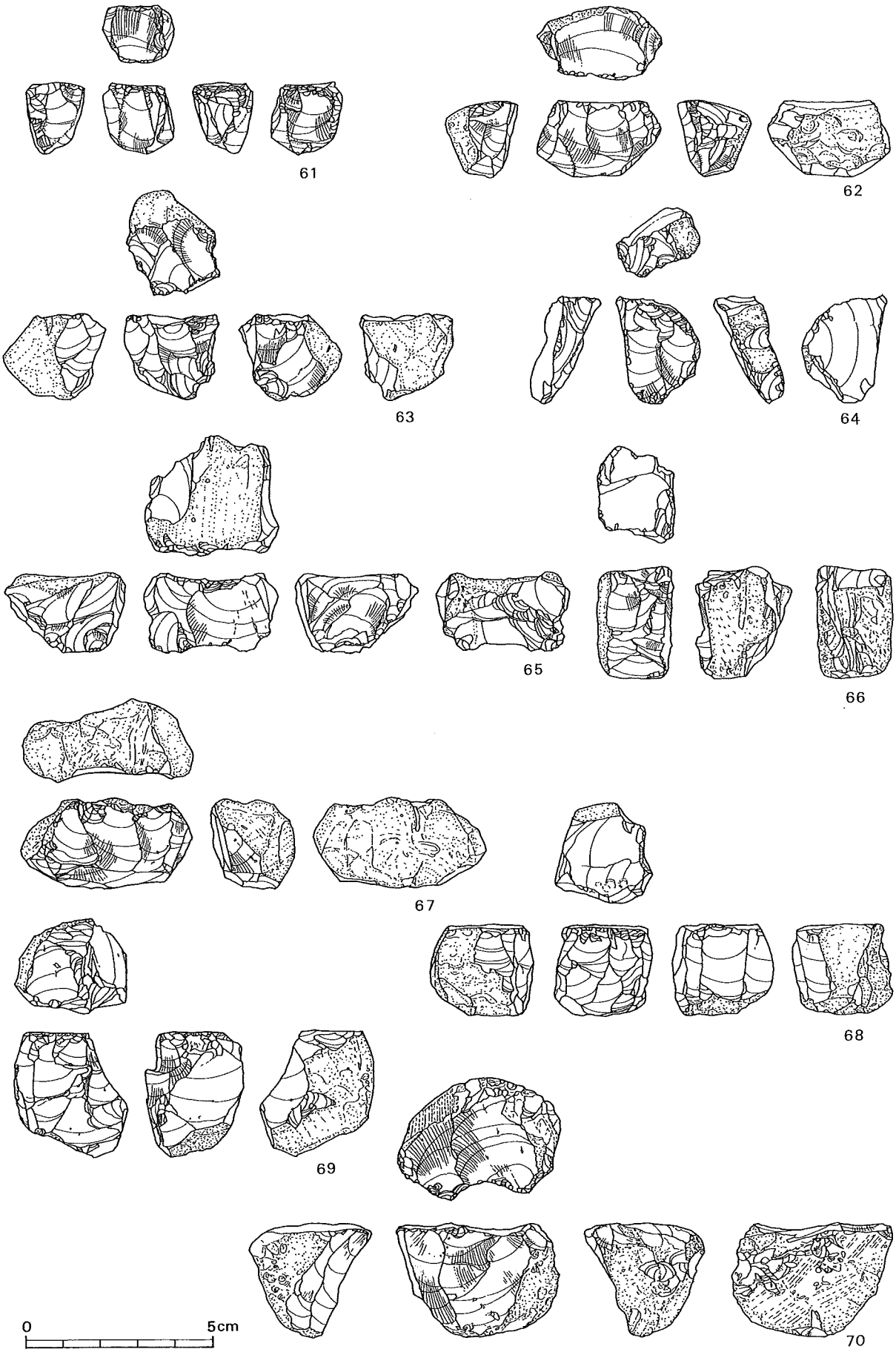
25,27,40,43は石銛である。細身で断面が三角形を呈し基部も尖らすもの，大振りの安山岩の剥片の打点側に簡単な基部加工を施すもの，両面加工を施し木の葉形に仕上げ，基部中央にも打撃を与え凹基式にしたもの等がある。この４点は特に共通の製作技術とか斉一性とかは認められない。

スクレーパー，ピエス・エスキーユ，剥片

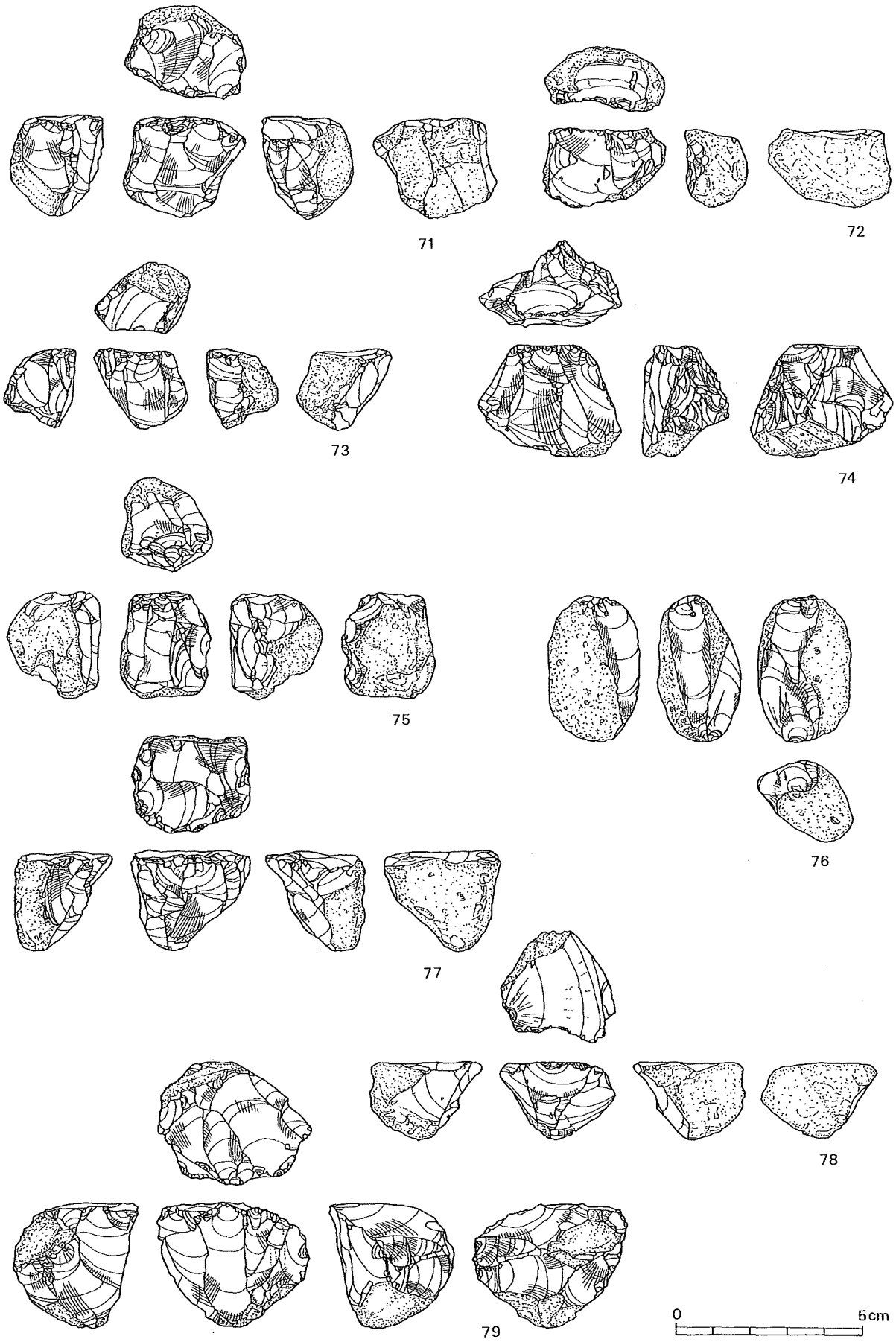
26,28,29はコンケイブスクレーパーである。安山岩製のもの28は特に内湾する円形が大きい。千里



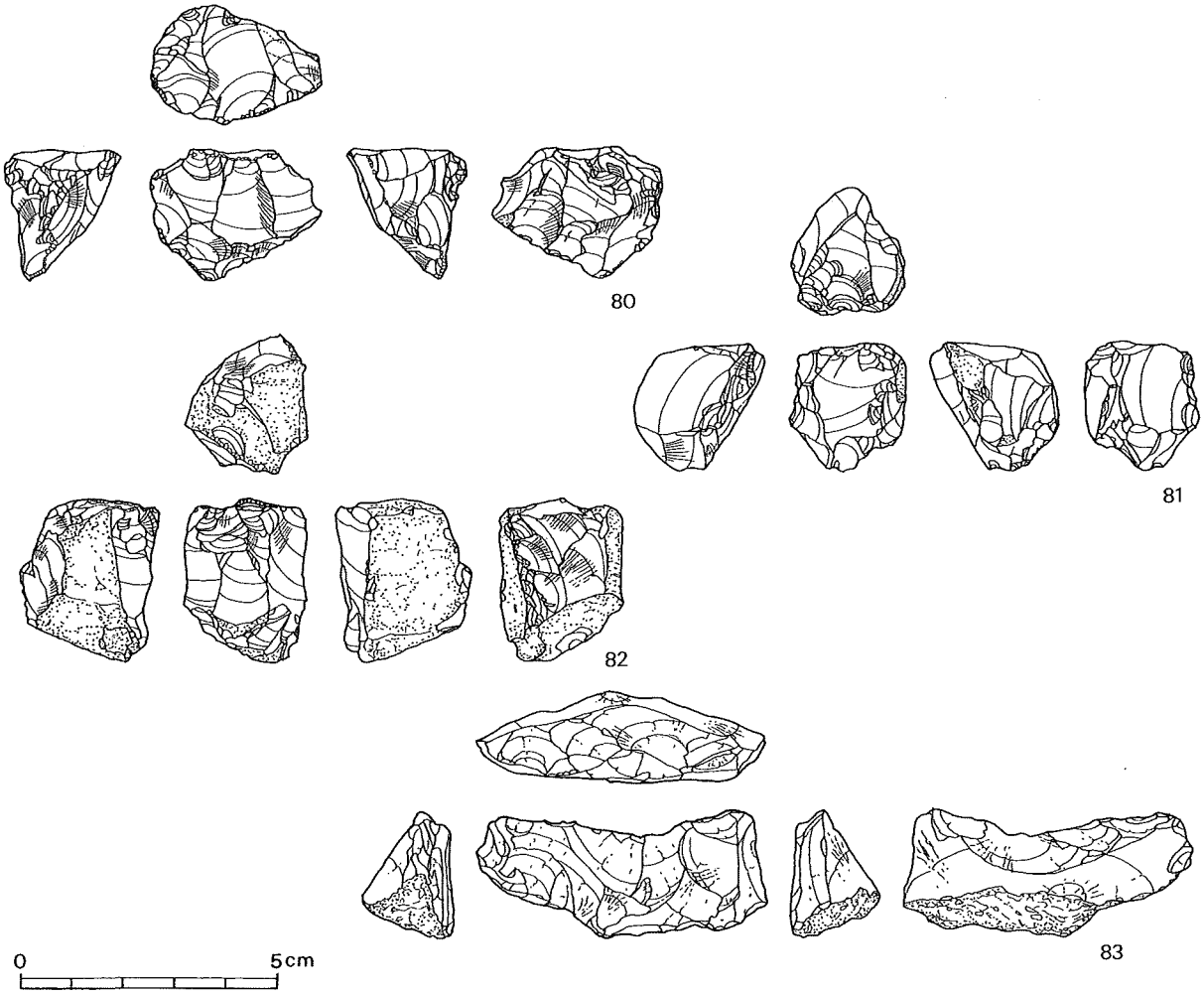
第30図　出土石器（7）（2/3）



第31図　出土石器（8）（2/3）



第32図　出土石器（9）（2/3）



第33図　出土石器（10）（2/3）

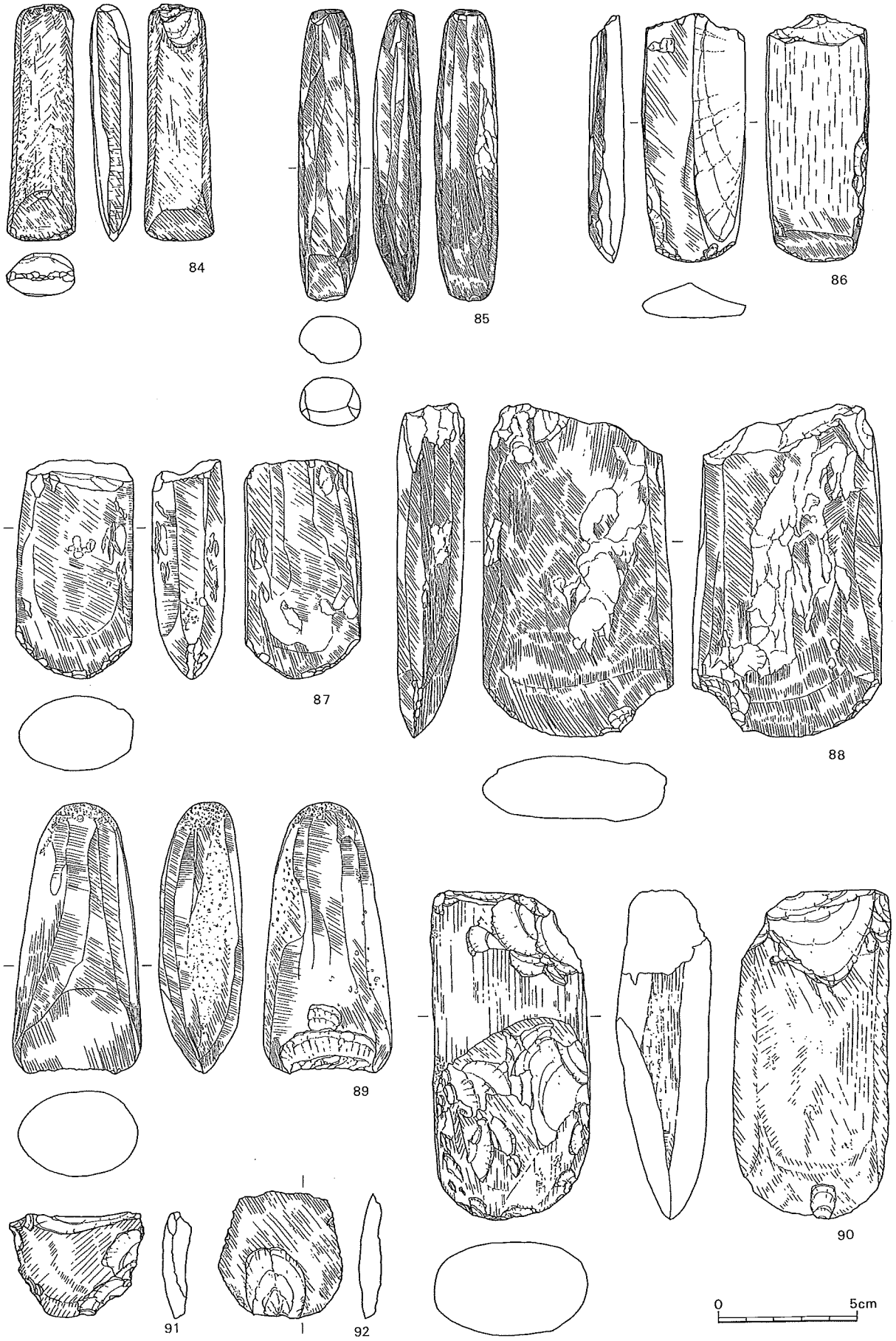
ヶ浜遺跡でも同様なものが認められたので縄文時代前期後半の曽畑式期に伴うものか。33,34は比較的小形のスクレーパーである。30～32，35～39は剥片であるが，使用痕をもつものもある。41～58はいづれも安山岩製のスクレーパーである。41,49は突起部をもつスクレーパーである。あまり厚みがないもの42,45,505158と厚みがあるもの46～48，52，56，57がある。厚みがあるものは掻器的な使用法が考えられる。59,60は横長剥片素材のスクレーパーである。44はピエス・エスキーユとしては大型の部類に属するものである。獣骨の頸骨を砕いて中の髄を取り出して食べたようなものが認められ，機能的にそういったことに使用したものではないかとの推察ももった。また，54のスクレーパーは基部を入念に作り出したもので木製のソケットに装着して使用したものか。

石核

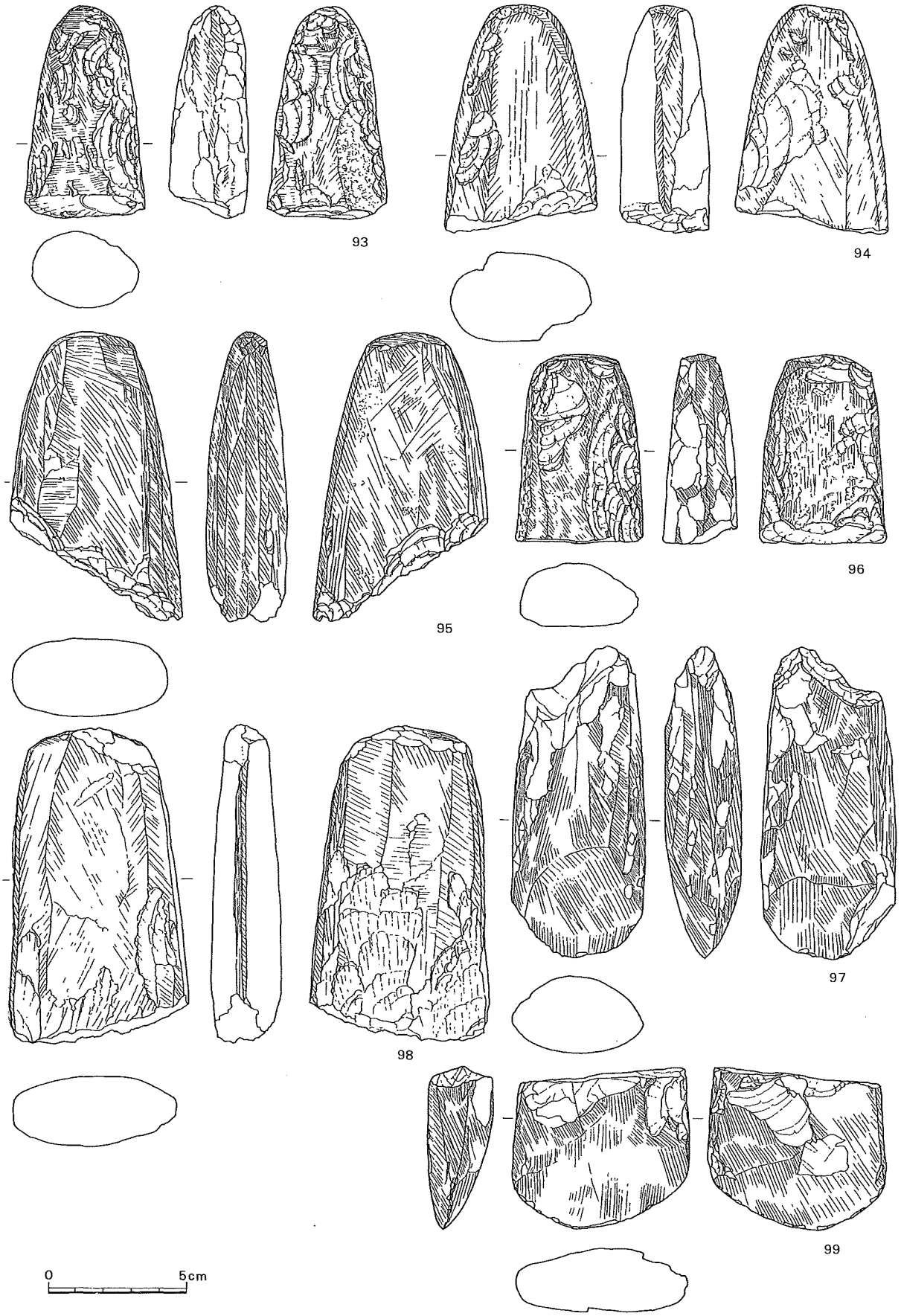
61～83は石核である。比較的小さいものから大きいものまであるが，全体的には小振りなものが多い。76の様に小さな円礫の原石に上下から打撃を与えたもの，横長剥片を剥取したもの等がある。

磨製石斧

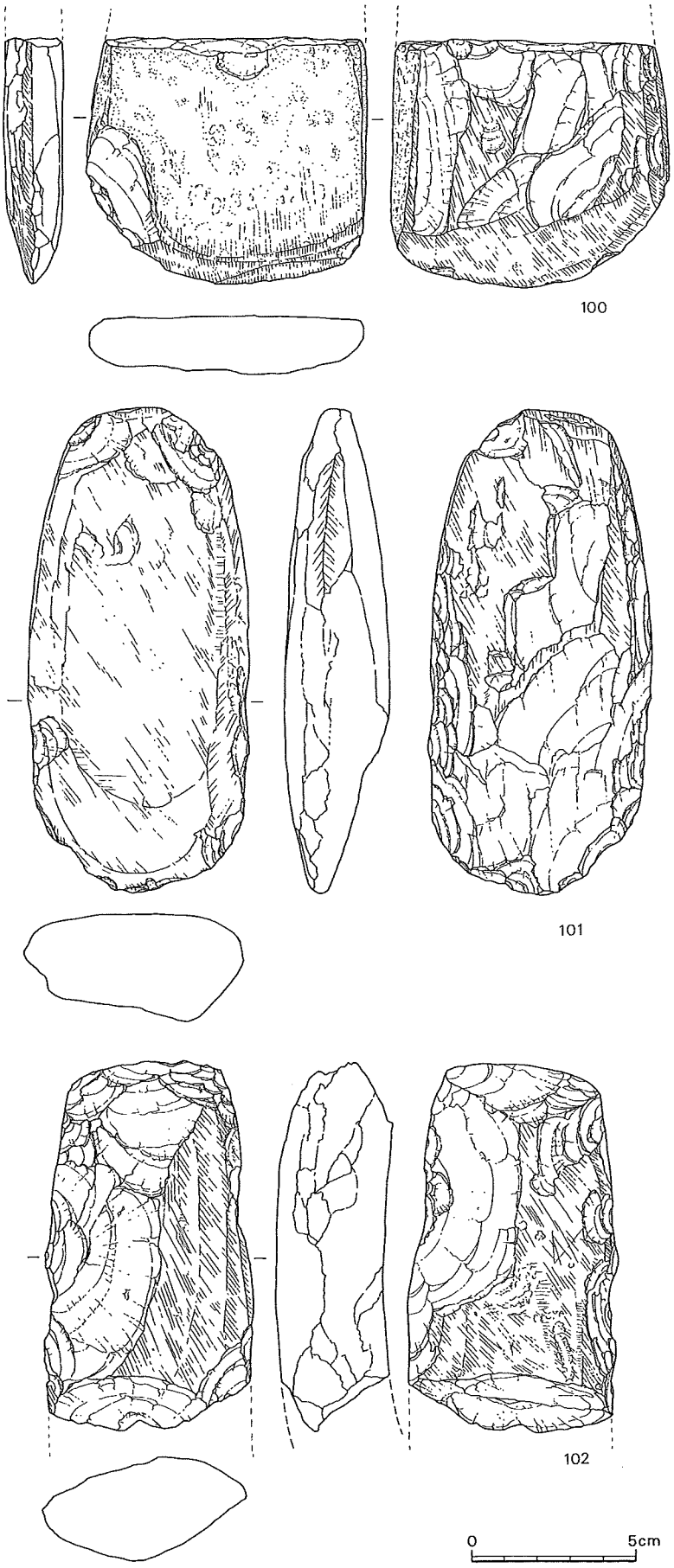
84～102，104は磨製石斧である。石ノミ状のもの84,85や，蛇紋岩を素材とし，大きさに比し薄く



第34図　出土石器（11）（1/2）



第35図　出土石器（12）（1/2）



第36図　出土石器（13）（1/2）

曽畑式に伴うもの88等があるが，刃部に注目してみると片刃状に仕上げたもの85，86，90等は注目に値する。特に90は極端に片側の厚みを取っており，これまでの県内の出土例では知見にない。また，102の磨製石斧は刃部が欠損しているが，側面から見てみると湾曲しており通常の磨製石斧の機能からは考えられないような作り方をしているものもある。103は打製石斧である。縄文時代晩期に伴うものか。また，91,92のように磨製石斧の刃部片が認められ，基部のみのものや，刃部の破損が認められるものがあるので，この場所で磨製石斧を使用して破損したことが考えられる。

ハンマーストーン，石錘，敲石，有溝砥石，台石，凹石

105はハンマーストーンである。上下両端に敲打痕をもっている。106，111は石錘である。106は小さい。107は敲石である。上下両端に敲き痕がある。108,109は砂岩製の有溝砥石である。108は一条，109は五条の有溝

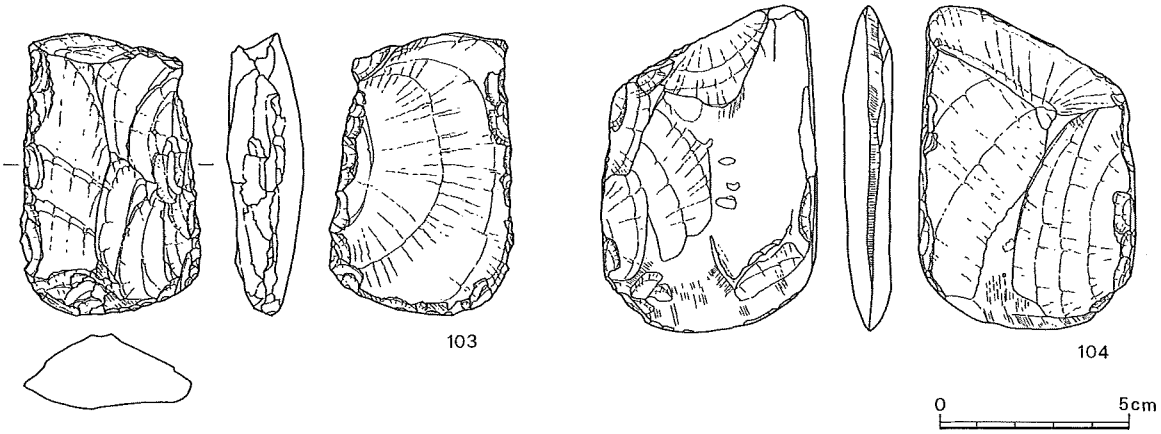
が認められる。109は表裏両面がゆるく窪んでいる。110は敲打痕をもつすり石である。112は台石，113は凹石である。

大型石錘

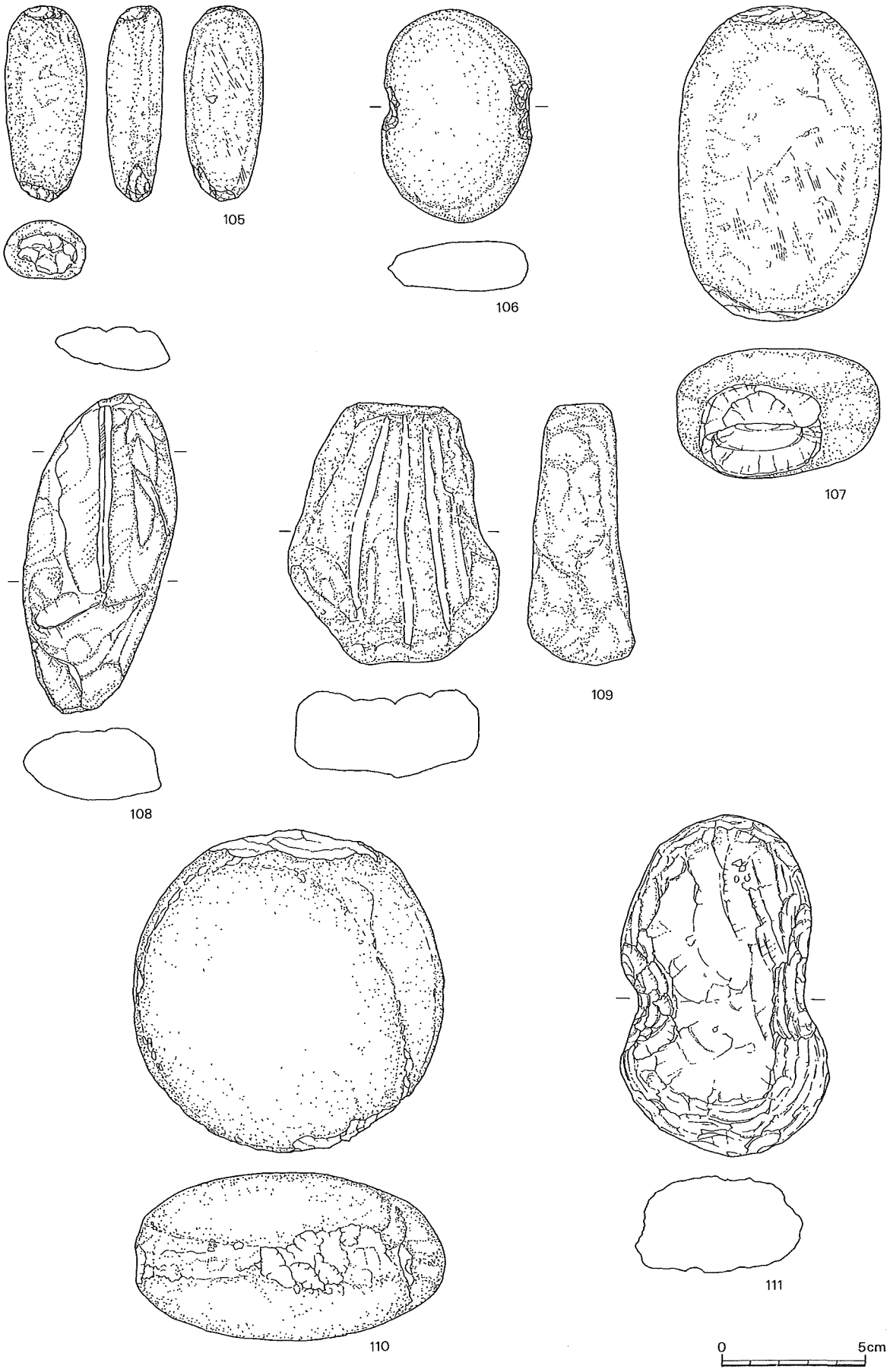
114～127は大型石錘である。楕円形のもの114～117や，114～117に比しやや短軸に比べて長軸が長いもの120,123，長軸が長く図上の上下両端がアンバランスなもの118,119,122があり，三日月形のもの121や，片側縁が直線的なもの124,125等がある。他に特に大きく不整形のもの126や，片側縁のみ加工を施すものもある。

3．貝輪・垂飾品等

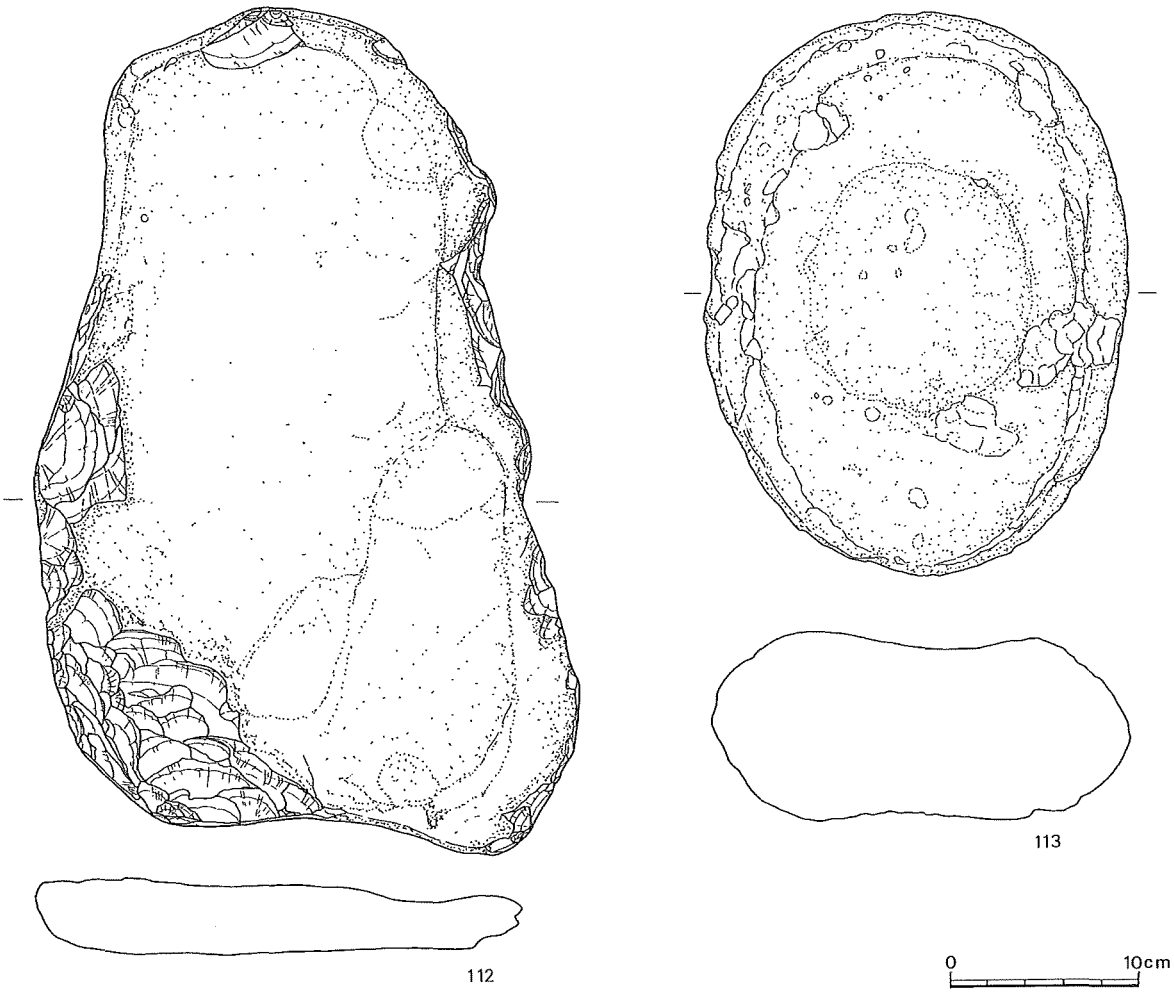
大小の2個のサルボウ製貝輪が出土している。1は小さい方のもので図上で縦軸長66mm，横軸長85mm。内径は縦軸長30mm，横軸長47mmである。断面による高さは24mmである。図の上部，蝶番の方が欠けている。1～3ともE・F－2区Ⅳb層からの出土である。2は比較的大きいもので，縦軸長87mm横軸長114mm，内径の縦軸長50mm，横軸長58mmである。高さは38mmを測る。外面を磨いて，1で認められる貝殻表面の溝がほとんど無くなっている。内面も部分的に磨きを施し，外縁部下端を部分的に打ち欠いているのは，腕に装着したときに外縁部のギザギザが腕にあたって痛くないようにとの配慮であろうか。完形品だが，貝輪の身の部分が縄文時代後期のものなどに比べて分厚く，これが前期曽畑式期の特徴であろう。3は径3mmの穿孔を施した垂飾品である。石材名は特定できないが滑石に似ている。縦軸長36mm，横軸長21mm，厚さ6mmである。他に図示しなかったが図版10の8の貝輪と，同24，鯨骨製のアワビおこしが出土している。



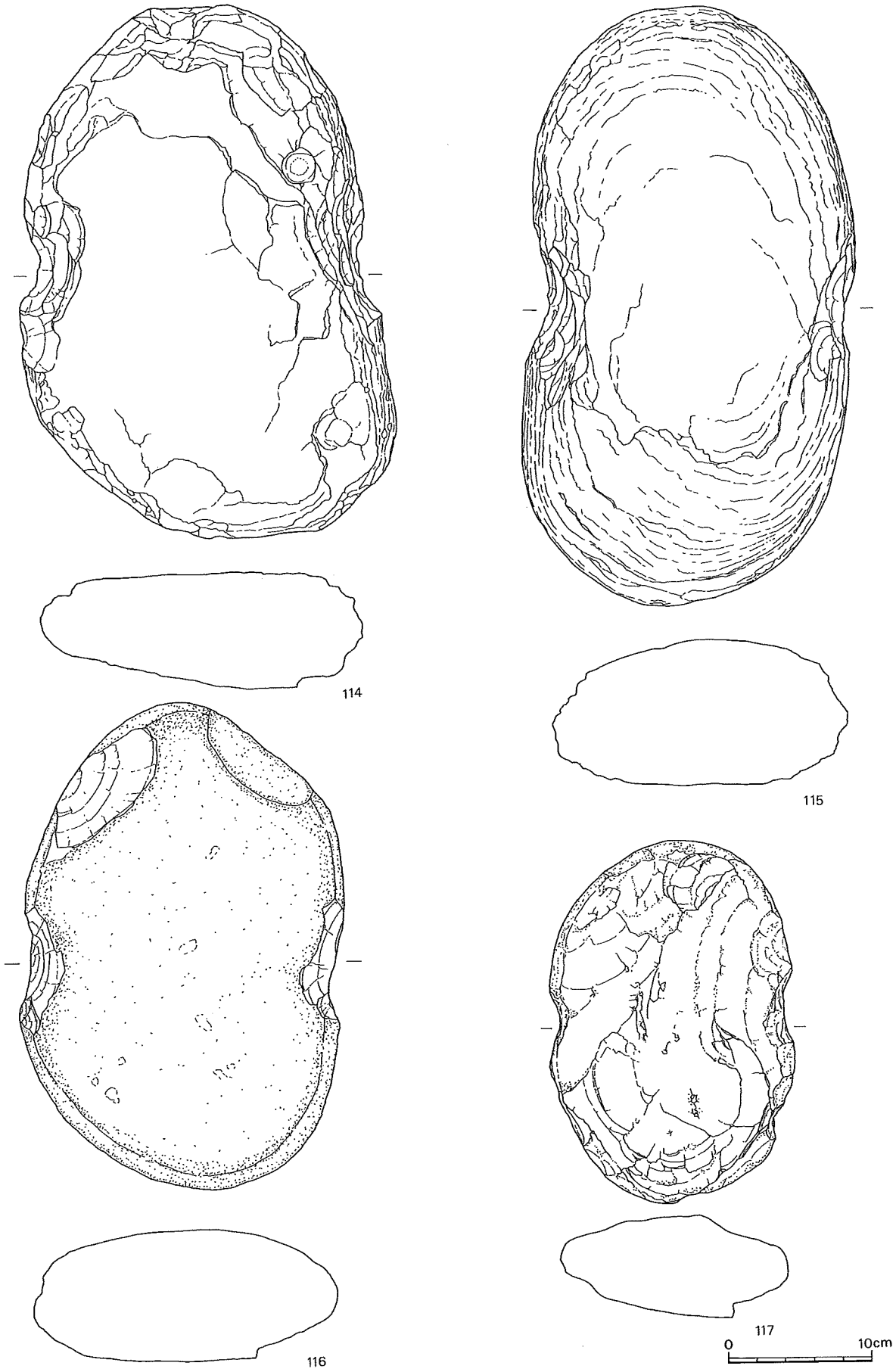
第37図　出土石器（14）（1/2）



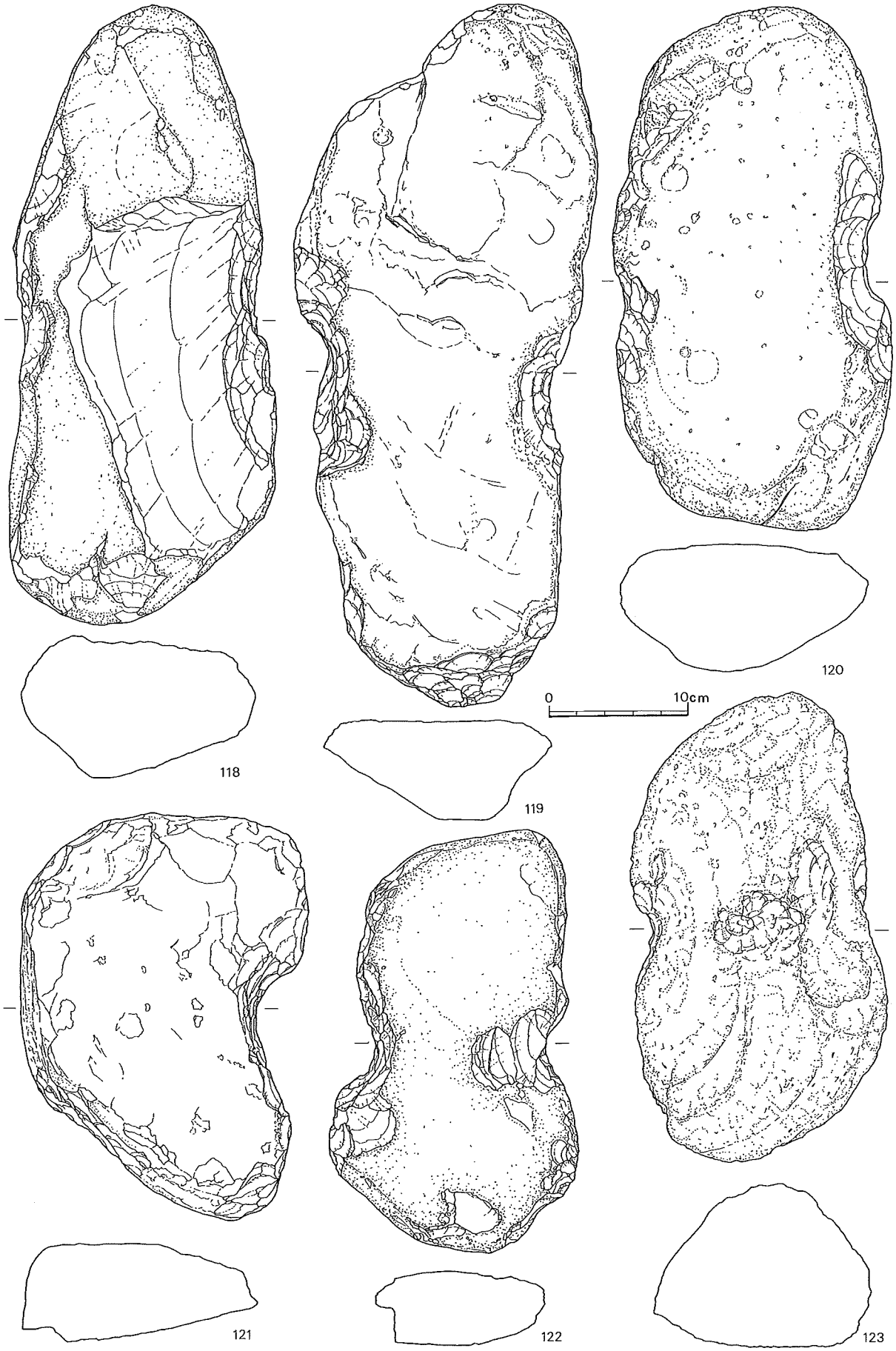
第38図　出土石器（15）（1/2）



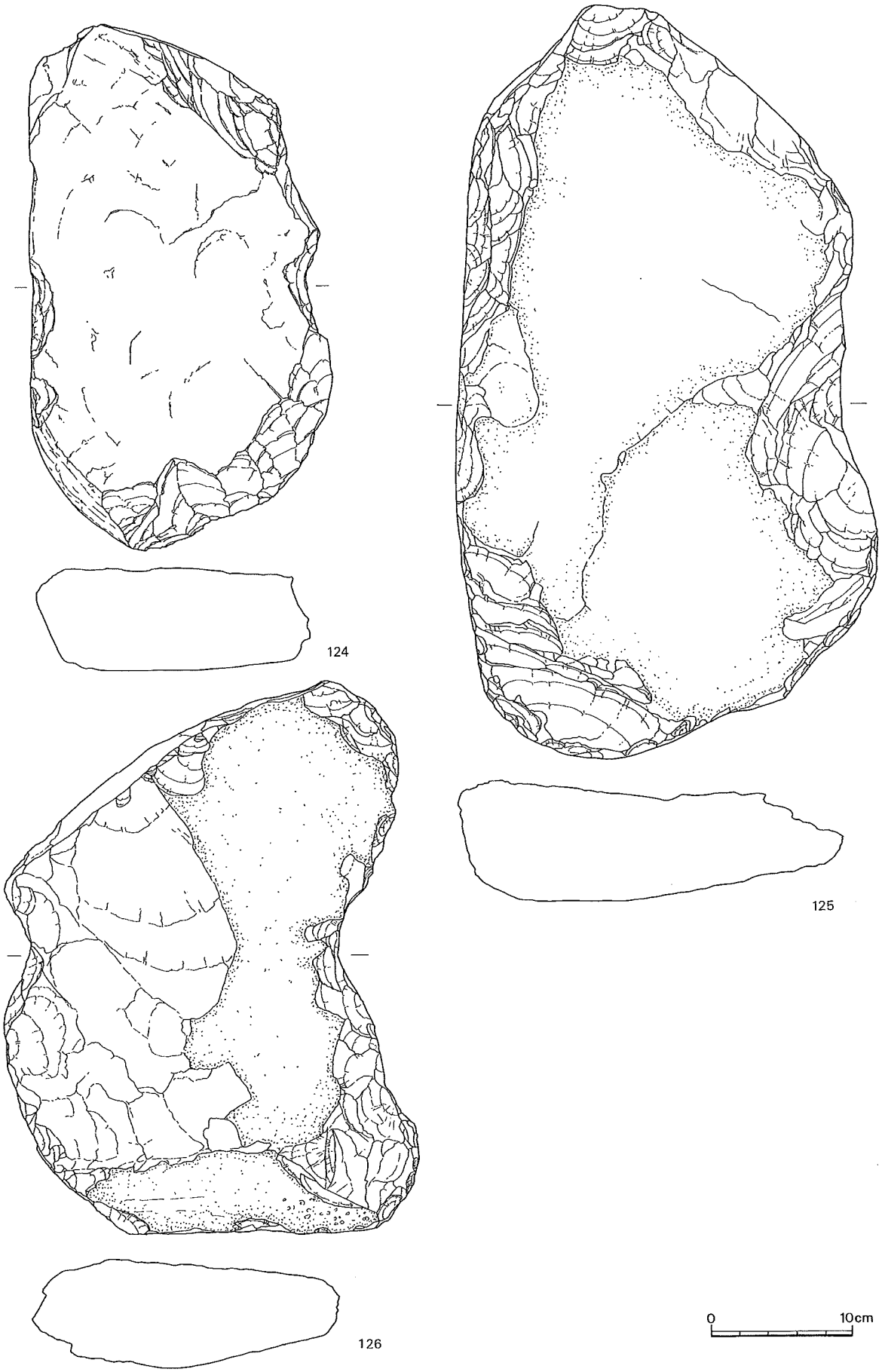
第39図　出土石器（16）（1/4）



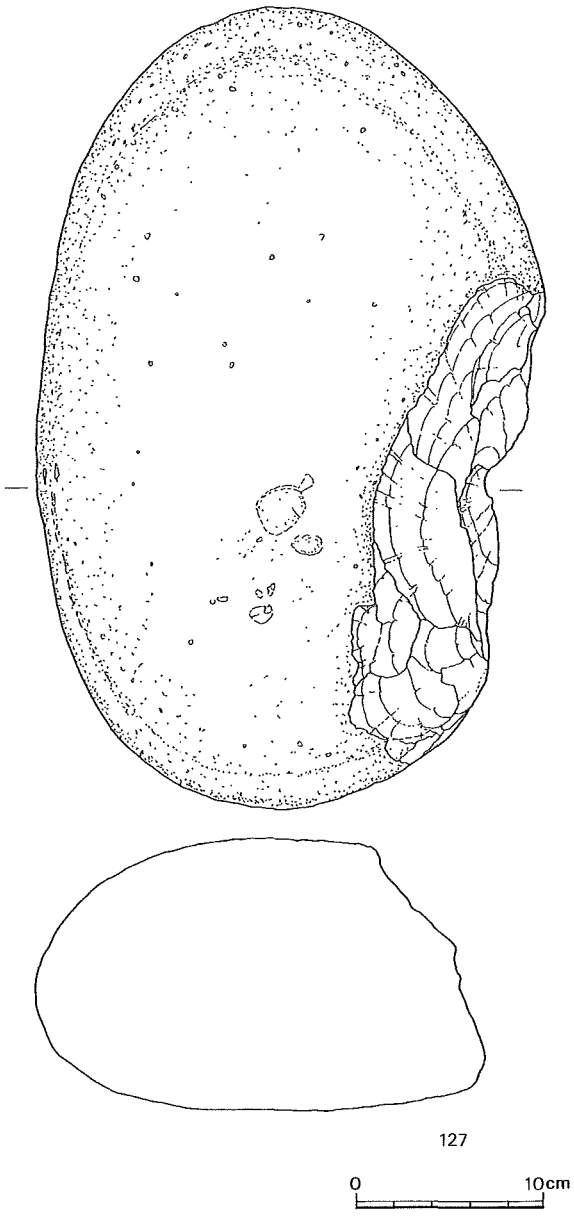
第40図　出土石器（17）（1/4）



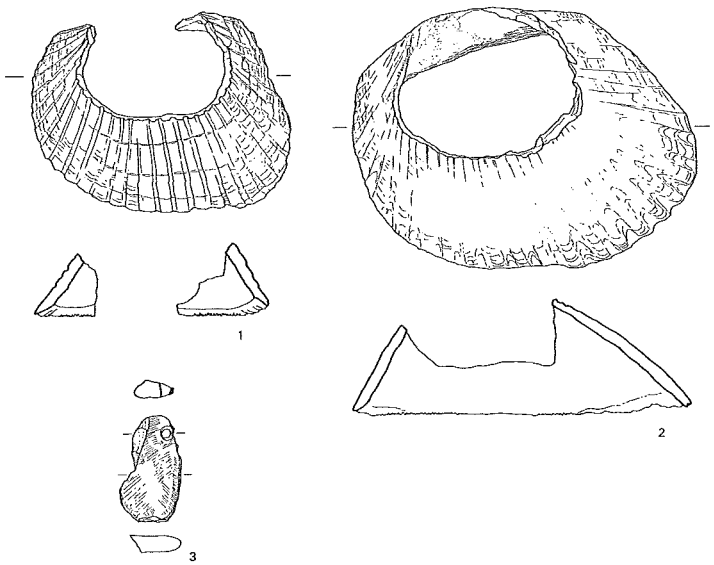
第41図　出土石器（18）（1/4）



第42図　出土石器（19）（1/4）



第43図　出土石器（20）（1/4）



第44図　出土貝輪・垂飾品（2/3）

第６表　石器計測表（１）

遺物番号	出土区	層　位	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
1	G・H−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.1	完形
2	G−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.3	0.7	脚部欠
3	H−1	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.7	先端部欠
4	H−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.7	先端部欠
5	E・F−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.5	1.3	先端部欠
6	E・F−2	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.4	0.8	未製品
7	H−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.5	先端部欠
8	E・F−2	Ⅳb	石鏃	安山岩	2.0	1.8	0.3	0.9	完形
9	G・H−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.8	1.8	0.4	0.8	完形
10	E・F−2	Ⅳ	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.4	0.9	完形
11	G−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.6	0.8	完形
12	H−1	Ⅳb	石鏃	黒曜石	2.6	1.6	0.4	1.0	完形
13	G・H−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	2.3	1.4	0.6	1.3	先端部欠
14	E・F−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	2.7	2.1	0.6	2.8	脚部欠
15	G−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.6	先端部欠
16	E・F−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.5	完形
17	G−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.4	0.8	完形
18	E・F−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.3	先端部欠
19	E・F−2	Ⅳb'	石鏃	黒曜石	2.2	1.7	0.4	1.4	先端部欠
20	E・F−2	Ⅳb	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.5	完形
21	E・F−2	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.6	1.2	脚部欠
22	F−2	Ⅳb	石錐？	黒曜石	2.1	1.3	0.4	0.8	先端部欠
23	E・F−2	Ⅱ	石鏃	安山岩	2.0	1.9	0.4	1.4	先端部欠
24	E・F−2	Ⅳb	?	黒曜石	2.9	2.4	0.6	2.4	脚部欠
25	G−2	Ⅳ	石鏃	安山岩	6.5	1.8	1.2	12.2	完形
26	G−2	Ⅳb	コンケイブスクレーパー	黒曜石	4.6	2	0.7	6.9	断面三角形
27	E・F−2	Ⅳb	石銛	安山岩	6.5	3.7	1.0	21.8	未製品
28	G−2	Ⅳb	コンケイブスクレーパー	安山岩	5.4	2.7	1.0	17.7	背面加工
29	G−2	Ⅳb	コンケイブスクレーパー	黒曜石	5.4	2.3	1.0	8.1	一側縁加工
30	G−2	Ⅳb	剥片	黒曜石	3.8	2.5	0.6	6.0	一部自然面
31	E・F−2	Ⅳb'	剥片	黒曜石	2.9	2.2	0.8	3.7	中央に稜有り
32	E・F−2	Ⅳb'	剥片	黒曜石	3.8	2.2	0.6	4.8	一部自然面
33	G−2	Ⅳb	スクレーパー	安山岩	4.7	3.4	1.1	17.9	剥離は粗
34	G−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	3.4	3.6	1.4	16.5	背面自然面
35	E・F−2	Ⅳb	剥片	黒曜石	3.7	3.2	0.8	10.7	一部自然面
36	E・F−2	Ⅳb'	剥片	黒曜石	4.2	1.6	0.6	3.6	使用痕
37	E・F−2	Ⅳb	剥片	黒曜石	4.9	1.5	0.5	4.4	使用痕
38	G−2	Ⅳb	剥片	黒曜石	4.5	1.8	0.5	3.4	一部自然面
39	G−2	Ⅳb	剥片	黒曜石	4.1	2.4	0.9	8.1	一部自然面
40	E・F−2	Ⅳb	石銛	黒曜石	8.7	4.6	2.7	104.5	完形
41	E・F−2	Ⅳb'	スクレーパー	黒曜石	6.2	3.8	1.1	26.4	半欠
42	E・F−2	Ⅱ	スクレーパー	黒曜石	5.4	4.5	2.4	48.9	四方から剥離
43	G・H−2	Ⅳb	石銛	黒曜石	7.1	4.8	2.0	48.9	基部欠
44	H−2	Ⅳb	ピエスエスキーユ	黒曜石	6.9	3.5	2.6	72.9	断面長方形
45	E・F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	7.0	4.6	0.9	46.2	未製品
46	C−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	10.4	4.4	2.7	123.4	剥離は粗
47	G−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	9.7	4.1	2.4	102.0	一部自然面
48	E・F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	9.6	4.1	2.7	95.6	急角度の加工
49	E・F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	9.6	4.1	1.9	90.2	一部自然面
50	E・F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	4.3	6.0	1.3	33.4	上部自然面
51	E・F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	8.8	5.7	2.6	120.7	断面五角形
52	G・H−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	8.0	4.6	2.4	84.1	一部自然面
53	F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	4.3	3.6	1.6	20.9	一部自然面
54	G−1	Ⅳb'	スクレーパー	黒曜石	10.8	7.7	2.0	174.3	刃部加工が粗
55	E・F−2	Ⅱ	スクレーパー	黒曜石	5.9	5.3	2.0	59.8	一部自然面
56	G・H−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	8.7	5.0	2.4	112.8	一部自然面
57	G−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	8.0	5.4	2.8	98.5	一部自然面
58	E・F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	5.3	5.7	1.5	42.5	剥離は密
59	F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	4.8	9.2	1.0	49.2	一部にノッチ
60	E・F−2	Ⅳb	スクレーパー	黒曜石	3.9	11.2	1.5	53.2	使用痕，横長剥片
61	H−2	Ⅳb	石核	黒曜石	1.9	1.9	1.6	6.2	上部から剥離
62	E・F−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.0	3.3	2.0	13.9	自然面有り
63	H−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.3	2.5	2.8	14.0	自然面有り
64	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.9	2.2	1.8	7.3	自然面有り

第７表　石器計測表（２）

遺物番号	出土区	層　位	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
65	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.1	3.5	3.2	21.4	自然面有り
66	E・F−2	Ⅳb	石核	黒曜石	3.0	2.1	2.6	16.9	自然面有り
67	H−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.4	4.5	2.2	23.9	自然面有り
68	H−2	Ⅳb'	石核	黒曜石	2.5	2.6	2.7	22.1	自然面有り
69	F−2	Ⅳb	石核	黒曜石	3.3	3.0	2.5	26.0	自然面有り
70	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	3.0	4.3	3.2	37.5	自然面有り
71	H−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.7	3.3	2.5	21.2	自然面有り
72	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.1	3.3	1.7	11.3	自然面有り
73	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.2	2.5	1.9	8.4	自然面有り
74	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	3.0	3.8	2.3	20.2	自然面有り
75	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.9	2.4	2.5	17.4	自然面有り
76	表採	表採	石核	黒曜石	3.9	2.4	2.2	21.7	自然面有り
77	H−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.7	3.1	2.6	19.8	自然面有り
78	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.0	3.1	2.9	14.1	自然面有り
79	H−1	Ⅳb'	石核	黒曜石	2.3	4.1	3.3	36.9	自然面有り
80	H−2	Ⅳb'	石核	黒曜石	2.6	3.3	2.3	14.0	自然面有り
81	G−2	Ⅳb	石核	黒曜石	2.5	2.2	2.5	11.6	自然面有り
82	E・F−2	Ⅱ	石核	黒曜石	3.2	2.4	2.7	21.0	自然面有り
83	表採	表採	石核	安山岩	2.5	5.6	1.7	20.1	自然面有り
84	G・H−2	Ⅳb'	磨製石斧	頁岩	8.5	2.5	1.6	51.2	完形
85	G・H−2	Ⅳb	磨製石斧	安山岩	10.5	2.2	1.7	63.5	完形
86	D−1	Ⅱ	磨製石斧	安山岩	8.9	3.7	1.2	60.9	基部欠
87	E−2	Ⅱ	磨製石斧	頁岩	7.9	4.2	2.7	137.6	基部欠
88	E・F−2	Ⅳb	磨製石斧	蛇紋岩	11.9	6.9	2.4	302.8	基部欠
89	F−2	Ⅳb	磨製石斧	安山岩	9.7	4.6	3.0	193.6	完形
90	E・F−2	Ⅳb	磨製石斧	安山岩	11.8	5.7	3.3	327.4	基部欠
91	E・F−2	Ⅱ	磨製石斧	安山岩	3.7	4.8	1.0	19.4	刃部欠
92	C−1	Ⅲ	磨製石斧	安山岩	4.6	4.4	0.8	22.4	刃部欠
93	E・F−2	Ⅳb	磨製石斧	安山岩	7.7	4.3	2.8	122.4	端部欠
94	G−2	Ⅳb	磨製石斧	花崗岩	8.3	5.5	3.2	218.9	端部欠
95	E・F−2	Ⅱ	磨製石斧	蛇紋岩	10.5	6.2	2.9	228.5	端部欠
96	E・F−2	Ⅳb	磨製石斧	玄武岩	6.9	4.7	2.3	121.5	端部欠
97	E・F−1・2	Ⅳb	磨製石斧	安山岩	11.3	4.9	2.8	200.1	基部・刃部欠
98	E・F−2	Ⅱ	磨製石斧	安山岩	11.5	6.5	2.5	264.2	基部・端部欠
99	E・F−2	Ⅱ	磨製石斧	安山岩	5.8	6.4	2.3	119.4	基部欠
100	E−2	Ⅳb	磨製石斧	玄武岩	7.6	8.5	1.8	188.1	基部・刃部欠
101	E・F−2	Ⅱ	磨製石斧	蛇紋岩	14.8	6.8	3.3	410	基部・刃部欠
102	E・F−2	Ⅱ	磨製石斧	安山岩	11.3	6.4	3.2	350.1	端部欠
103	C−1	Ⅲ	磨製石斧	安山岩	7.5	4.8	2.0	82.1	基部欠
104	B−1	Ⅲ	磨製石斧	頁岩	8.6	5.7	1.3	740.0	基部・刃部欠
105	E・F−2	Ⅳb	ハンマーストーン	安山岩	6.8	2.8	2.0	54.6	両設打面
106	E・F−2	Ⅳb	石錘	蛇紋岩	7.4	5.3	1.7	103.3	扁平
107	E・F−2	Ⅳb	敲石	安山岩	11	7.1	4.5	580.0	頭端に打痕
108	G−2	Ⅳb	有溝砥石	安山岩	11.2	5.4	2.5	141.0	表裏に三条
109	H−2	Ⅳb'	有溝砥石	砂岩	9.1	7.3	3.0	271.3	表に五条
110	E・F−1・2	Ⅳb	すり石	安山岩	11.2	10.8	5.8	920	敲石としても使用
111	G・H−2	Ⅳb	石錘	安山岩	12	7.3	3.3	376.3	短軸に抉入
112	G・H−2	Ⅳb	台石	安山岩	44.9	28.9	4.1	9000	扁平
113	F−1・2	Ⅳb	凹石	安山岩	29.9	22.1	10	9000	両面使用
114	C−1	Ⅲ	大型石錘	安山岩	37.2	22.5	8.2	11000	短軸に抉入
115	表採	表採	大型石錘	安山岩	42.0	20.8	10.2	15000	短軸に抉入
116	E・F−1・2	Ⅳb	大型石錘	安山岩	34.1	21.2	9.2	11000	短軸に抉入
117	D−1	Ⅱ	大型石錘	安山岩	25.3	16.0	7.1	4000	短軸に抉入
118	G・H−2	Ⅳb	大型石錘	安山岩	44.5	16.6	10.1	14000	短軸に抉入
119	H−2	Ⅳ	大型石錘	安山岩	50.4	16.1	7.0	10000	短軸に抉入
120	H−2	Ⅱ	大型石錘	安山岩	37.6	17.7	9.2	11000	短軸に抉入
121	E−2	Ⅳb	大型石錘	安山岩	29.0	16.8	7.1	7000	三日月型
122	G・H−2	Ⅳb	大型石錘	安山岩	30.2	12.1	5.3	4000	短軸に抉入
123	G−2	Ⅳ	大型石錘	安山岩	33.7	15.4	11.8	9000	中央に敲打
124	G・H−2	Ⅳb	大型石錘	安山岩	37.1	19.2	7.3	10000	短軸に抉入
125	G・H−2	Ⅳc	大型石錘	安山岩	53.2	27.4	8.5	17000	扁平
126	G・H−2	Ⅳb	大型石錘	安山岩	39.1	21.6	7.7	12000	短軸に抉入
127	H−1・2	Ⅳ	大型石錘	安山岩	42.6	23.8	14.5	24000	卵型楕円礫

第８表　Ｇ・Ｈ－１・２区　貝類分類表

		ミミガイ科		ツタノハガイ科	ツタノハガイ科						リュウテンサザエ科	サラサバイ科	ムカデガイ科	ウミニナ科	アクキガイ科	イトマキボラ科	フネガイ科			イタヤガイ科	ウミギクガイ科	ナミマガシワガイ科			ザルガイ科	マルスダレガイ科		バカガイ科	
日付	層位	マダカアワビ	メカイアワビ	マツバガイ	コシタカガンガラ	クボガイ	クマノコガイ	オオコシダカガンガラ	ギンタカハマガイ	イシダタミ	サザエ	スガイ	オオヘビガイ	ウミニナ	レイシ	ナガニシ	ハイガイ	サルボウ	イガイ	ヒオウギ	ウミギクガイ	ナミマガシワガイ	イワガキ	マガキ	ザルガイ	ウラカガミガイ	オニアサリ	ミルクイ	サンゴ
7/8	Ⅳa	○	○		○	○	○	○			○	○	○		○							○		○			○	○	
7/9	Ⅳa	○	○			○	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○		○			○			○		○
7/10	Ⅳa	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○		○	○					○
7/10	Ⅳb'	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○		○			○
7/11	Ⅳa	○	○			○	○		○	○	○	○	○		○			○	○					○					
7/11	Ⅳb'	○	○		○	○	○				○	○	○	○	○				○					○					
7/11	Ⅳb'	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○						○		○			○			○		
7/12	Ⅳb'	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○		○	○		○			○		
7/22	Ⅳb	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○			○	○				
7/23	Ⅳb	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○				○	○	○			○			○	○	
7/24	Ⅳb	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○		○		○	○	○	○				○	○	○	○	○	○
7/25	Ⅳb	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○				○		○	○	○	
8/5	Ⅳb	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○			○		○		○	○			○		
8/6	Ⅳb	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○		○	○			○	○	
8/7	Ⅳc	○	○	○			○	○			○	○	○		○				○		○			○					
8/8	Ⅳc	○	○	○			○	○	○		○	○	○		○			○	○		○			○				○	

第Ⅳ章　総括

第１節　第Ⅲ群土器（西唐津式土器）について

今回の供養川遺跡の調査では，本報告において，第Ⅲ群土器に分類し，「西唐津式土器」とした「轟Ｂ式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群」がまとまって出土した。長崎県内においてこの土器群は，深堀遺跡（長崎市）・脇岬遺跡（野母崎町）・百花台遺跡（国見町）・下本山岩陰（佐世保市）・野首遺跡（小値賀町）などから，まとまった数の出土が確認されている。供養川遺跡が位置する平戸島においては，千里ヶ浜遺跡（福田2002）より出土が確認されており，供養川遺跡で２例目の出土遺跡となる。第Ⅲ群土器の名称の経緯については前章で触れているが，もう一度，名称の経緯についての若干の整理を行い，また，県内における現状および今後の課題について述べることにする。

（１）第Ⅲ群土器の名称について（研究史）

本報告において第Ⅲ群土器とした土器群の研究史ついては水ノ江和同の論攷（水ノ江1988）があり，ここでは割愛したい。以下，各名称および，その概要について触れていく。

西唐津式土器

「西唐津式土器」という名称は，江坂輝彌が西唐津海底遺跡より出土した土器のなかで「隆帯文十沈線文の土器」および「口縁部にのみ刺突文を持つ土器」を曽畑式土器に先行する一群としたことに由来する(江坂1965)。これは，轟Ｂ式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群の初出であったが，この土器群についての型式設定および名称の提示はされなかった。江坂が「曽畑式土器に先行する一群」とした土器群に「西唐津式土器」の名称を与えたのは吉崎昌一・Albert Moheである（吉崎・Mohe1973)。両氏は，姫神社遺跡（松浦市）から出土した，「轟Ｂ式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群」を当初，「プロト曽畑式土器」と呼んでいたが，西唐津海底遺跡より出土した土器の大部分が，両氏のいう「プロト曽畑式土器」であると判明したため，「西唐津式土器」への改称を提唱した。

プロト曽畑

「プロト曽畑」という名称は菜畑遺跡の調査・報告者である田島龍太が，曽畑式土器包含層（第14層）の下位層（第15・16層）より出土した沈線文系土器群をまとめて「プロト曽畑」と仮称したことに始まる（田島1982)。「プロト曽畑」は仮称ながら，理解が容易なため，現在のところ最も浸透した名称となっている。

野口・阿多タイプ

「野口・阿多タイプ」という名称は，中村愿が「轟Ｂ式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群」のなかで「みみず張れ突帯文の土器が沈線文へ置き変えられて行く課程」を示すものとして，野口遺跡および阿多遺跡より出土した土器を仮称したものである。そして，中村は「みみず張れ突帯文の終末期（四箇J-101地区）→重弧沈線文の出現と盛行期（野口遺跡）→点刻文・羽状沈線文の出現期（阿多貝塚)」という三段階の変遷を示した（中村1982)。

中間土器群・深堀式・野口式

「中間土器群」という名称は，水ノ江和同が自身の論攷において，轟式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群の総称として用いたものである。そして水ノ江は，深堀遺跡において渡邊康行が，轟Ｂ式土器と曽畑式土器をつなぐ土器群として抽出した「深堀遺跡第Ⅲ群土器」（渡邊1984）の中から，野口遺跡出土の第Ⅳ群土器（富永1981）を「野口式」，「野口式」を差し引いた土器群を「深堀式」と

設定した（水ノ江1988）。

以上，「轟B式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群」の名称について概観してみると，「西唐津式土器」・「プロト曽畑」・「中間土器群」は轟B式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群の総称であり，「野口・阿多タイプ」・「野口式」・「深堀式」はそのなかに設定された一型式であるといえる。現在のところ，「轟B式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群」の名称および型式設定について一定していない。本報告では第Ⅲ群土器の総称を「西唐津式土器」とし，a類には特に名称を与えず，b類を「野口・阿多タイプ」とした。また，a類およびb類の細分は行わなかった。「轟B式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群」の名称および型式設定については今後の大きな課題といえるであろう。

（2）長崎県内における西唐津式土器の研究史

長崎県内における西唐津式土器の研究として，深堀遺跡において「轟式土器と曽畑式土器の中間に位置する土器群」である第Ⅲ群土器の抽出を行った，渡邊康行の成果があげられる（渡邊1984）。渡邊は轟B式土器を第1種（狭義の轟B式）・第2種（文様変化型）・第3種（技法変化型）に分類し，第1種（隆帯文）→第2種（隆帯状の刻み目）→第3種（刺突文・押引文・沈線文）という時間差と，東南九州（第2種型）・西北九州（第3種）という地域差を設定した。その上で渡邊は，深堀遺跡第Ⅲ群土器が第2種と第3種の接触・交流により成立したとの見方を示し，「轟B式土器→深堀遺跡第Ⅲ群土器→曽畑式土器」の変遷を想定した。深堀遺跡第Ⅲ群土器はのちに，水ノ江がいう，「深堀式」・「野口式」の名称に変化していく（水ノ江1988）。両氏の研究以後，県内において西唐津式土器のまとまった研究は行われていない。今後の資料増加とともに，研究の進展を期待したい。

（3）供養川遺跡出土第Ⅲ群土器について

第Ⅲ群土器はⅣb'層より出土しており，a類（轟B式土器の影響を残す一群）・b類（野口・阿多タイプ）とに分類している。これまでの研究により，a類土器とb類土器との間には時期差が存在することが知られ，特にb類に分類している「野口・阿多タイプ」は曽畑式土器の直前の型式であると考えられている（中村1982・水ノ江1988）。今回の供養川遺跡の調査において，a類土器・b類土器の間に存在する時期差が層位的に捉えられることが期待されたが，潮流が激しい礫浜という立地条件のためか，両者は混在した状況での出土であった。その一方で，G-1·2区およびH-1·2は最も集中的な遺物の出土が確認され，海側のG-2·H-2区では，層位間で遺物の混在が認めらたものの，陸地側のG-1·H-1区については土層堆積が比較的良好であった。このことは第Ⅲ群土器と第Ⅳ群土器（曽畑式土器）の先後関係が層位的に捉えられたことを意味し，また，今回の調査における成果であると考えている。平戸島において，西唐津式土器がまとまって出土したのは今回が初めてである。平戸島の縄文時代前期の様相については明らかにされていない点が多いだけに，今後の調査成果が待たれるところである。

（井立　尚）

【参考・引用文献】

田島龍太 1982「菜畑遺跡縄文時代前～中期の土器群の編年と様相」『菜畑遺跡』唐津市

＊『菜畑遺跡』以外の引用·参考文献は第Ⅲ章第5節と同様である。頁数の都合でこのような表記となったことをお詫びしたい。

第２節　供養川遺跡石器群等について

供養川遺跡の本調査に入るに当たっては，以下の２点が念頭にあった。

①この調査対象地付近に該当すると思われる，モンタヌス『オランダ遣日使節録』（1699）の商館図の中のオランダ船後方，陸に横付けされた二艘の船と人物が小さく描かれた場所に何らかの接岸遺構等が果たして存在するのかどうか。

②平戸瀬戸を挟んだ対岸にあり，有茎石銛と鎌崎型スクレーパーを主体とするつぐめのはな遺跡の石器群との関連でどのような石器群をもつのか。

であったが，①については，今回の調査では確認できなかった。このことについては元々接岸遺構等は存在せずに和船等により簡単な設備により接岸していたことも考えられるし，接岸遺構はあったものの，その後の造船所等の建設により壊された等の可能性も考えられる。

②については，時期的にもつぐめにはな遺跡が早期末を主体とし，立地的にも現海岸線より上位の標高７ｍ程のところに位置するのに対し，供養川遺跡は前期中葉から後半にかけての遺跡であり，標高も元海岸線より下位の0.7ｍ～－0.2mまでが曽畑式土器の包含層でその下層の－0.2m～－0.35mがプロト曽畑式土器の包含層となり立地も違っている。時期と立地が違えば当然石器群も違ってくるのか，つぐめのはな遺跡の主体であった有茎石銛と鎌崎型スクレーパー，石匙等の石器群は消滅し供養川遺跡ではそれらの石器群は全くみられない。その石器文化のあり方は際だった違いをみせている(註1)。

つぐめのはな遺跡の調査者である正林護は，石器群に伴ってイルカや鯨等の海獣骨が出土したことから，それらのものを捕獲したことを想定しており（正林1986），もしそうだとすると供養川遺跡の前期中葉から後半にかけては海岸線が下がったことからイルカや鯨等の海獣の通り道が変化しその捕獲システムが成り立たなかったことも考えられる。いずれにしろ，このつぐめのはな遺跡と供養川遺跡の石器群の違いは興味深い。なお，つぐめのはな遺跡の海岸線の高さも確定されたものではない。

また，同じ時期の千里ヶ浜遺跡の石器群と比較しても千里ヶ浜遺跡で認められた縦型の石匙が本遺跡には無かったりと，恐らくは生業に由来すると考えられる違いも認められる。コンケイブスクレーパーは双方に認められるが，骨格器等の加工に使用したものであろうか。大型石錘の多さは同じである。

供養川遺跡の石器に戻ると，まず大型石錘と黒曜石製石核の多さが目につくし，磨製石斧では，石ノミ状のものや，片刃状に仕上げたもの，極端に片側の刃部の厚みを取ったもの，そして，側面から見てみると湾曲しており通常の磨製石斧の機能からは考えられないような作り方をしているものもある。鹿児島県の栫ノ原遺跡では，本遺跡出土の石ノミ状の片刃の磨製石斧と同様のものが存在している。この磨製石斧の刃部の特徴から，この栫ノ原遺跡出土の石ノミ状の片刃の磨製石斧は丸木船の制作に使ったものとの説もあるようで刳船である丸木船を刳るための機能が考えられている。ここでは結論は急がないが，その可能性も考えておきたい。

大型石錘については，丸木船の碇石説と網漁の石錘説の大きくは二つの説があるが，立平進による民俗例の提示によると，この大型の石錘に木の軸をくくりつけ，木の軸に錨状の尖った竹を組み合わせたものがあるようである。実際に本遺跡出土の大型石錘でも，断面をみると三角形のものがあり，木の軸に組み合わせることを念頭においたようなものもある。意識的に厚みをとったものは挟むこと

を考慮したものであろうか。三日月型のものもありバリエーションがあることから，特に網漁の石錘のみの機能に限定して考えなくてもいいのではないだろうか。今回の調査で丸木船を発見したわけではないので，もちろん碇石だと決まったわけではないが，これもその可能性は残しておきたい。

福田一志は千里ヶ浜遺跡の総括の中で，西北九州の曽畑式土器とプロト曽畑式土器に触れ，滑石を多量に混入することを大きな特徴とすることから，良質な滑石を算出する西彼杵半島産のものを入手するための縄文前期ネットワークとも言うべき西北九州・中九州まで広がる一大ネットワークが存在していたことを指摘していた。今回平戸瀬戸に面する供養川遺跡と昨年調査した千里ヶ浜遺跡の例から潮の流れを利用した海洋文化を強く意識するようになり，そのバックボーンなしにはプロト曽畑式土器と曽畑式土器は成り立たなかったのではないかと考えている。

また，福田は西北九州の前期遺跡が海面下にあることにも触れ（福田2002），縄文早期から前期の県内での海際の遺跡の状況を２，３提示している。

本県下で海面下で発見された遺跡の中でも一番下位にあるものとして，水面下－25ｍのところで確認された鷹島海底遺跡があり，この遺跡から出土する押型文土器の出土から縄文早期中葉のころ，現在の水面下－25ｍの地帯は，陸化していたこと。大村市の玖島城跡では，標高０ｍ地帯以下の部分から縄文早期終末期の土器や石器が出土していること。多良見町伊木力遺跡では標高０ｍから－１ｍ前後に縄文前期轟Ｂ式土器段階のドングリピットを確認していること。この３遺跡の例から，縄文早期中葉には少なくとも－25m 地帯までは陸化していたが，その後に海進が急速に進んだことそして，その後海退したことを指摘する。つぐめのはな遺跡の早期後半～末以前に海進のピークがあり，玖島城跡の早期末には～供養川遺跡の，前期中葉のプロト曽畑式土器の段階ないしは前期の始めには，また海退が始っていることが考えられる。

今回の調査で曽畑式土器の下層からプロト曽畑式土器である西唐津式土器が出土したわけであるが，韓国の研究者である鄭澄元・河仁秀によれば（鄭澄元・河仁秀2002），曽畑式土器の先行形式である西唐津式土器を南海岸の瀛仙洞式土器文化の一部要素が在地化したものとみれば，新石器時代の韓日交流関係は櫛文土器前期段階に最も密接になっていったとすることができると述べている。現時点では，彼我の土器の関係について日韓両国研究者の共通認識をもつまでには至っていない状況で，今後の研究の進展を待つしかないというところであろう。

【参考・引用文献】

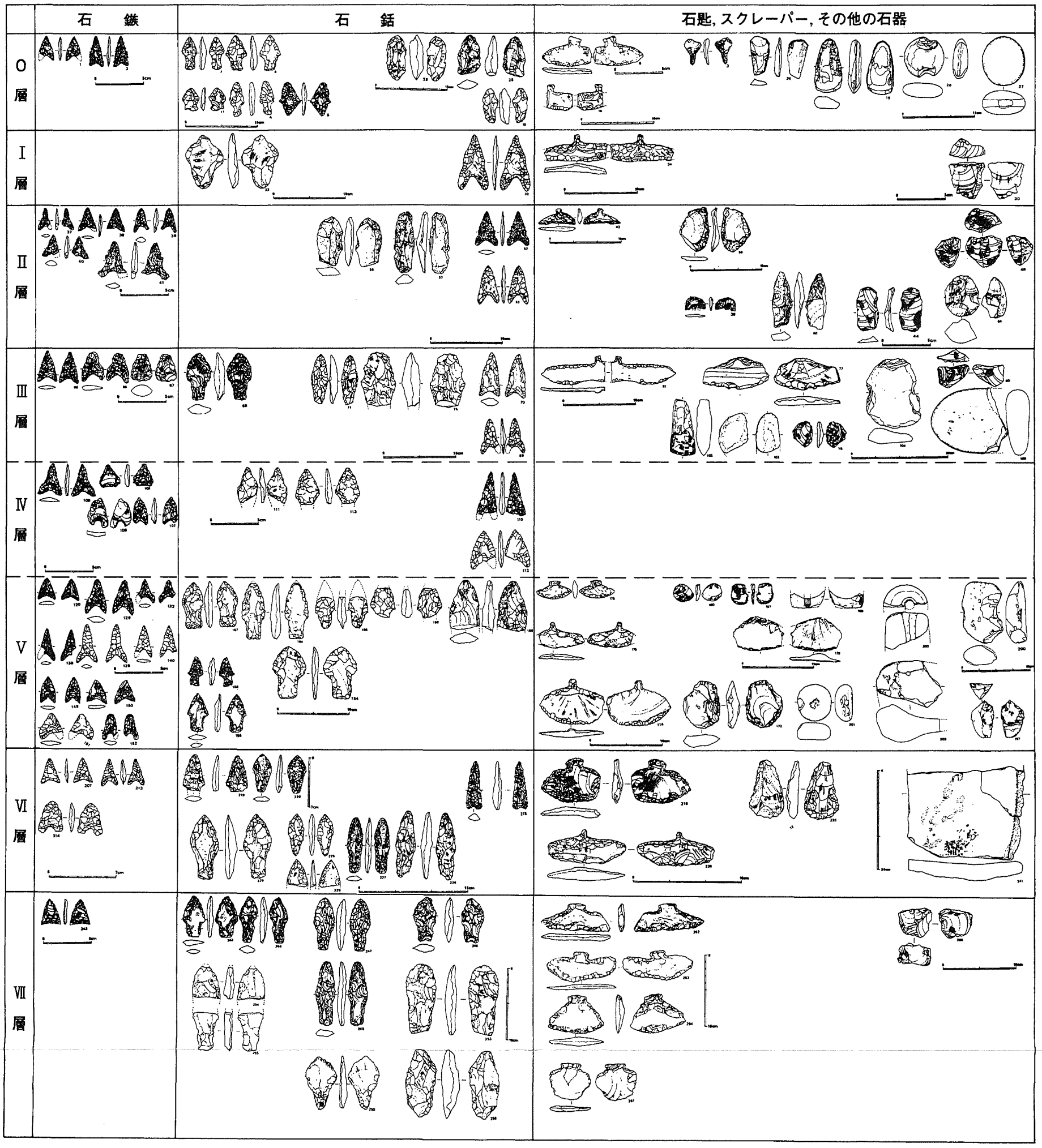
正林護・村川逸朗編 1986『つぐめのはな遺跡』　長崎県教育委員会

福田一志編 2002『千里ヶ浜遺跡』 長崎県教育委員会

鄭澄元・河仁秀2002「九州出土韓国系櫛文土器に対する若干の意見」『先史時代の日韓交流試論』

註１　ここでのべる鎌崎型スクレーパーというのは，あくまでもつぐめのはな遺跡出土の有茎石銛とセットをなすもののことで，供養川遺跡Ⅳb層のものを鎌崎型スクレーパーと呼称するかどうかは，今後整理した上で考えてみたい。

第45図　つぐめのはな遺跡出土石器一覧



Ⅱ層は，滑石粉末を混入した太形凹文の阿高式系土器石鏃・石銛・石鋸・石匙等

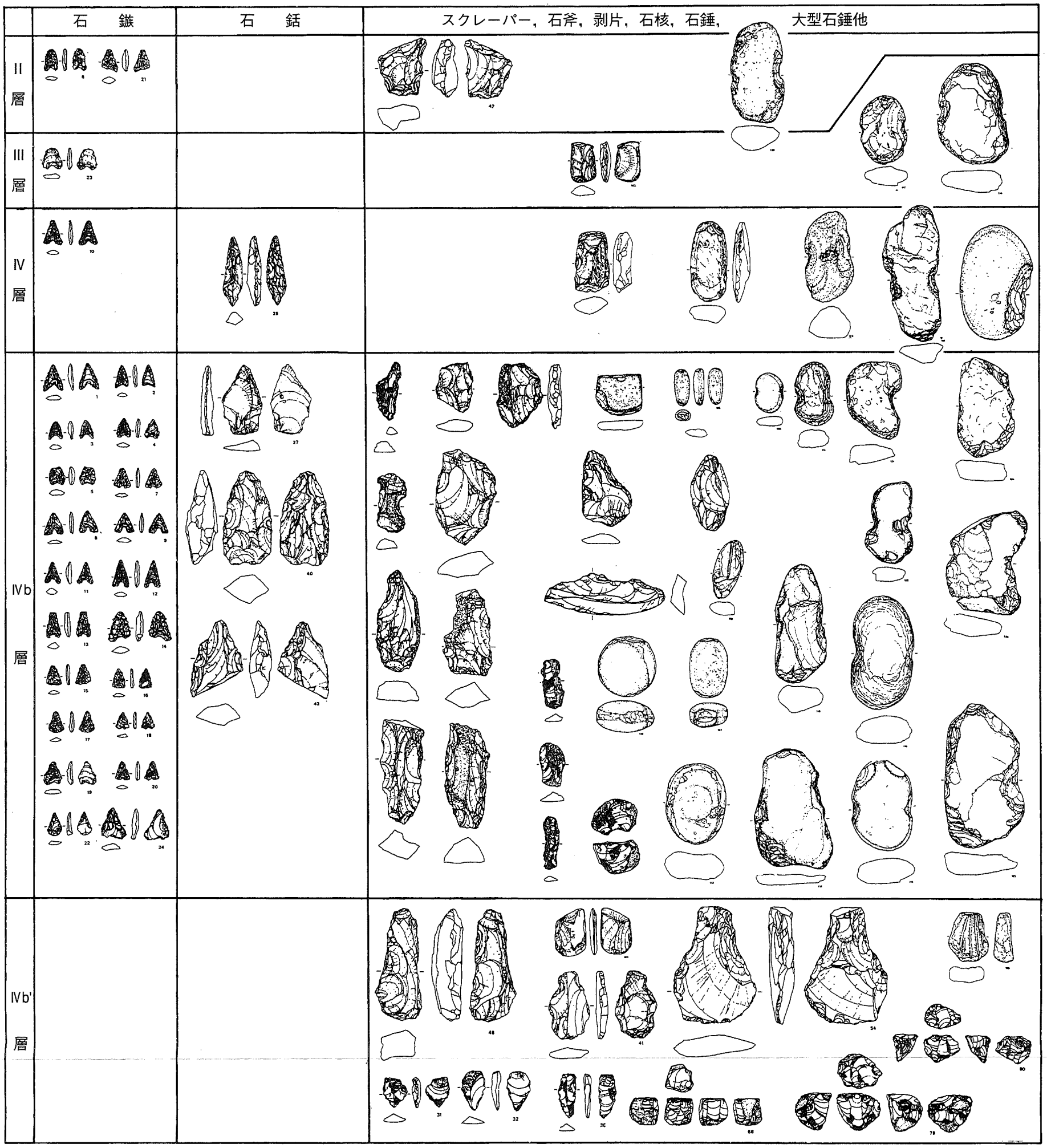
Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は，轟B式を含む轟式系の土器が最も多い。石器はⅡ層と同じものに加えて大形石錘がある。

Ⅳ層では，南九州系の平栫式土器が出土している。他に爪形や4条の刺突点列をもつ土器もみられる。

轟B式土器は1点のみの出土で，Ⅴ層以上の状態とは状況が異なっている。

Ⅶ層では，南九州系の塞ノ神土器や突瘤が内面に突出している土器等がある。

第46図　供養川遺跡出土石器一覧



Ⅱ層は，縄文・近世・現代の遺物が出土。撹乱層。

Ⅲ層は，縄文（第Ⅳ群曽畑Ⅲ式土器・元船式・春日式土器）・近世の遺物が出土。撹乱層。

Ⅳａ層は，第Ⅳ群・曽畑式土器が出土

Ⅳｂ層は，第Ⅳ群・曽畑式土器が出土。(5,900±60y.　B.P.）補正値

Ⅳｂ層下層に厚さ10cmの無遺物層あり。

Ⅳｂ'層は，第Ⅲ群・西唐津式土器が出土。

※Ⅳb'層の調査面積はⅣb層の1／10程であり，石器群の全てを網羅しているものかは不明である。

附　編
自然科学分析

長崎県、供養川遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．供養川遺跡の火山灰分析

1．はじめに

九州地方北西部に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、阿蘇、雲仙、姶良、鬼界、などのカルデラ火山などから噴出したテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層が認められた平戸市供養川遺跡においても、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を求め、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、G・H-1区北壁である。

2．テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

G・H-1区北壁において発掘調査の担当者により採取された試料のうち、Ⅳc層（試料４～６）の３点について、テフラ検出分析を行って、テフラの降灰層準と特徴の把握を試みた。分析の手順は次の通りである。

1）試料15gを秤量。

2）超音波洗浄装置により泥分を除去。

3）80°Cで恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。いずれの試料にも、厚手で、無色透明、淡褐色、褐色を呈するバブル型ガラスが少量ずつ含まれている。

3．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象となった試料のうち、最下位の試料６について屈折率測定を行い、指標テフラとの同定の精度を向上させることにした。測定は、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

（2）測定結果

試料６に含まれる火山ガラス（最大径1.2mm）の屈折率（n）は、1.498-1.508である。重鉱物としては、斜方輝石や角閃石がごく少量ずつ含まれている。ただ量が非常に少ないために、斜方輝石や角

閃石の屈折率の測定は困難である。この試料には、高温型石英も少量含まれている。

4．考察

G・H-1区北壁の試料6に含まれる火山ガラスは、その屈折率から複数のテフラに由来すると考えられる。それらのうち、屈折率が低い火山ガラスについては、約9～9.5万年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界葛原テフラ（K-Tz，町田ほか，1983，Nagaoka，1988，Machida，1999）や、約2.4～2.5万年前*1に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，村山ほか，1993，池田ほか，1995）に由来する可能性が考えられる。

一方、屈折率が高い火山ガラスについては、約8.4～8.9万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4火山灰（Aso-4，町田ほか，1985，Machida，1999）や、約6,300年前*1に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に由来する可能性が考えられる。

今回検出された火山ガラスは、いずれも厚手であることから、以上のテフラのうちATやK-Ahに由来する火山ガラスが混在している可能性が高い。このことから、試料6より上位の堆積層については、K-Ahより上位の可能性が考えられる。なお、より高精度のテフラ同定には、EPMA（エレクトロンプローブX線マイクロアナライザー）による火山ガラスの主成分化学組成分析が有効と考えられる。

5．小結

供養川遺跡において、テフラ検出分析と屈折率測定を行った。その結果、鬼界葛原テフラ（K-Tz，約9～9.5万年前）、阿蘇4火山灰（Aso-4，約8.4～8.9万年前）、姶良Tn火山灰（AT，2.4～2.5万年前*1）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前*1）に由来する可能性のある火山ガラスなどが検出された。Ⅳb'層の堆積層については、K-Ahより上位の可能性が考えられる。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代.

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法ー研究対象別分析法」，p.138-148.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法によるC年代．第四紀研究，34，p.377-379.

Machida，H.（1999）Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan:recent progress. Quat.Res.38, p.194-201.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰ー姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・長岡信治（1983）広域テフラによる南関東と南九州の後期更新世海成段丘の対比．日本第四紀学会講演要旨集，no.13，p.45-46.

町田　洋・新井房夫・百瀬　貢（1985）阿蘇４火山灰ー分布の広域性と後期更新世示標層としての意義ー．　火山，30，p.49-70.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79- 83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討ータンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の^{14}C年代．地質雑，99，p.787-798.

Nagaoka, S.(1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geogr.Rept.Tokyo Metropol.Univ., 23, p.49-122.

表１　G・H－1区北壁におけるテフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	形態	色調
4	－	－	－	＋	bw	透明，淡褐
5	－	－	－	＋	bw	透明，褐
6	－	－	－	＋	bw	透明，淡褐

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．最大径の単位は，mm．bw：バブル型．

表２　G・H－1区北壁における屈折率測定結果

試料	火山ガラス（n）	重鉱物	斜方輝石（γ）	角閃石（n_2）
6	1.498－1.508	(opx，ho)	－	－

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．

Ⅱ．供養川遺跡における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	G・H−2区，Ⅳb層	貝殻（アワビ）	酸によるエッチング，ベンゼン合成	β線計数法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定No.（Beta−）
No.1	5470±50	＋1.0	5900±60	交点：cal BC 4340 1σ：cal BC 4430〜4320 2σ：cal BC 4480〜4240	174673

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

文献

Stuiver, M., et. al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

Ⅲ．供養川遺跡における植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、Ｇ・Ｈ-1区北壁から採取された６点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）の換算係数は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科ータケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

未分類等

〔樹木〕

その他

（２）植物珪酸体の検出状況

Ⅳb層からⅣb'層までの層準について分析を行った。その結果、Ⅳb'層下部（試料４～６）ではイネ科（未分類等）が検出され、試料４ではウシクサ族Ａやタケ亜科（未分類等）も検出されたが、いずれも少量である。また、各試料から海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか，1979）が比較的多く検出された。Ⅳｂ'層（試料３）でも、おおむね同様の結果であるが、同層ではクマザサ属型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）も出現している。Ⅳb層（試料１、２）では、イネ科の植物珪酸体はまったく検出されなかった。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

Ⅳｃ層およびⅣｂ'層（西唐津式土器包含層）の堆積当時は、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられるが、Ⅳc層の時期には周辺でクマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのササ類が見られるようになり、何らかの樹木も生育していたと推定される。また、各層とも海綿骨針が比較的多く検出されることから、当時は何らかの海水の影響を受けていた可能性が考えられる。その後、Ⅳb層（曽畑式土器包含層）の時期には、海面上昇など何らかの原因で、イネ科植物の生育には適さない環境になったと推定される。

文献

宇津川徹・細野衛・杉原重夫（1979）テフラ中の動物珪酸体"Opal Sponge Spicules"について．ペドロジスト，第23巻 第２号，p.134-144.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

表１　長崎県、供養川遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	G・H−1区北壁					
			1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae(Grasses)							
ウシクサ族A	Andropogoneae A type					15		
タケ亜科	Bambusoideae(Bamboo)							
クマザサ属型	Sasa(except *Miyakozasa*)				8			
ミヤコザサ節型	Sasa sect.*Miyakozasa*				8			
未分類等	Others				8	7		
その他のイネ科	Others							
未分類等	Others				15	15	8	8
樹木起源	Arboreal							
その他	Others				7			
(海綿骨針)	Sponge		37	113	113	120	143	53
植物珪酸体総数	ToTal		0	0	38	37	8	8

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m^2・cm）

クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	0.06
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.02

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	71
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	29

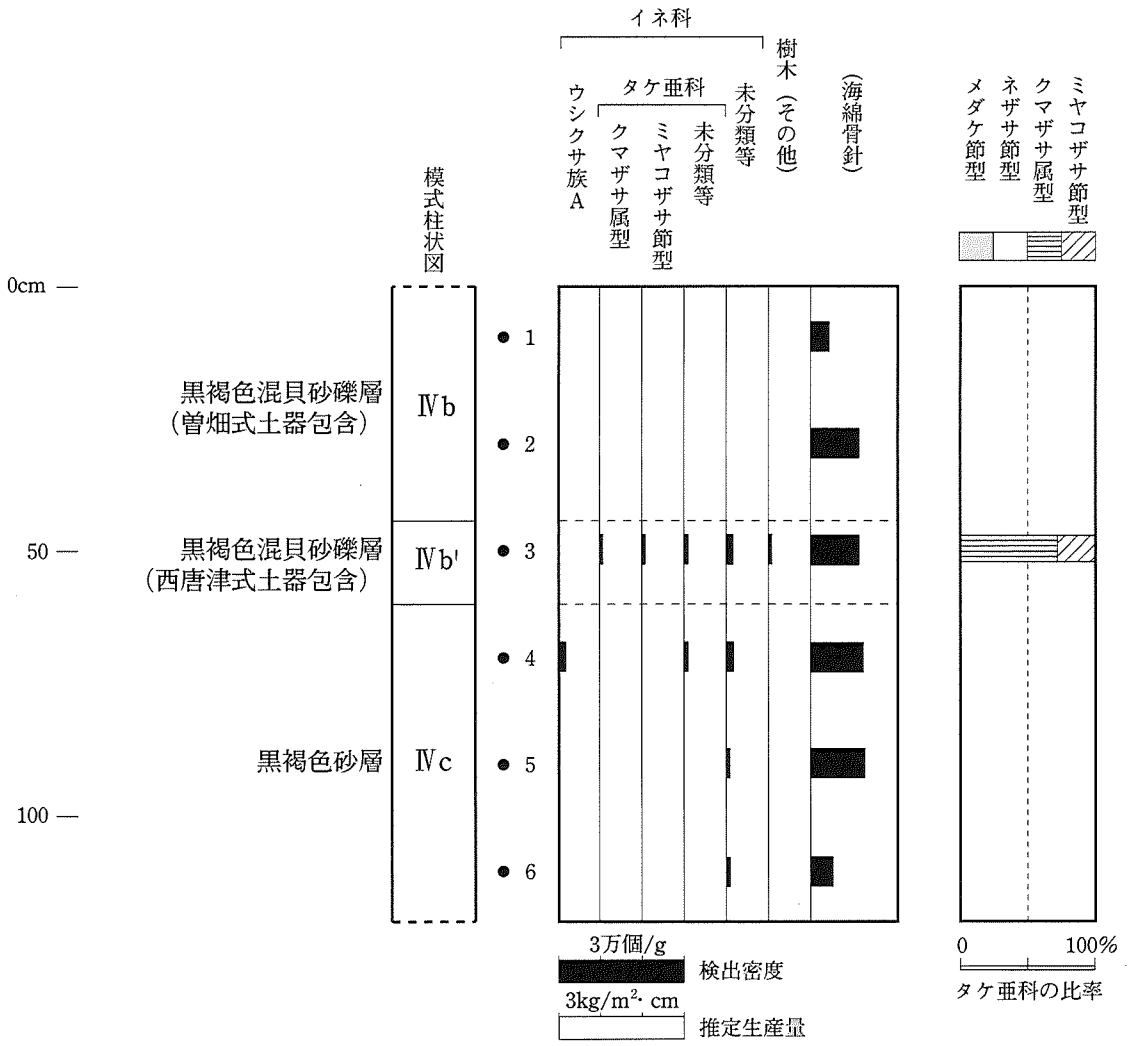
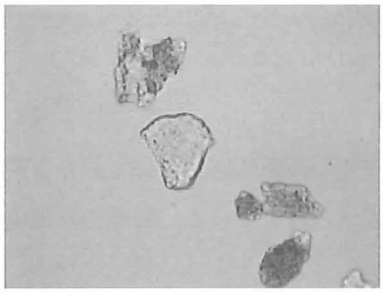
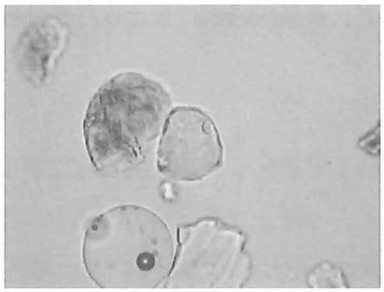


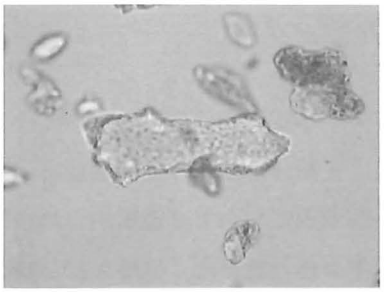
図１　供養川遺跡、G・H－1区北壁における植物珪酸体分析結果



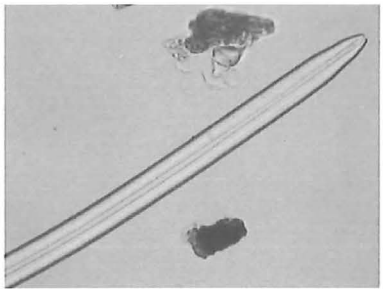
ウシクサ族A
試料4



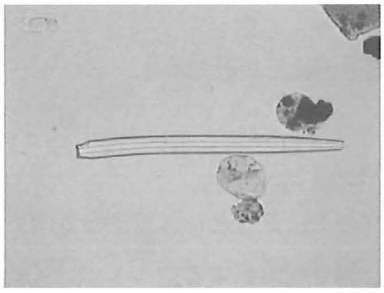
ミヤコザサ節型
試料3



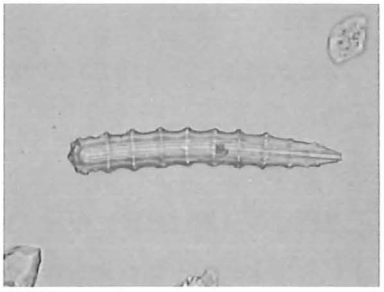
樹木（その他）
試料3



海綿骨針
試料3



海綿骨針
試料2



海綿骨針
試料4

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　———— 50 μm

Ⅳ．供養川遺跡における花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解して残存していない場合もある。

2．試料

分析試料は、G・H-1区北壁から採取された6点である。

3．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え、15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて、30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製する。

7）検鏡・計数を行う。

各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

4．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉８、シダ植物胞子２形態の計31である。分析結果を表１に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、モチノキ属、ブドウ属、ハイノキ属、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ギシギシ属、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、ノブドウ、セリ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

鞭虫卵

（2）花粉群集の特徴

各試料とも花粉密度が低い。Ⅳc層（試料5、6）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりも極めて高い。樹木花粉では、シイ属-マテバシイ属が優占し、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属も比較的多い。また、クリ、エノキ属ームクノキ、モチノキ属なども伴われる。草本花粉は低率であり、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科などが出現する。Ⅳc層（試料4）では、マツ属複維管束亜属が減少し、シイ属ーマテバシイ属が増加する。草本花粉では、イネ科やカヤツリグサ科が減少する。Ⅳc層（試料4）とⅣb層下部（試料3）では、Ⅴ層上部と同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。Ⅳb層上部（試料1）では、ⅣC層上部とおおむね同様であるが、エノキ属-ムクノキが増加し、マツ属複維管束亜属は減少している。

5．花粉分析から推定される植生と環境

Ⅳb'層下部の堆積当時は、おもにシイ属-マテバシイ属を主体としてコナラ属アカガシ亜属（カシ類）なども見られる照葉樹林が分布していたと考えられ、海岸沿いや岩場などにはマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツ）、人里の周辺などにはクリも生育していたと推定される。また、林縁など比較的日当たりの良いところには、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科などの草本類が分布していたと考えられる。Ⅴ層上部の時期には、シイ属-マテバシイ属などの照葉樹林がさらに拡大し、草本類はほとんど見られなくなったと推定される。

Ⅳb'層（西唐津式土器包含）からⅣb層（曽畑式土器文化期包含層）にかけては、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、Ⅳc層とおおむね同様の植生であった可能性が考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことや、水流などによって花粉が淘汰されたことなどが考えられる。

Ⅳb層（曽畑式土器文化期包含層）の堆積当時は、おもにシイ属-マテバシイ属を主体としてコナラ属アカガシ亜属（カシ類）なども見られる照葉樹林が分布していたと考えられ、部分的にエノキ属-ムクノキなどが生育する肥沃な適潤地も見られたと推定される。

文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表１　供養川遺跡G・H－1区北壁における花粉分析結果

分類群		Ⅳb層		Ⅳb'層	Ⅳc層		
学名	和名	1	2	3	4	5	6
Arboreal pollen	樹木花粉						
Podocarpus	マキ属	2		1			3
Abies	モミ属		1				
Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属	6	5	7	12	25	17
Cryptomeria jaonica	スギ	2	1		1	2	1
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1					
Platycarya strobilacea	ノグルミ						1
Alnus	ハンノキ属	3		1			
Betula	カバノキ属	2	2		1	1	1
Corylus	ハシバミ属	1	1				
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ			2			
Castanea crenata	クリ		2	1	4	3	8
Castanopsis	シイ属-マテバシイ属	56	22	16	56	35	43
Quercus subgen.Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1		3	3	2	1
Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	22	11	17	14	13	14
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ				1		
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	17	5	3	3	5	3
Ilex	モチノキ属	1			5	2	2
Vitis	ブドウ属		1				
Symplocos	ハイノキ属	1					
Sambucus-Vibrnum	ニワトコ属-ガマズミ属				1	1	
Arboreal・Nonarboreal pallen	樹木・草本花粉						
Araliaceae	ウコギ科	1					
Nonarborea pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	2	1	2		2	4
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1				4	2
Rumex	ギシギシ属	2	1				1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1		1	1	4	1
Cruciferae	アブラナ科				2		
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	1					
Apioideae	セリ亜科				1		
Arteisia	ヨモギ属					1	
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	5		2	2	7	6
Trilate type spore	三条溝胞子	2	15	2	2	2	2
Arboreal pollen	樹木花粉	115	51	51	101	89	94
Aeboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1					
Nonarboreal pollen	草本花粉	7	2	3	4	11	8
Total polle	花粉総数	123	53	54	105	100	102
Unknown pollen	未同定花粉	4	1	3	1	2	6
Fern spore	シダ植物胞子	7	15	4	4	9	8
Helminth eggs	寄生虫卵						
Trichuris	鞭虫卵	1	2	2	2		1
	明らかな消化残渣	(–)	(–)	(–)	(–)	(–)	(–)

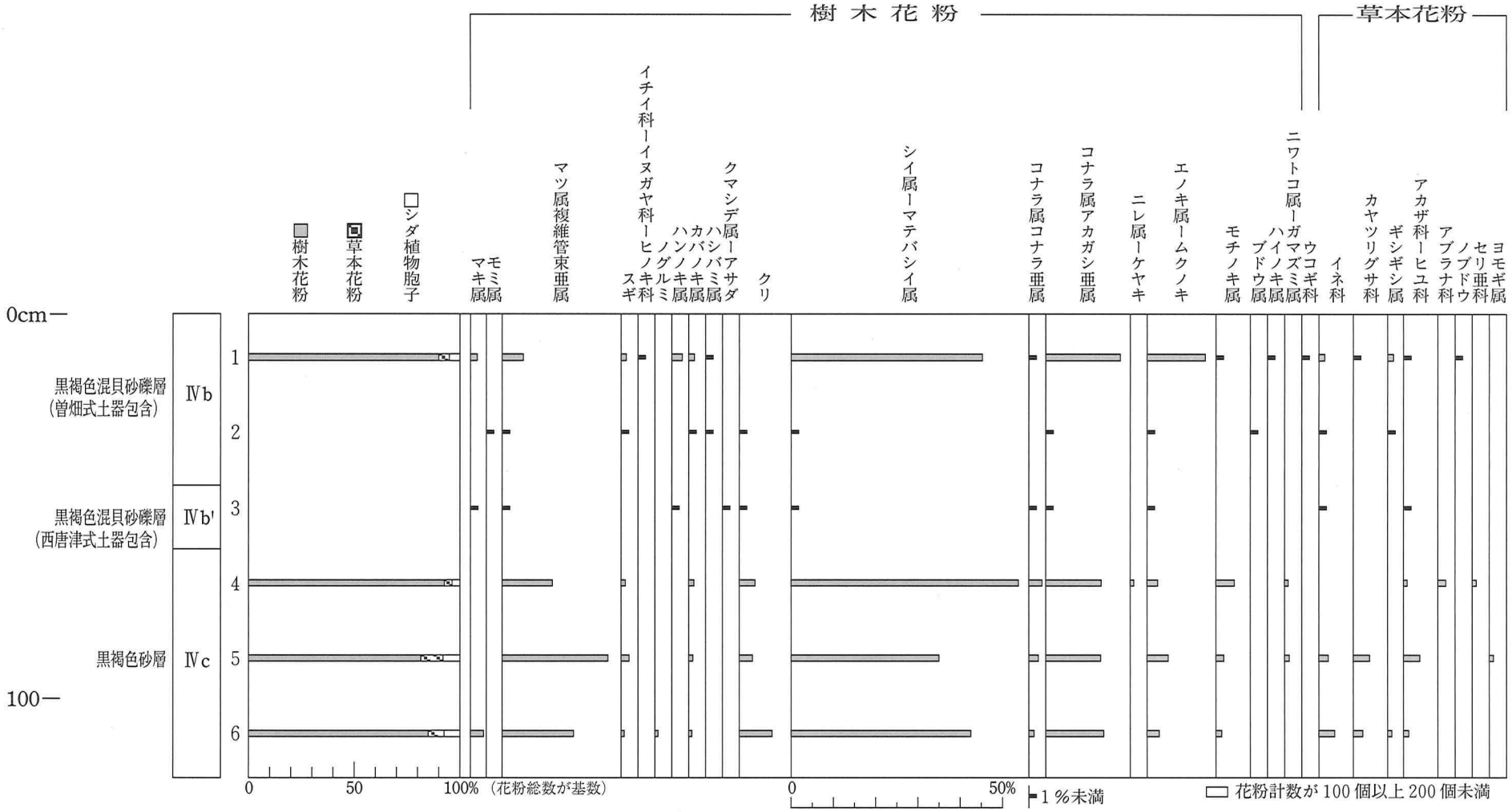
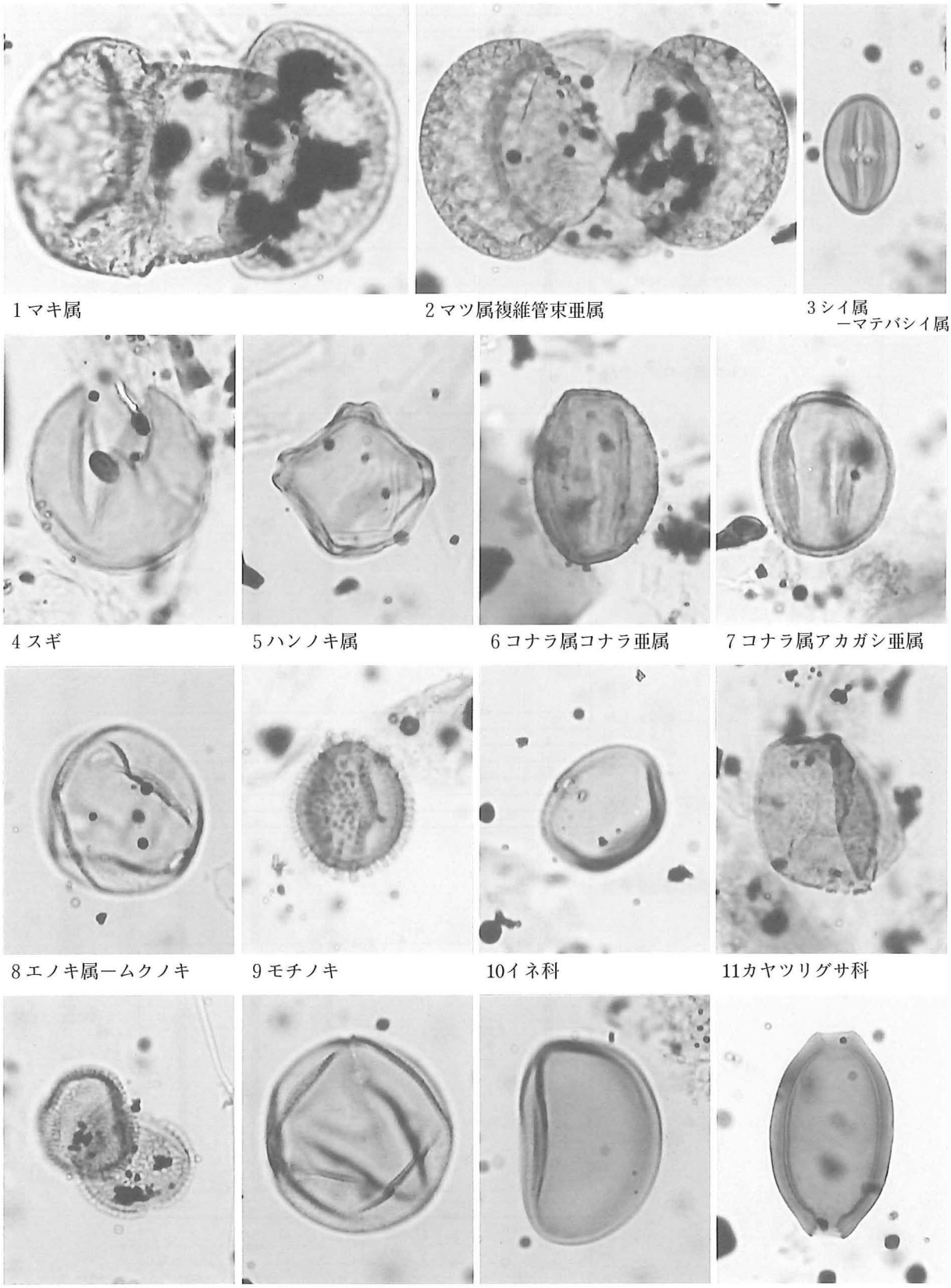


図1　供養川遺跡、G・H－1区北壁における花粉ダイアグラム

供養川遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵



1マキ属　2マツ属複維管束亜属　3シイ属ーマテバシイ属

4スギ　5ハンノキ属　6コナラ属コナラ亜属　7コナラ属アカガシ亜属

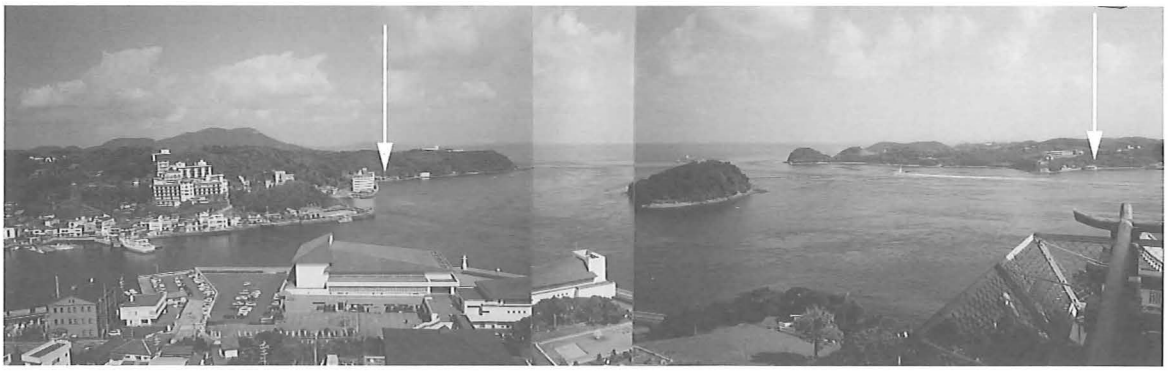
8エノキ属ームクノキ　9モチノキ　10イネ科　11カヤツリグサ科

12アブラナ科　13ギシギシ属　14シダ植物単条溝胞子　15鞭虫卵

―― 10 μm

図　　版

供養川遺跡　　つぐめのはな遺跡



平戸瀬戸に臨む供養川遺跡とつぐめのはな遺跡

ＴＰ．３完掘状況

ＴＰ．５状況

時期不明石垣

満潮時の調査区への潮の流入

Ｇ－1・2区西壁

Ｈ－1・2区東壁

遺跡遠景と試掘・本調査状況

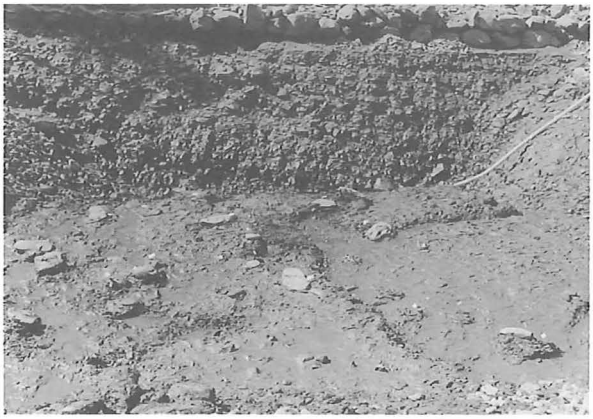
図版 2

B—1・2区南壁

C—1・2区北壁

J・K—1区で検出した石垣遺構

H～J—1区で検出した石垣遺構及び側溝



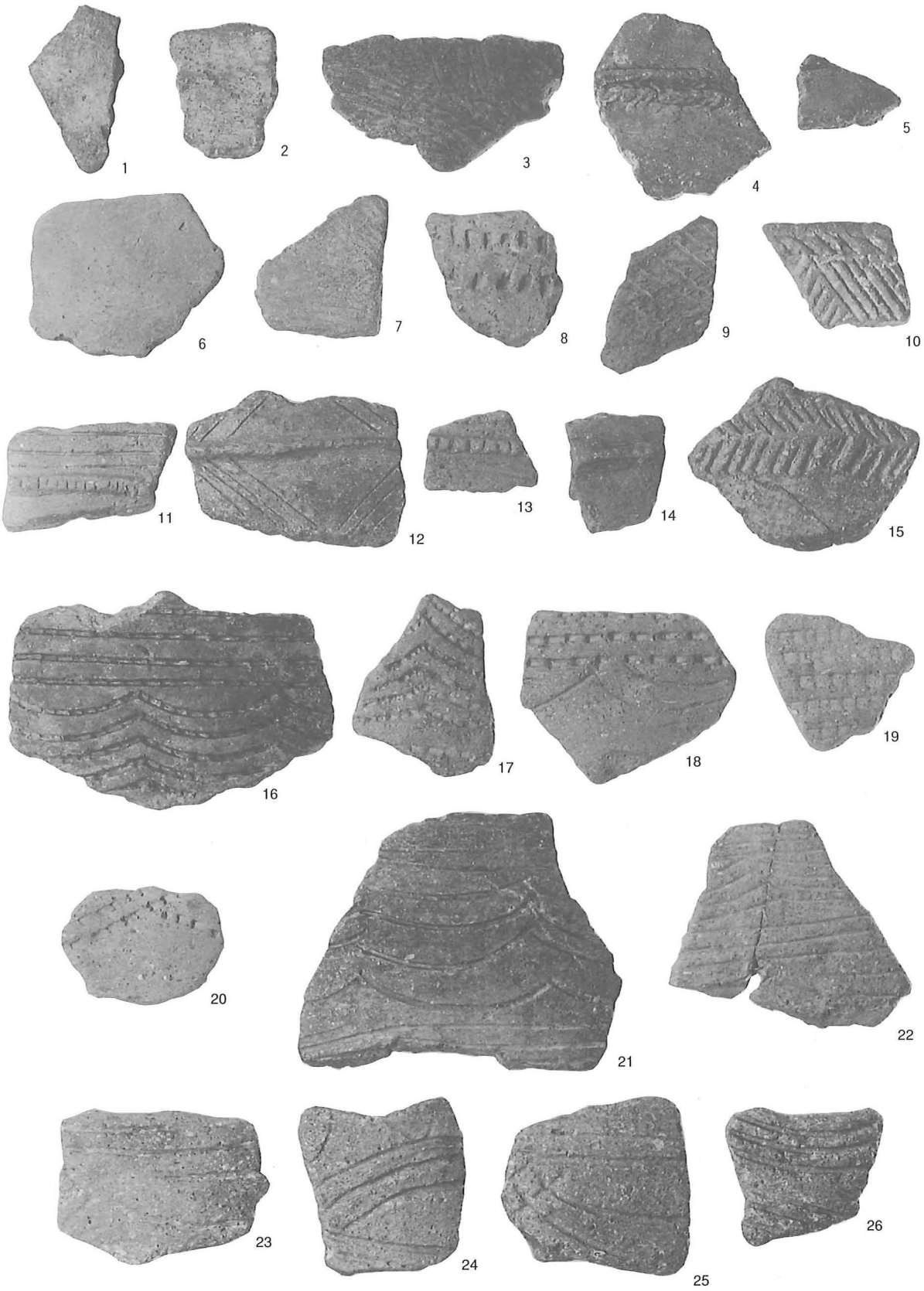
G・H—2区Ⅳb層遺物出土状況

G—1区Ⅳb'層西唐津式土器出土状況

G—2区Ⅳb層貝出土状況

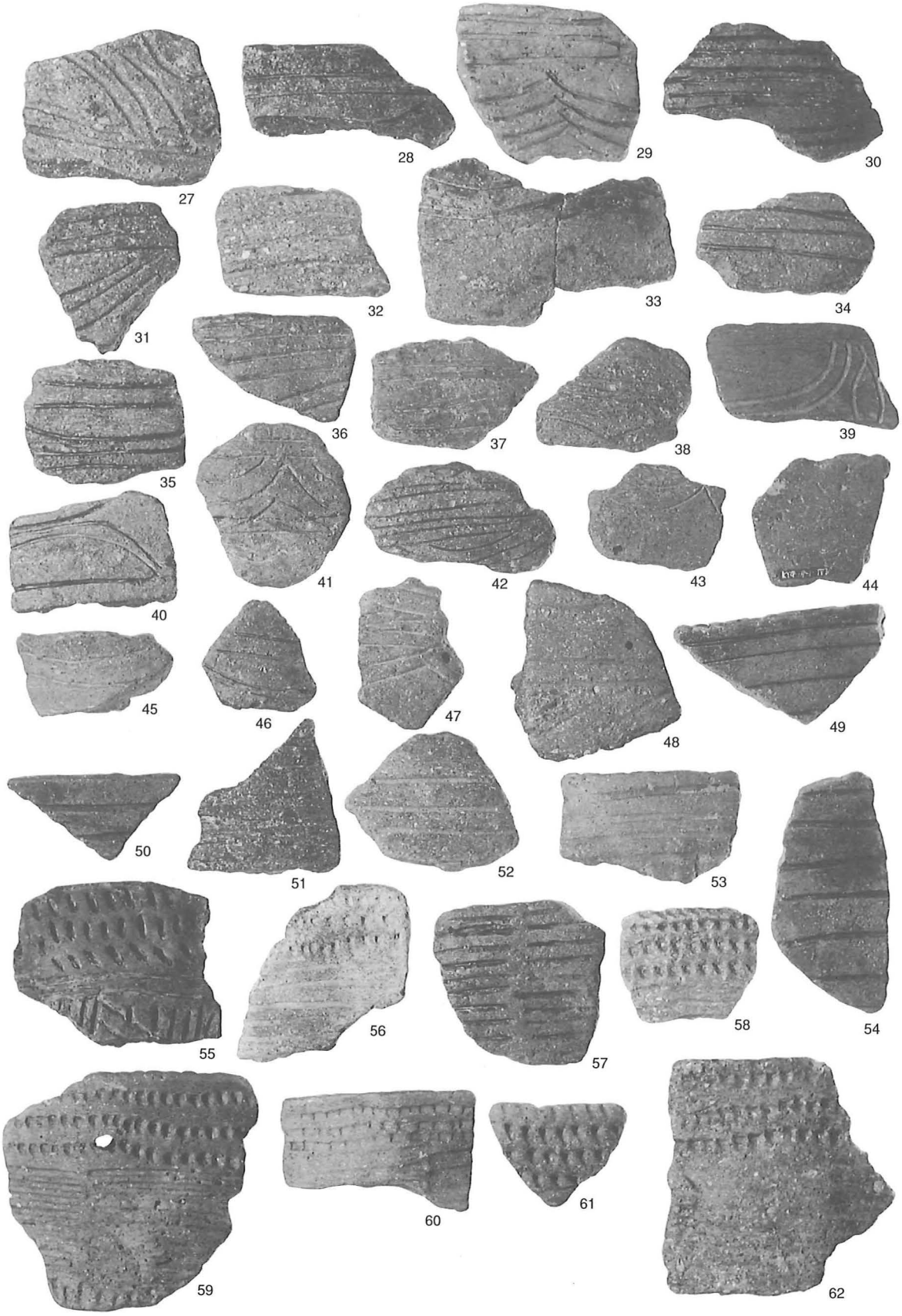
G・H—2区Ⅳb層大型石錘出土状況

土層及び遺構・遺物検出状況

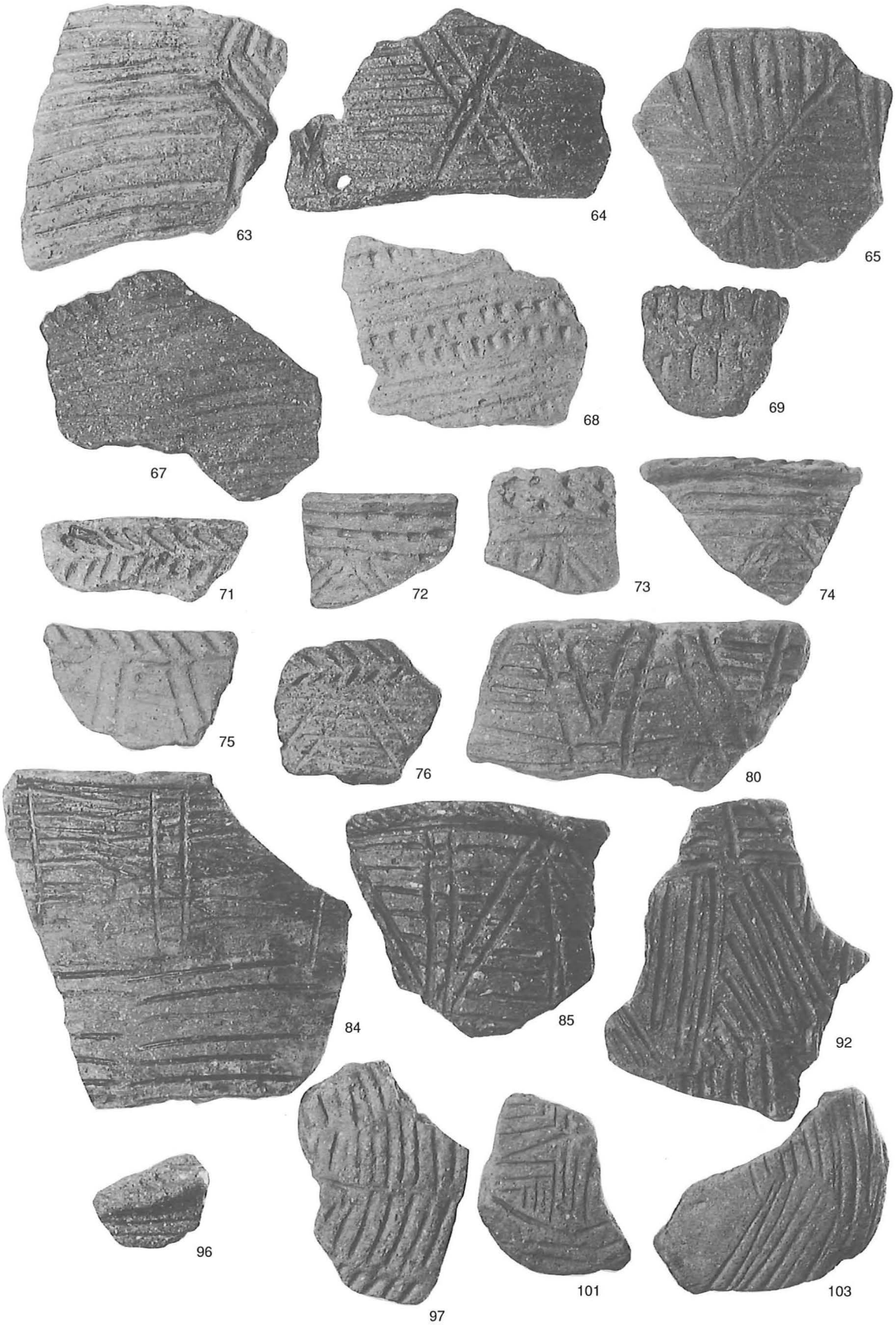


出土土器（1）

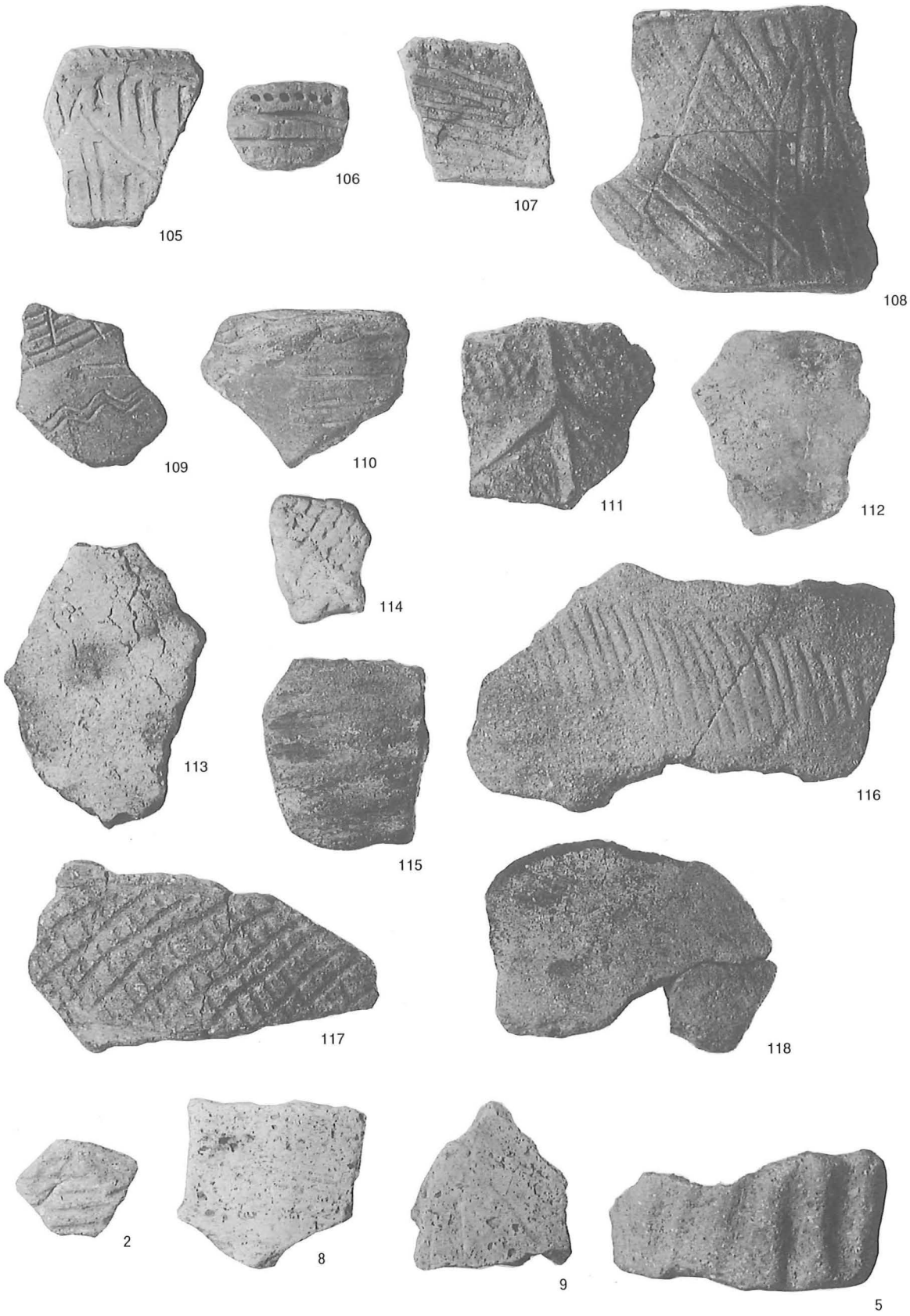
図版 4


27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62

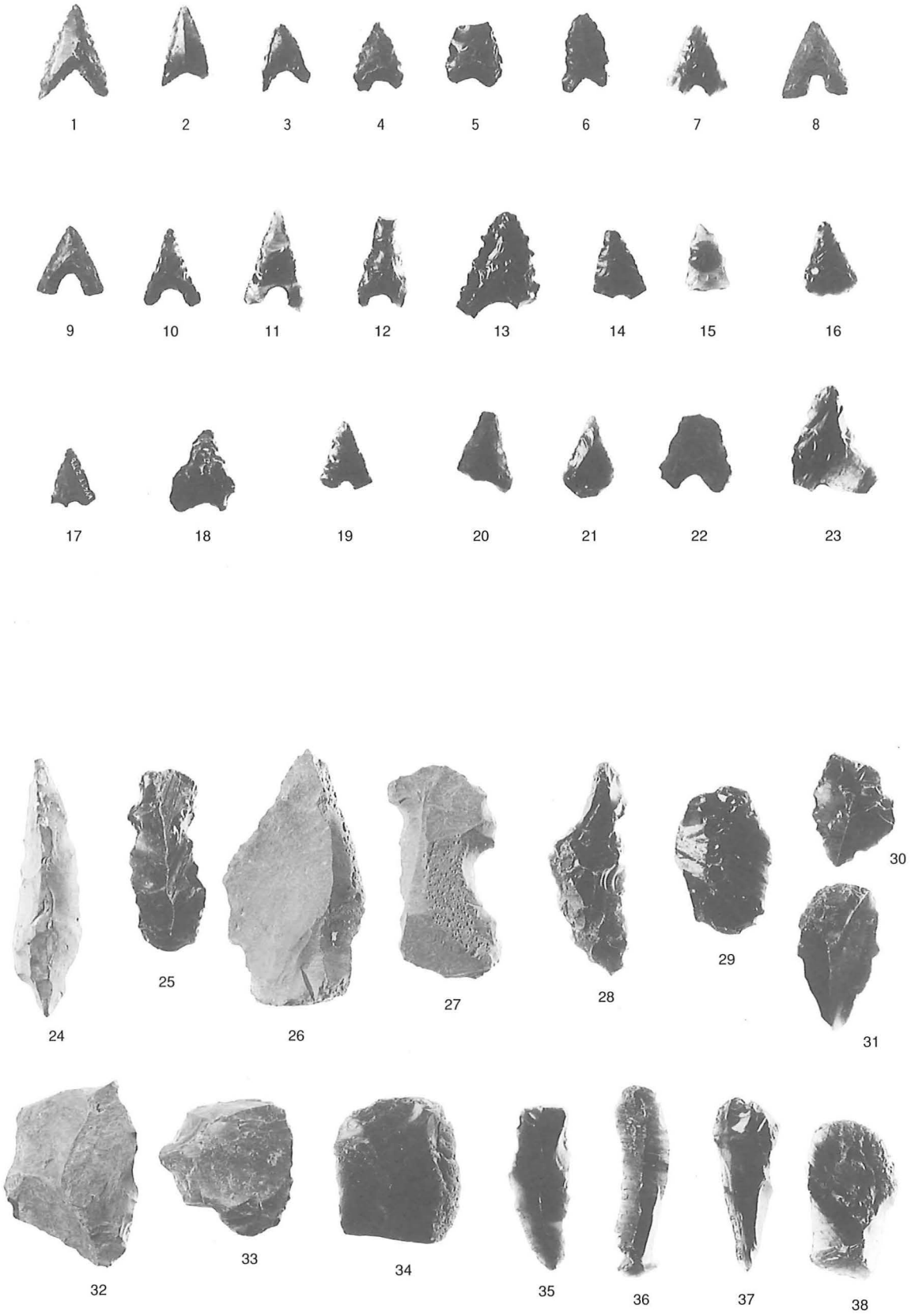
出土土器（2）



出土土器（3）

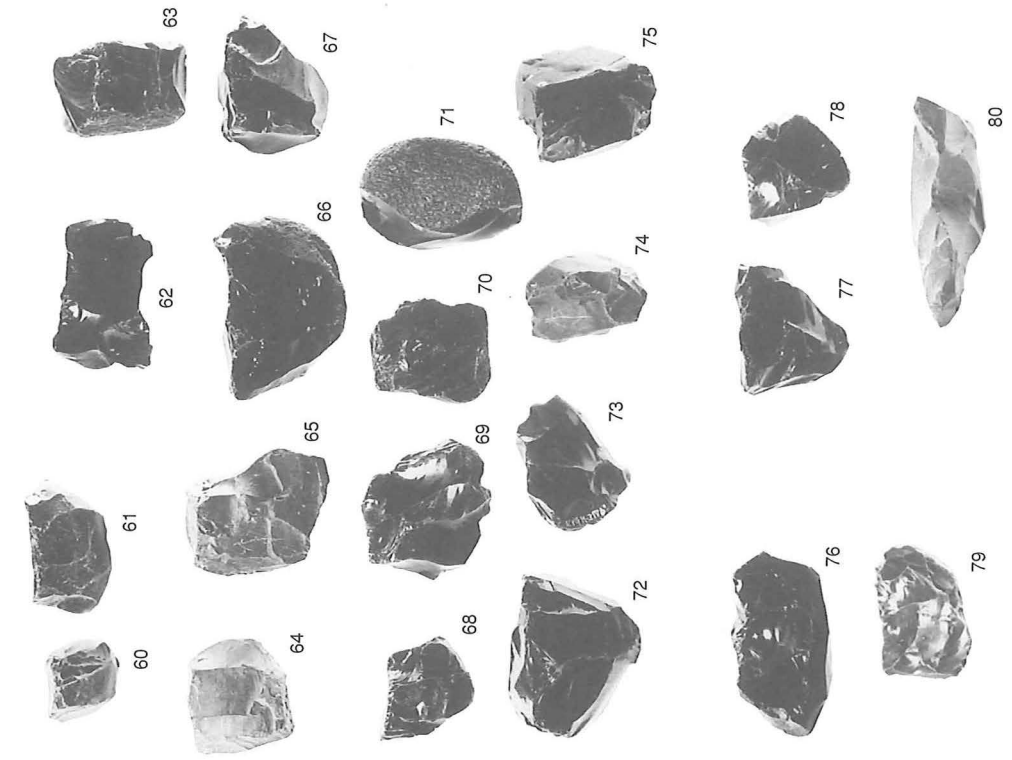


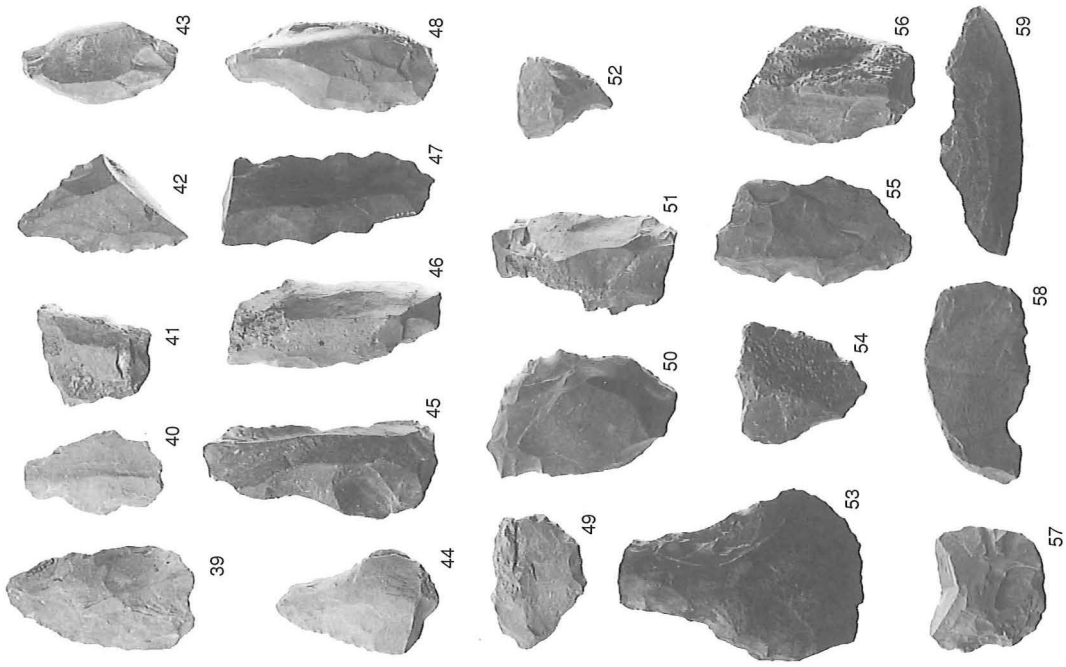
出土土器（4）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

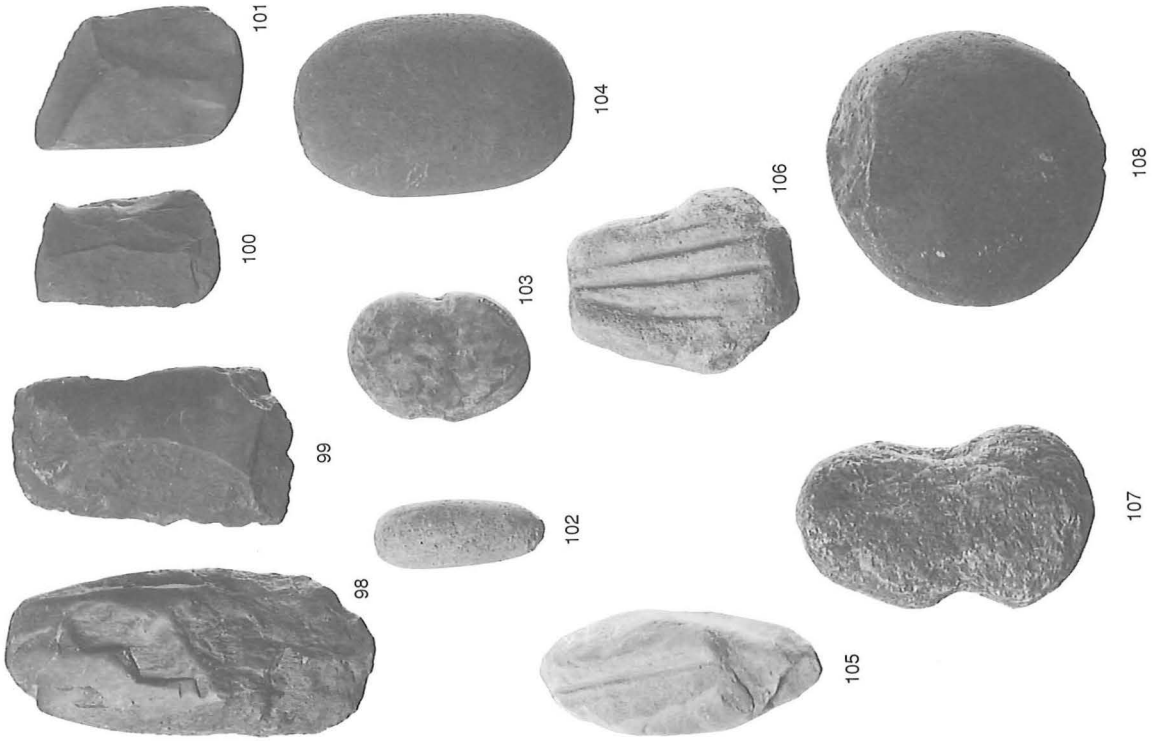
出土石器（1）

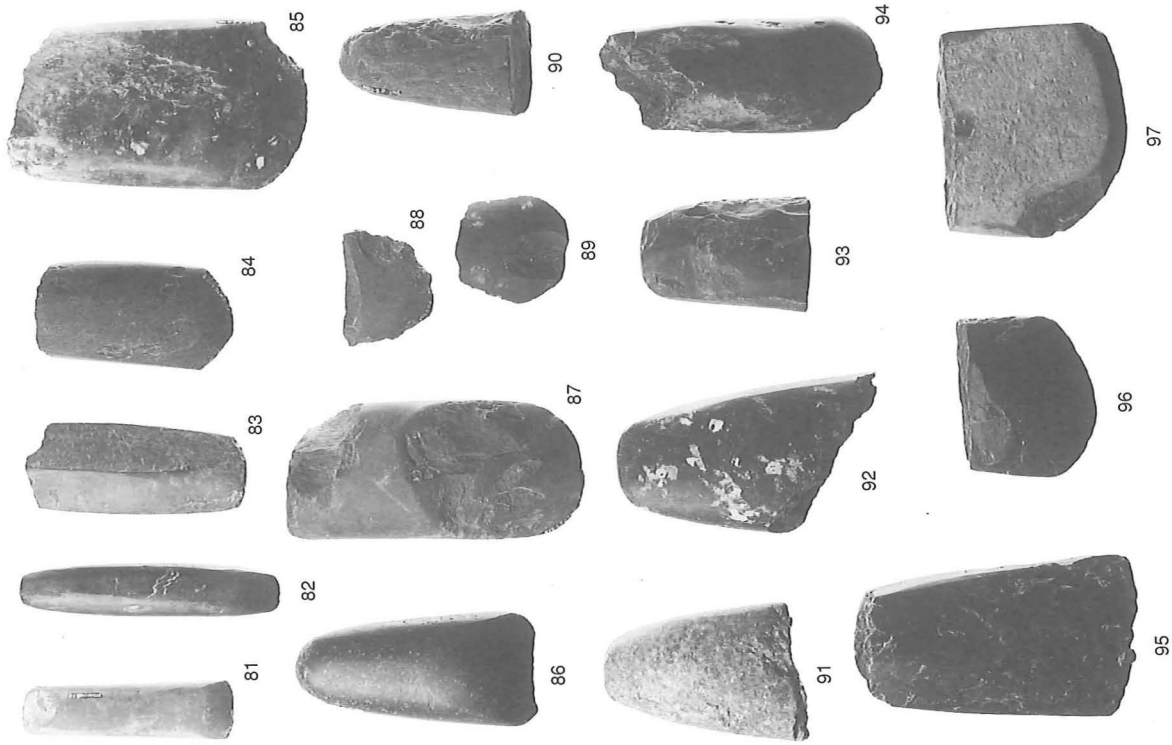
図版 8


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80


39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59

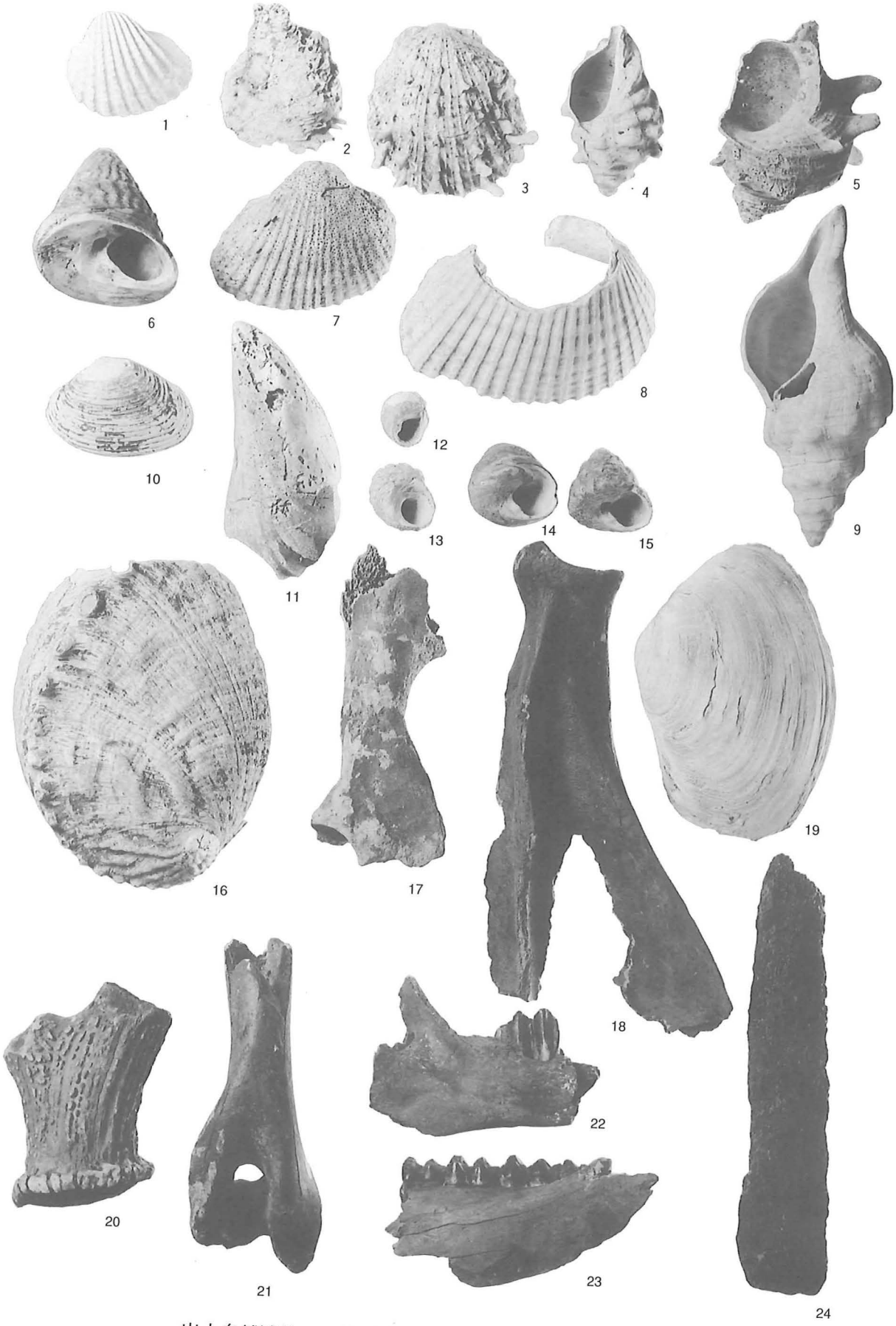
出土石器（2）


98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108


81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97

出土石器（3）

図版10



出土自然遺物・貝輪（8）・鯨骨製アワビオコシ（24）

報告書抄録

ふりがな	くようがわいせき
書名	供養川遺跡
副書名	
巻　次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第174集
編著者名	村川逸朗・井立　尚・樋口健太郎
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒856-8570　長崎県長崎市江戸町２－１３　TEL095-826-5010
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くようがわいせき	ひらどし おおくぼくようがわ	市町村	遺跡番号	33° 22′ 26″	129° 33′ 41″	20020603 ～ 20020820	710m²	港湾整備
所収遺跡名	所在地	7－59	51－36					
供養川遺跡	平戸市字大久保供養川							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
供養川遺跡	遺物包含地	縄文時代前期		縄文時代前期土器 石器	曽畑式土器と西唐津式土器の文化層が分層できたこと。

長崎県文化財調査報告書　第174集

供養川遺跡

平成15年3月31日

発　行　長崎県教育委員会
〒850-8570
長崎県長崎市江戸町2番13号
TEL 095-824-1111

印　刷　(有)合同印刷
〒856-0017
長崎県大村市荒瀬町1101－1
TEL 0957-55-1919